

武蔵国分寺跡発掘調査概報

XVII

——東京警察病院多摩分院内下水道管理設に伴う事前調査——

1991年3月

国分寺市遺跡調査会

序

武蔵国分寺跡の調査は、昭和49年11月より継続的な発掘調査に着手し、昭和61年4月に編成された国分寺市遺跡調査会によって、さらに本格的な埋蔵文化財全般にわたる調査を今日に至るまで展開しております。この間には、僧寺・尼寺の寺域および寺地の確認調査を始め、市公共下水道の整備や専用住宅の建設に伴う事前調査などの多岐にわたる調査が行われ、主要遺構の配置状況や武蔵国分寺の規模とその変遷について序々にではありますが解明されつつあります。

この様な状況の中で、東京警察病院の調査は、従来調査される機会の少なかった、尼寺跡西方地域の遺構の分布状況を把握する上で極めて重要な調査でありました。調査の成果は本報告書にも示されておりますように武蔵国分寺創建期の堅穴住居群が検出され、当地の様相の一端が明らかになりました。このことは当地域一帯の集落構造を解明するうえでの貴重な資料を提供するものであります。

最後になりましたが、東京警察病院多摩分院、および調査団、国分寺市教員委員会の方々にはご理解とご協力を賜り、心から御礼申し上げる次第です。

平成3年3月

国分寺市遺跡調査会
会長 星野亮勝

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において昭和48年以来実施されている調査の内、東京警察病院多摩分院内下水道管埋設に伴う調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は、国分寺市西元町4丁目に所在し全面積は465.5㎡である。
3. 発掘より調査報告書作成に係わる費用は東京警察病院多摩分院が負担した。昭和63年6月17日付けで締結した委託契約に基づき、国分寺市遺跡調査会が事業を実施した。
4. 現地における調査は平成元年7月19日より、同年8月21日まで試掘調査を行い、その成果に基づいて、本調査を平成2年5月15日より、同年10月23日まで行った。調査報告書の作成は平成2年8月15日より、平成3年4月19日まで国分寺市遺跡調査会事務所において行った。なお、本調査は第344次調査として実施されたものである。
5. 調査は、試掘調査を上村昌男が担当した。本調査は上敷領久が担当し、有吉重蔵、福田信夫、上村昌男がこれをたすけた。
6. 本書の執筆・編集は滝口宏団長をはじめ、永峯光一、坂詰秀一、大川清各委員の助言と援助のもとに、上敷領久が担当し有吉重蔵、福田信夫、上村昌男、滝島和子がこれをたすけた。
7. 出土遺物の整理は、大澤華子、外谷悦子、村上資子が行った。
8. 発掘調査・報告書作成過程で次の方々の御教示・御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。(敬称略)
早川泉・福田健司・宮瀧由起子・土師由美・杉本良・英太郎・河内公夫・塚原二郎
9. 発掘調査ならびに整理調査に参加、協力いただいた方は下記の通りである。記して感謝いたします。(敬称略) 順不同
〔発掘作業〕
井口正利・赤須敏夫・荒順・増田政之助・斎藤光司・鈴木靖彦・金子浩司・児玉宏幸・守屋邦夫・若林茂・鈴木剛・鈴木稜・豊島威信・福井健二・松澤修・穂積清以
〔整理作業〕 順不同
村上資子・外谷悦子・大澤華子・山口啓子・高橋より子・宍戸和子・庄司由美子・野村美智子・天野光子・佐藤緋佐子

凡 例

本文

1. 遺構は、各遺構毎にはば発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於ては、「S I 410住居跡」・「S D 241溝跡」の様記述した。

S K 土 坑 S I 住居跡・工房跡 S D 溝跡・溝状遺構

2. 遺物の記述は全て一覧表によった。表記方法について説明をする。

(1) 各遺物共通

- イ 遺物番号は、図面番号と対照にした。例えば「26-1」とあれば「図面26-1」を示す。
ロ 出土位置の内、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「カマド内」はカマド構築土内出土。「床面」は床面直上。
ハ 計測値、記号なしは完数值、(())は復元数值、()は残存数值、—は計測不可を表わす。単位はcm。

- (2) 土器類、瓦は、「武蔵国分寺遺跡発掘調査概報V・XIV」の出土遺物の項目に準ずる。

- (3) 石器の分類については、「武蔵国分寺遺跡発掘調査概報VIII」の石器分類に準ずる。

図面・図版

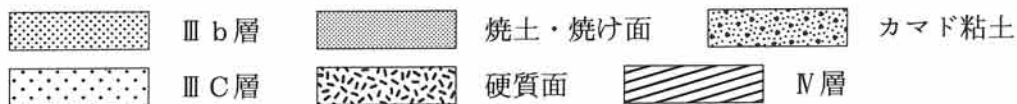
1. 遺 構

- ① 遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南へ26,276mに後者がある。

また、僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7° 08' 03"、磁北から0° 38' 03" それぞれ西偏する。

- ② 断面図表示の数字は水系レベルで、海拔高を示す。

- ③ スクリーントーンの指示は次のとおりである。



- ④ 住居跡平面図に於いて、一点鎖線は床面が堅固な範囲を示す。

- ⑤ 縮尺は次のとおり統一したが、一部異なるものがある。

調査地位置図 1/5000 調査地点全体図 1/1000

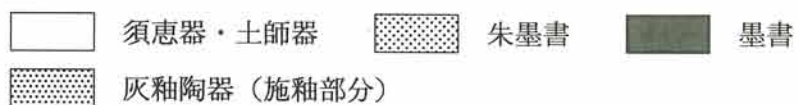
住居跡・溝跡・土坑 1/25・1/50・1/250

- ⑥ 遺構図面内におけるドット図の指示は次のとおりである。

● 土器 ■ 瓦 ▲ 石製品 ★ 鉄製品

2. 遺物

- ① 土器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。



- ② 写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば「11-2」とあれば、「図面11-2」のことを指す。

- ③ 縮尺は次のとおり統一した。

図面 歴史時代 土器 1/3、 瓦・石製品 1/4

縄文時代 土器 1/3、

図版 歴史時代 土器 1/1・1/2 瓦 1/2・1/3・1/4、文字瓦 1/1

- ④ 住居跡内遺物におけるドット図の指示は次のとおりである。

● 土器 ■ 瓦 ▲ 石製品 ★ 鉄製品

本文目次

| | |
|---------------|----|
| 序 | |
| 例言 | |
| 凡例 | |
| I 調査に至る経過 | 1 |
| II 調査地区の概観 | 7 |
| 1. 調査地区の位置・立地 | 7 |
| 2. 層序 | 8 |
| III 発掘経過 | 10 |
| IV 検出遺構 | 17 |
| (1) 歴史時代 | 17 |
| (2) 縄文時代 | 22 |
| V 出土遺物 | 24 |
| VI 小結 | 33 |
| 参考文献 | |

挿 図 目 次

| | | |
|-------|----------------|----|
| 第 1 図 | 遺跡の位置 | 5 |
| 第 2 図 | 調査地位置図 | 6 |
| 第 3 図 | 基本層序模式図 | 8 |
| 第 4 図 | 試掘路線図 | 11 |
| 第 5 図 | 遺構検出地点及び調査区設定図 | 11 |

表 目 次

| | | |
|--------|------------------|----|
| 第 1 表 | 検出遺構一覧表 | 10 |
| 第 2 表 | 試掘調査及び V 路線調査工程表 | 13 |
| 第 3 表 | 本調査工程表 | 15 |
| 第 4 表 | 歴史時代出土遺物一覧表(1) | 25 |
| 第 10 表 | 〃 (8) | 32 |

図 面 目 次

| | |
|-------|------------------------------------|
| 図面 1 | 歴史時代遺構配置図 |
| 図面 2 | 縄文時代遺構配置図 |
| 図面 3 | 縄文時代遺構 (S K 1177・1178・1184・炉跡) 実測図 |
| 図面 4 | I 区 S I 410・411 住居跡実測図 |
| 図面 5 | I 区 S I 413 住居跡実測図 |
| 図面 6 | Ⅳ 区 S I 422 住居跡・S D 246 溝跡実測図 |
| 図面 7 | V 区 S I 404 住居跡実測図 |
| 図面 8 | V 区 S I 405 住居跡実測図 |
| 図面 9 | S I 404・405 住居跡出土遺物 |
| 図面 10 | 遺構外出土遺物 |
| 図面 11 | S I 410・411 住居跡出土遺物 |
| 図面 12 | S I 410 住居跡出土遺物 |
| 図面 13 | S I 410・411 住居跡出土遺物 |
| 図面 14 | S I 410・411・412 住居跡出土遺物 |
| 図面 15 | S I 413・420・421・422 住居跡・遺構外出土遺物 |

図版目次

- 図版1 調査区遠景
- 図版2 344次調査
S K1177・1183・1184縄文土坑
1. I-②S K1177縄文土坑完掘全景(西から)
2. I-④S K1183縄文土坑完掘全景(西から)
3. III-①S K1184縄文土坑完掘全景(西から)
- 図版3 344次調査
S K1176縄文土坑・炉跡
1. I-②S K1176縄文土坑完掘全景(北から)
2. N-①炉跡完掘全景(西から)
3. N-①炉跡東西土層断面(北から)
- 図版4 344次調査
I-③区S I 410・411住居跡
1. S I 410・411住居跡遺物出土状況(北から)
2. S I 410住居跡遺物出土状況(北から)
3. S I 410・411住居跡南壁土層断面(北から)
- 図版5 344次調査
I-④区S I 413住居跡
1. S I 413住居跡南壁土層断面(北から)
2. S I 413住居跡カマド東西土層断面から(北から)
3. S I 413住居跡カマド南北土層断面から(西から)
- 図版6 344次調査
I-④区S I 413住居跡
1. S I 413住居跡完掘全景(西から)
2. S I 413住居跡構築時全景(西から)
3. S I 413住居跡構築時全景及び南壁土層断面(北から)
- 図版7 344次調査
II-②区S I 414・421住居跡
1. S I 414住居跡完掘全景(東から)
2. S I 414住居跡南壁土層断面(北から)
3. S I 421住居跡構築時全景(東から)
- 図版8 344次調査
N-①区S D 246溝跡
1. S D 246溝跡完掘全景(南から)
2. S D 246溝跡東西土層断面(南から)
3. S D 246溝跡完掘全景(南側底面状況)(北から)
- 図版9 344次調査
N-②区S I 422住居跡

| | |
|-----------------|-----------------------------|
| | 1. S I 422住居跡完掘全景（北から） |
| | 2. S I 422住居跡構築時全景（北から） |
| | 3. S I 422住居跡東壁土層断面（北から） |
| 図版10 325次調査 | V区S I 404・405住居跡 |
| | 1. S I 404・405住居跡構築時全景（南から） |
| | 2. S I 404住居跡構築時全景（東から） |
| | 3. S I 405住居跡完掘全景（東から） |
| 図版11 325次調査 | V区S I 404住居跡 |
| | 1. S I 404住居跡カマド遺物出土状況（南から） |
| | 2. S I 404住居跡北カマド完掘全景（南から） |
| | 3. S I 404住居跡東カマド構築時全景（西から） |
| 図版12 325次調査 | S I 404・405住居跡出土遺物 |
| 図版13 325・344次調査 | S I 405・410・411住居跡・遺構外出土遺物 |
| 図版14 344次調査 | S I 410・411住居跡出土遺物 |
| 図版15 344次調査 | S I 410・411住居跡出土遺物 |
| 図版16 344次調査 | S I 410・411住居跡出土遺物 |
| 図版17 344次調査 | S I 410・411住居跡出土遺物 |
| 図版18 344次調査 | S I 410・411住居跡出土遺物 |
| 図版19 344次調査 | S I 410住居跡出土遺物 |
| 図版20 344次調査 | S I 413・421住居跡出土遺物 |
| 図版21 344次調査 | S I 420・421・422住居跡・遺構外出土遺物 |

I 調査に至る経過

東京警察病院多摩分院における埋蔵文化財の調査は、以下の経緯によって着手された。

昭和63年8月7日付け国教社文収第125号にて東京警察病院多摩分院（国分寺市西元町）において下水道管埋設工事を行いたい旨、文化財保護法に基づく文化庁長官宛届出が市教育委員会を経由してなされた。工事計画は、掘削総延長665m、掘削総面積465.5㎡におよび、昭和63年9月着手、昭和63年10月完了予定であった。

当該地区は、武蔵国分尼寺跡に近接し、周辺の専用住宅や公共下水道埋設に伴う事前調査によって、歴史時代から中世の遺構が数多く検出されている。さらに東京警察病院多摩分院（以下警察病院と略称）の北側で国分寺崖線の上に所在する府中病院内からも武蔵台遺跡として先史時代から、歴史時代の遺構が検出されており、比較的遺構の密集する地帯として認識されていた地域であった。

このような周辺の遺跡の在り方から、発掘調査の必要性が考慮された。しかしながら、警察病院内の土層の状態が不明であることや、調査対象面積にたいして遺構の数量が推定し難いなどの調査計画立案のために不確定な要素がおおかった。そのため、こうした不安定要素を取除くため、調査対象地区に対して試掘調査を行い、遺構の分布状況を確認し、その結果に基づいて、本調査に至る計画を立案する方向で協議を行った。

協議の結果、試掘調査を平成元年7月19日より開始し、同年8月21日まで行った。その結果、遺構の確認された地点において発掘調査を行うこととした。

当初、本調査に際しては、できるだけ遺構を完全に調査することと、下水道管埋設部分だけでは、調査面積が狭いため、調査に従事する作業員が、自由に動けないという事情もあって、余掘りを多くとる調査区を設定して警察病院と協議を行ったが、警察病院側としては、調査期間の短縮と調査費用の切詰め、さらに調査区が構内道路部分で通院患者や救急車の通行に支障をきたすことが明らかであるため、下水道管埋設部分のみの調査を要望された。これに対し、調査会では、下水道管埋設部分から道路の路肩部分まで拡張し人間と自転車、バイク等の通行を確保する。入口部とその周辺については、交通誘導員を1名から2名に増やし、車輛で通院する患者や救急車の通行の安全を図ることとし、その上で再度協議を行った。その結果上記の条件による発掘調査が了承され、本調査に着手することとなった。

本調査は平成2年5月15日から開始された。当初、9月中旬に消防訓練による一時的な中断が予測されたが、調査路線の順番を変更することによって、作業を進めることができた。

平成2年10月23日調査はほぼ予定通り終了した。警察病院は現在使用されている建物の中の何

1 調査に至る経過

棟かはかなり老朽化しており立替えの時期も近いと考えられる。後述することになるが、本調査によって検出された遺構の在り方から判断すると、警察病院内の大部分に集落跡が残存している可能性が極めて高いと考えられる。よって、今後の立替え工事の際にも慎重な対処が行われなければならない。

I 調査に至る経過

—— 国分寺遺跡調査会組織 ——

(平成3年3月現在)

| | | | | |
|---|---|-------|--------------------------|------------|
| 会 | 長 | 星野亮勝 | 国分寺市文化財保護審議会委員長 | |
| 副 | 会 | 滝口宏 | 東京都文化財保護審議会会長(早稲田大学名誉教授) | |
| 理 | 事 | 永峯光一 | 東京都文化財保護審議会委員(国学院大学教授) | |
| | " | 坂詰秀一 | " | |
| | " | 大川清 | 国土館大学教授 | |
| | " | 本多良雄 | 国分寺市長 | |
| | " | 内野孝治 | 国分寺市教育委員会委員長 | |
| | " | 高橋俊司 | 国分寺市教育委員会教育長 | |
| | " | 星野亮雅 | 国分寺市社会教育委員会議議長 | |
| | " | 藤間恭助 | 国分寺市文化財保護審議会委員 | |
| | " | 本多寅太郎 | " | |
| | " | 松井新一 | " | |
| | " | 吉田格 | " | |
| | " | 北沢俊 | 東京都教育庁社会教育部文化課副主幹 | (平成2年8月退任) |
| | " | 関隆成 | 国分寺市教育委員社会教育部長 | |
| 監 | 事 | 榎戸清 | 国分寺市社会教育委員会議副議長 | |
| | | 市橋三郎 | 東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長 | |

—— 武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会 ——

| | | | | |
|---|---|---|------|-------|
| 委 | 員 | 長 | 滝口宏 | (考古) |
| 委 | | 員 | 永峯光一 | (") |
| | " | | 坂詰秀一 | (") |
| | " | | 大川清 | (") |
| | " | | 宮本救 | (古代史) |
| | " | | 金丸義一 | (建築史) |

—— 事 務 局 ——

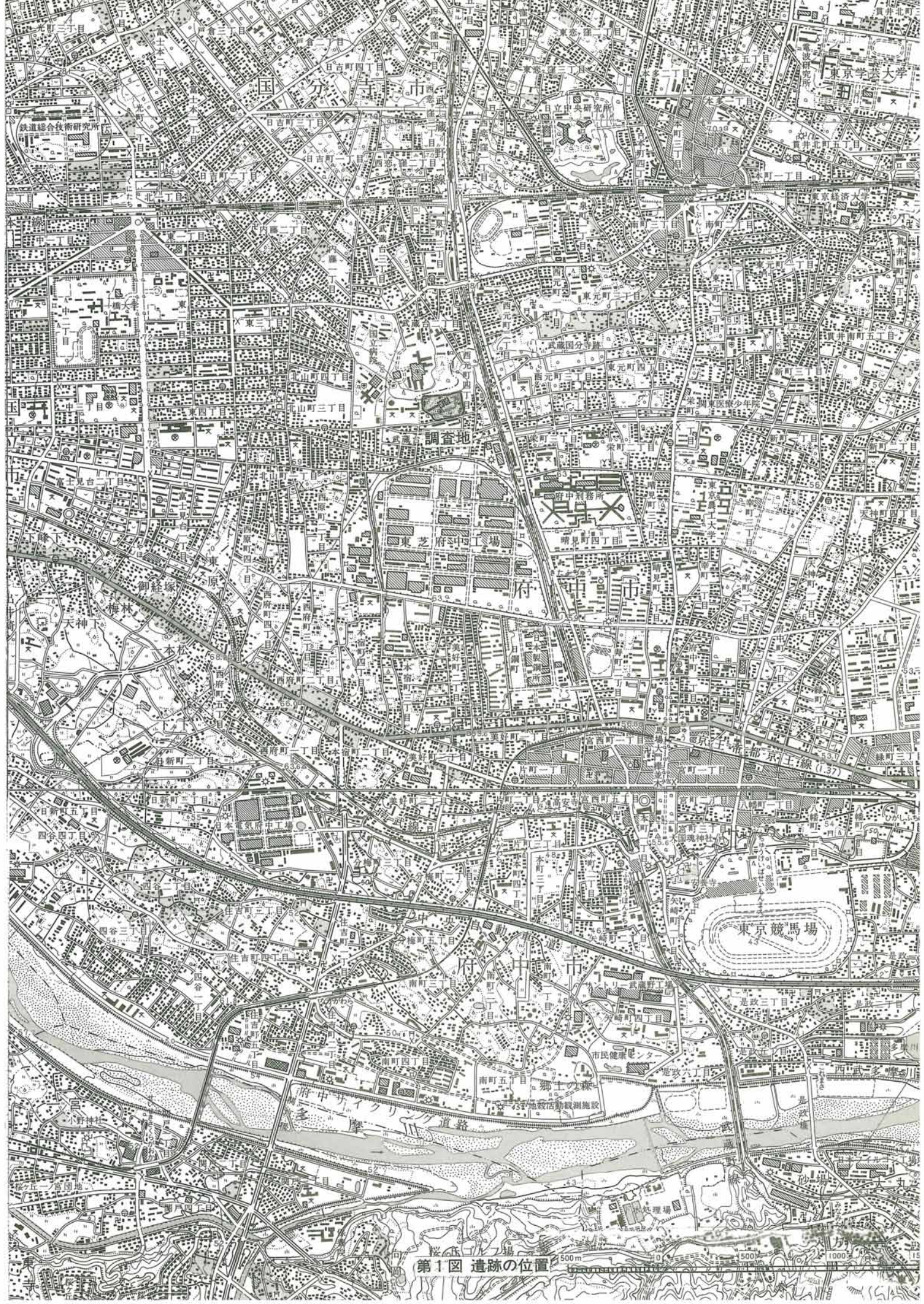
| | | | | | |
|---|---|---|---|-------|------------------------|
| 事 | 務 | 局 | 長 | 野口武夫 | 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長 |
| 事 | 務 | 局 | 員 | 宇都宮精一 | 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長 |
| | " | | | 鈴木晃 | 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係員 |
| | " | | | 松沢修 | 国分寺市遺跡調査会 |

—— 調 査 団 ——

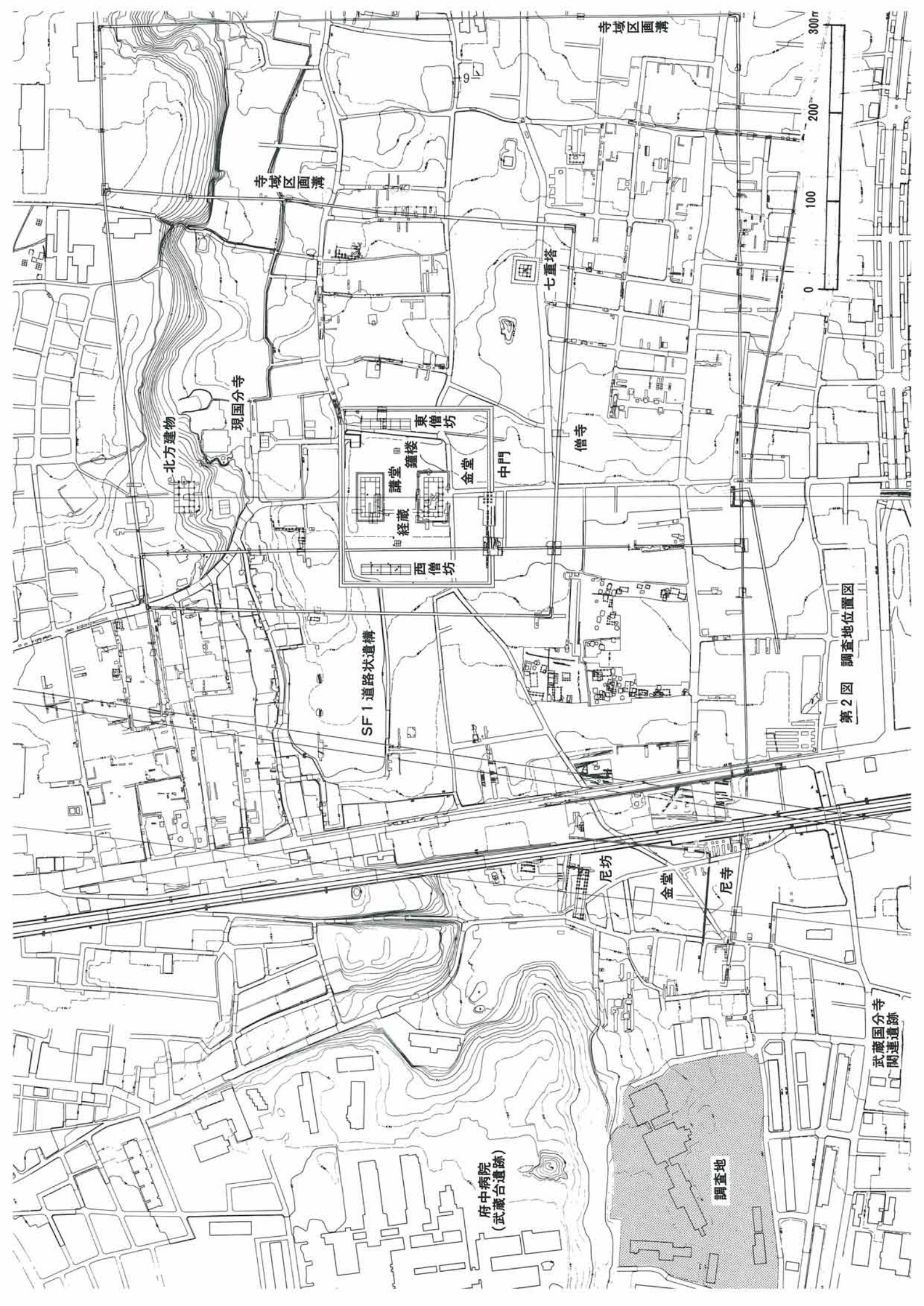
| | | | | | | |
|---|---|---|---|------|---------------------------|---------------------------|
| 調 | 査 | 団 | 長 | 滝口宏 | 東京都文化財保護審議会会長 | |
| 主 | 任 | 調 | 査 | 員 | 有吉重蔵 | 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長 |
| 調 | 査 | 員 | | 福田信夫 | 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係員 | |

I 調査に至る経過

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---------------------------|
| 調 | 査 | 員 | 上 | 村 | 昌 | 男 | 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係員 |
| | " | | 上 | 敷 | 領 | 久 | " " |
| | " | | 滝 | 島 | 和 | 子 | 国分寺市教員委員会嘱託遺跡調査員 |
| | " | | 板 | 倉 | 敏 | 之 | " |



第1図 遺跡の位置



第2図 調査地位置図

武蔵国分寺
閻連遺跡

府中病院
(武蔵台遺跡)

調査地

尼坊

金堂

尼寺

SF1 道路状遺構

北方建物

現国分寺

寺域区画簿

寺域区画簿

七重塔

僧寺

東僧坊

鐘樓

講堂

経蔵

金堂

中門

西僧坊



Ⅱ 調査区の概観

1. 調査地区の位置・立地

本調査区は国分寺市西元町4丁目に所在する。調査地区の西側の一部は府中市域にかかり、東側300mには武蔵野線が、さらに東側450mには府中街道がそれぞれ東西に走る。

調査地は海拔98mの立川段丘面に位置しており、北側後背地は比高差約12mの国分寺崖線、通称「ハケ」がひかえている。これは、古多摩川の浸蝕によって形成された段丘である。西は立川市の北東部域にはじまり、蛇行しながら東は世田谷区西端にまでおよぶ。この国分寺崖線を境界にして高位面を武蔵野段丘、低位面を立川段丘と呼んでいる。

本調査区は武蔵野段丘と立川段丘のほぼ境界の崖際にあり比較的急な北側の崖面に対して南側は府中市域に向かって平野部が広がっている。また、この地域の特徴は、国分寺崖線の下辺にそって、いたるところで湧水泉が点在していることである。とくに、遺跡の北東部約300mの地点には古野川の原流である黒鐘谷があり、水資源の豊かな地域であったといえよう。

このような地形・環境を背景として、調査団周辺は先史時代から中世に至るまでの遺跡が数多く発見されており、活発な人間活動の痕跡を示している。先土器時代の遺跡は、後背地の武蔵野段丘面にある府中病院内で確認された武蔵台遺跡においては、立川ローム層最古の文化層である、X a、X b層から、多量の黒曜石製の石器・剥片と局部磨製石器が検出されている。さらに武蔵台遺跡では縄文時代早期から前期にかけての集石遺構が検出されている。調査区北西の武蔵野段丘面にある多摩蘭坂遺跡ではナイフ形石器を中心とした石器群が検出されている。このように、国分寺崖線際の武蔵野段丘面には比較的大規模な先史時代の遺跡が分布している。

歴史時代の遺跡は、調査区の東側に武蔵国分尼寺があり、周辺の専用住宅や公共下水道の調査によって、住居跡、溝跡等の遺構が検出されている。武蔵国分尼寺の寺域を区画する、西側の区画溝は、現在までの調査ではまだ明らかにされていないが、東側で確認された区画溝を推定中軸線にそって反転させた地点に西側の区画溝を設定すると、本調査区までわずか70m程である。後述するように本調査区内から検出された最も古い住居跡は8世紀代に位置されるので、武蔵国分尼寺の創建期に関わる住居跡といえる。また先に述べた武蔵台遺跡においても8世紀から10世紀にかけての住居跡が検出されている。

武蔵国分尼寺のさらに約100m東には推定古代東山道とされているSF-1道路状遺構が南北に走っており、南は武蔵国府に至る。

中世に入ると、通称「鎌倉街道」とよばれる古道が本調査区の東、約150m程の地点を南北に

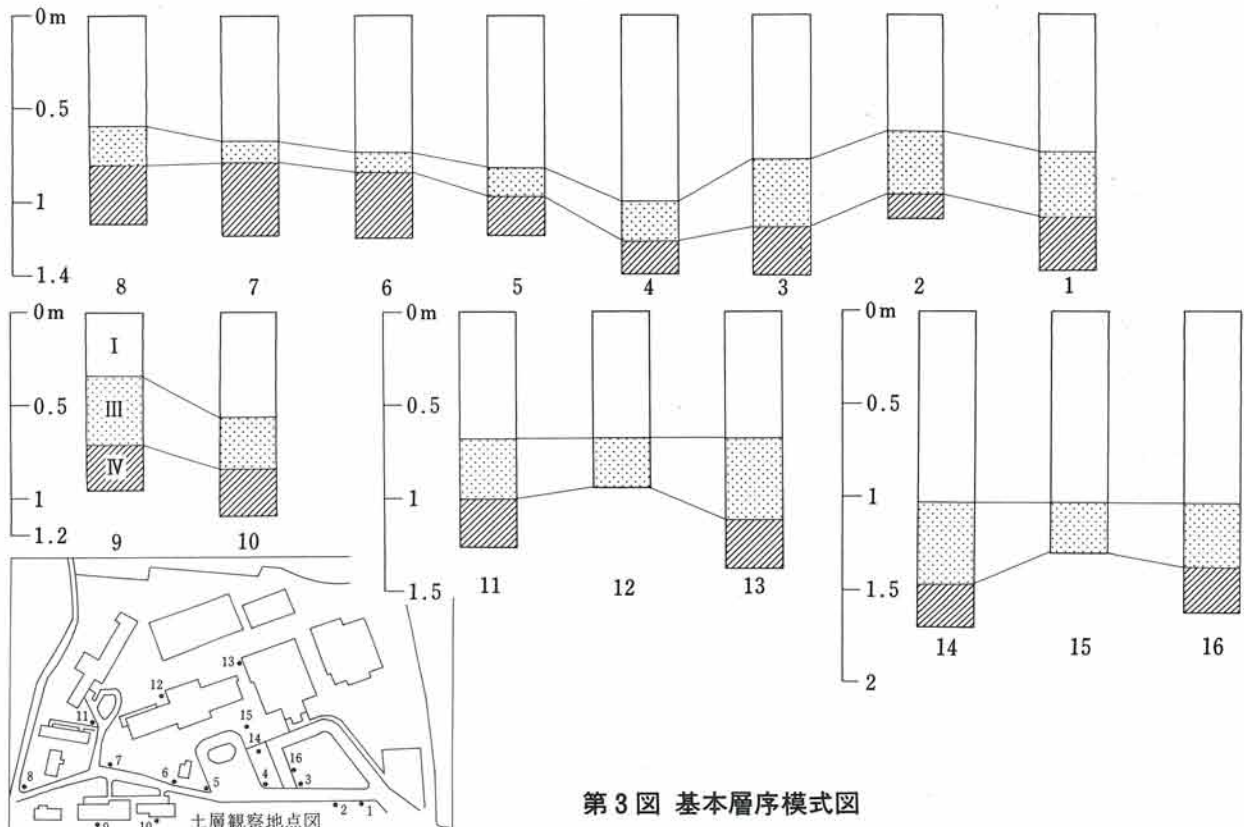
Ⅱ 調査区の概観

走っている。「鎌倉街道」は公共下水道の調査によって、一時期だけの道路ではなく、比較的長期にわたって、部分的に僅かに位置を変えながら使用された道路であると推定されているが、現在でも見ることができるのは、黒鐘谷の東側で国分寺崖線を切り通して作られた部分である。

以上のように、本調査区の周辺には各時代の遺跡が所在しているが、遺跡の時代別分布を見ると、崖線上には先史時代が多く、崖線下には歴史時代の遺跡が多くあると言えよう。とくに、尼寺との関係は重要である。従来、武蔵国分僧寺とその周辺の調査では8世紀台の住居の検出例は極めて少なかったのに対して、本調査区からは、当該期の居住跡が4軒検出され、その密集度の高さが推測されている。

2. 層 位

本調査区は、先に述べたように国分寺崖線の直下にあたる。地表面下約30～40cmまでは耕作土である（Ⅰ層）。基本的な層位関係はこの下に粘性、縮りがややある黒色土層（Ⅱ層）が入るがここでは黒色土層（Ⅱ層）が無い部分や粘性、縮りに欠けるボソボソした部分もあり、均一ではない。歴史時代の遺構は暗茶褐色土層（Ⅲ層）の上面で確認された。この層は、調査区の西側で厚く、東側に薄くなる傾向にある。歴史時代の遺構が確認される暗茶褐色土層（Ⅲ層）の上面までの深さは部分的には70cmに及ぶ地点もあり、かなりⅠ層の堆積が著しい。縄文時代の遺構は暗茶褐色土層の下面と、ローム層（Ⅳ層）上面で検出された。Ⅳ層は北側の崖線際でやや深く、中央



第3図 基本層序模式図

Ⅱ 調査区の概観

部で高い。さらに東南部で深くなる傾向にあり、現在の地表面よりも起伏に富んでいたことが分かる。ただし、本調査区周辺の地形は近代から現代に至る土地利用の状況から、かなり大規模な掘削・盛土・切り通し事業が行われているため、旧地表面（江戸時代頃）の状況は明確ではない。

Ⅲ 発掘経過

本調査は、平成元年7月19日より試掘調査に着手した。試掘は基本的に下水道の埋設部分について行い、遺構の分布状態を確認した。その結果、住居跡9軒、溝跡9条、土坑10基、小穴70個、不明遺構1基が確認された。試掘調査は同年8月21日に終了し部分的に第Ⅴ路線において平成元年9月11日より同年11月18日までに住居跡を2軒調査した。この試掘調査の結果に応じて、本調査を計画した。本調査は、遺構が確認された地区で行い、調査の幅も下水道の埋設部分を中心として、路肩際の方に拡張して調査を実施した。

調査区は病院入口部より西に向かって路線の区分を行い、第Ⅰ～Ⅳ路線を設定した。それによって先年度の調査区を第Ⅴ路線とした。

調査は平成2年5月15日から同年10月23日まで行った。試掘では歴史時代の遺構が確認されず、縄文時代の遺構が確認された地点と、歴史時代の遺構が確認され、縄文時代の遺構が未確認の地点があった。そのため、試掘の段階で縄文時代の遺構と歴史時代の遺構が確認されたものについては計画通りの面積を調査し、歴史時代の下にある縄文時代の遺構については下水道管の埋設部分のみを調査することとした。また、路線番号をつけたが調査区が病院構内の道路面であることから、車輛通行の都合や病院内の行事等の事情で、かならずしも路線番号順に調査を行った訳ではない。おおよそ、第Ⅰ・Ⅱ路線を前半で調査し、次にⅣ路線、Ⅲ路線の順で調査した。さらに、試掘調査で遺構と判断されたものでも調査の結果、木の根の痕跡であったり、極めて新しい時代の所産と判断されたものについては遺構から除いた。

| 路線 時代 | Ⅰ 路線 | | | | | | | | Ⅱ 路線 | | Ⅲ 路線 | | | | | | | | Ⅳ 路線 | | | Ⅴ 路線 | 総 数 | |
|------------------|--------------------|-----|------|------|-----|------|-----|------|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|-------|---|
| | 1-1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | Ⅱ-7 | 2 | Ⅲ-1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | Ⅳ-1 | 2 | 3 | | | |
| 面 積 | 3.7 | 6.6 | 16.8 | 26.5 | 9.6 | 21.1 | 5.3 | 15.0 | 4.3 | 3.8 | 6.7 | 1.8 | 8.0 | 7.3 | 6.8 | 2.7 | 7.5 | 4.5 | 14.7 | 14.8 | 13.1 | 58.2 | 258.8 | |
| 歴 史 時 代 | 住居跡 | | | 3 | 1 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 2 | 9 |
| | 溝 跡 | | | | | | 1 | | | | | | | 2 | 3 | | | 1 | 1 | 1 | | | 9 | |
| | 土 坑 | | 1 | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 5 | |
| | 小 穴 | 2 | 3 | 2 | 4 | | 3 | 2 | 3 | | | | | 2 | | | 1 | 1 | | 2 | 1 | 2 | 28 | |
| | 不明遺構 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | |
| 総 数 | 2 | 4 | 5 | 6 | 1 | 5 | 2 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 4 | 3 | 0 | 1 | 2 | 1 | 3 | 3 | 2 | 2 | 51 | |
| 縄 文 時 代 | 土 坑 | 1 | 2 | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 5 | |
| | 小 穴 | 2 | | | 9 | 8 | 14 | 2 | 2 | | | 1 | 1 | | | | 2 | 1 | | | | 6 | 48 | |
| | 不明遺構 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | |
| 総 数 | 3 | 2 | 0 | 10 | 8 | 14 | 2 | 2 | | | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 6 | | 54 | |
| 備 考 | Ⅱ-12、Ⅳ-1は縄文遺構の確認なし | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第1表 検出遺構一覧表

Ⅲ 発掘経過

本調査によって遺構として認定され、調査されたものは、縄文時代の土抗6基、小穴51個。歴史時代の住居跡9軒、溝跡9条、土抗5基、小穴29個、不明遺構1基である。

調査は天候に恵まれ、ほぼ調査予定時間内に終了した。

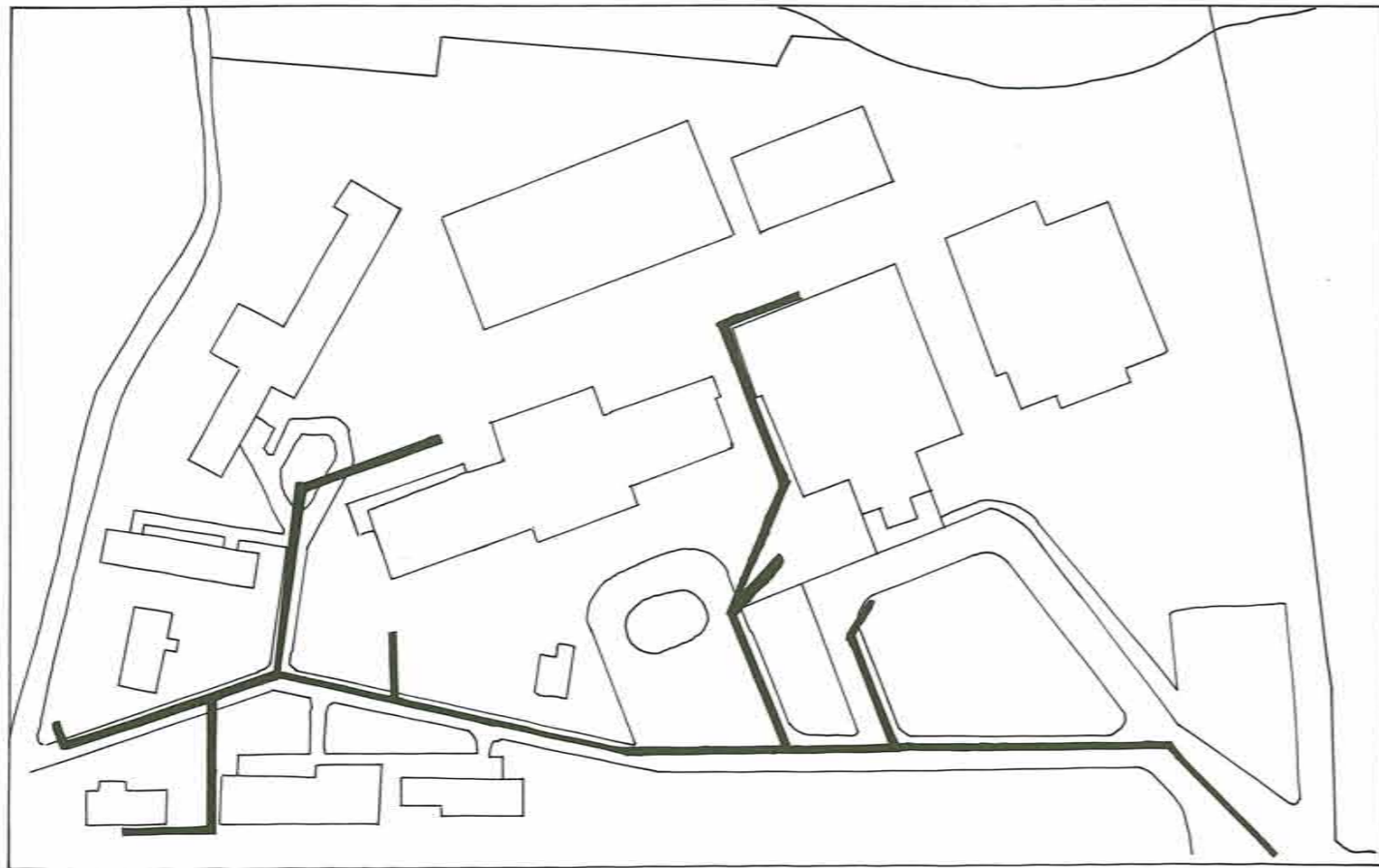
病院内の調査が終わった後、市公共下水道面整備に係わる事前調査として市に下水道課の委託により、一般道路から病院構内に取付く下水管を埋設するための調査を平成元年10月25日から同年11月4日まで行い、歴史時代の小穴4個を調査した。

本調査で行った調査面積は総計273.03㎡である。このうち縄文時代は117.55㎡、歴史時代は203.41㎡である。これは調査対象地区面積のほぼ70%にあたる。

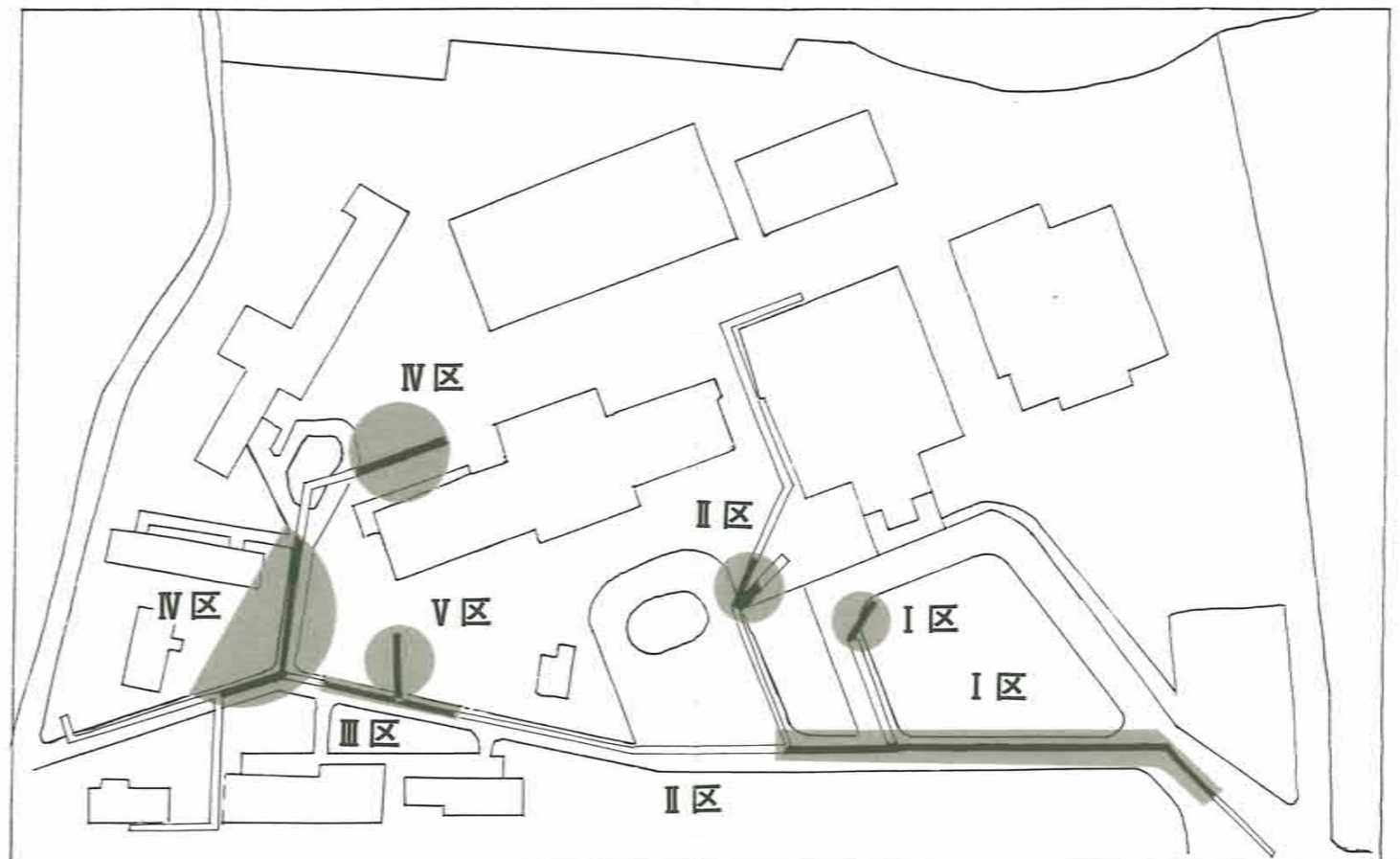
調査終了後の遺物整理および図面整理と報告書作成作業は国分寺遺跡調査会事務所において、平成2年8月16日より平成3年4月19日まで行った。

| 年月日 調査区 | 昭和63年8月 | | 平成元年7月 | | 8月 | | 9月 | | 10月 | | 11月 | | 合計日数 |
|------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|------|
| | 10 | 20 | 10 | 20 | 10 | 20 | 10 | 20 | 10 | 20 | 10 | 20 | |
| 実作業累計日数 | 0 | 5 | 10 | 15 | 20 | | 25 | 30 | 35 | 40 | 45 | 50 | 102日 |
| 試掘調査前予備調査 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | | | | | | | | | | 7 |
| 試掘調査 | | | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | | | | | | 15 |
| V路線 | | | | | | | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | 32 |
| 測量 | <input type="checkbox"/> | | | | | | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | | | | 3 |
| 員数 | 13 | 12 | 0 | 2 | 14 | 0 | 2 | 15 | 20 | 13 | 20 | 27 | 152 |
| 土表土掘削 | | | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | <input type="checkbox"/> | | | | | 16 |
| 木埋戻し | | | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | | | | | <input type="checkbox"/> | 16 |
| 備考 | 8/16開始 8/24終了 | | 7/19開始 | | 8/21終了 | | 9/11開始 | | | | 11/8終了 | | |

第2表 試掘調査及びV路線調査工程表



第4図 試掘路線図



第5図 遺構検出地点及び調査区設定図

| 年 月 日 | 平成元年 5 月 | | | | | | 6 月 | | | | 7 月 | | | | 8 月 | | | | 9 月 | | | | 10 月 | | | | 合計日数 | |
|-----------|----------|---------|----|----|----|----|-----|----------|----|----|-----|-------------|----|----|-----|----------|----|----|-----|-------|----|----|-------|-------------|--|--|------|----|
| | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 | 30 | 10 | 20 | 30 | 35 | 40 | 45 | 50 | 55 | 60 | 65 | 70 | 75 | 80 | 85 | 90 | 91 | | | | | | |
| 実作業累計日数 | | 5 10 15 | | | | | | 20 25 30 | | | | 35 40 45 50 | | | | 55 60 65 | | | | 70 75 | | | | 80 85 90 91 | | | | 91 |
| I 路線 | I 1 | | | □ | □ | □ | | | | | | | | | | | | | | | | | 10 | | | | | |
| | 2 | | | □ | □ | □ | | | | | | | | | | | | | | | | | 10 | | | | | |
| | 3 | | | □ | □ | | □ | □ | | □ | □ | □ | □ | | | | | | | | | | | 20 | | | | |
| | 4 | | | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | | | | | | | | | 26 | | | | |
| | 5 | | | | □ | □ | □ | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 | | | | |
| | 6 | | | | | | □ | □ | □ | □ | □ | | □ | | | | | | | | | | | 13 | | | | |
| | 7 | | | | | | | | | | | □ | □ | | | | | | | | | | | 4 | | | | |
| | 8 | | | | | | | | | | | □ | □ | | | | | | | | | | | 5 | | | | |
| II 路線 | II 1 | | | | | | | | | | | □ | □ | | □ | □ | | | | | | | 12 | | | | | |
| | 2 | | | | | | | | | | | □ | □ | | □ | □ | | | | | | | 8 | | | | | |
| III 路線 | III 1 | | | | | | | | | | | □ | □ | | | | | | | | | | 5 | | | | | |
| | 2 | | | | | | | | | | | | □ | | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| | 3 | | | | | | | | | | | □ | □ | | | | | | | | | | 7 | | | | | |
| | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | □ | □ | | □ | □ | □ | 9 | | | | | |
| | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | □ | □ | | | □ | | 4 | | | | | |
| | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | □ | □ | □ | □ | | | 10 | | | | | |
| | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | □ | □ | □ | □ | | | 10 | | | | | |
| | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | □ | □ | □ | □ | □ | □ | 11 | | | | | |
| IV 路線 | IV 1 | | | | | | | | | | | | | | | □ | □ | □ | □ | □ | □ | 15 | | | | | | |
| | 2 | | | | | | | | | | | | □ | □ | | □ | □ | | | | | 10 | | | | | | |
| | 3 | | | | | | | | | | | | □ | □ | □ | □ | □ | | | | | 9 | | | | | | |
| 測 量 | | | | □ | □ | | □ | | | | □ | □ | □ | □ | | | | □ | □ | | | □ | □ | 27 | | | | |
| 員 数 | | 0 | 18 | 56 | 32 | 33 | 52 | 33 | 40 | 33 | 21 | 18 | 35 | 0 | 29 | 22 | 26 | 28 | 2 | | | | 478 人 | | | | | |
| 土 木 | 表土 堀 削 | | | □ | □ | □ | □ | | | | □ | □ | | | | | □ | | | | | | 10 日 | | | | | |
| | 埋 戻 し | | | | | | | | | | □ | □ | | | | | | | | □ | □ | | | 6 | | | | |

第3表 本調査工程表

IV 検出遺構

1. 歴史時代

本調査区から検出された歴史時代の遺構は住居跡9軒、溝跡9条、土抗5基、小穴29個である。調査区ごとの遺構検出状況を観察すると住居跡はⅠ・Ⅱ路線とⅣ・Ⅴ路線で検出されたが、Ⅲ路線では検出されなかった。それに対し、Ⅲ路線では土抗が7基検出されている。

遺構の検出状況はそのほとんどが調査区外におよび、全貌を明らかにすることができる遺構は少なく、住居跡6軒、溝跡1条が観察に耐える遺構であった。

なお、遺構はⅢ層上面で確認された。

〔第Ⅰ路線〕

SⅠ-410（図面4、図版4）

本住居跡は第3トレンチで検出され、SⅠ-410と重複する。

僧寺中軸線の西532～536m、南306～309mに位置する。南側は調査区外にあたり、西側はSⅠ-411に切られる。

残存状況は北壁約2.5mと北東隅から東壁約1.5mの範囲の床面が確認された。西側はSⅠ-411に切られているために判然としない。カマドは北壁に設けられており、カマドを軸として設定した南北方向は僧寺中軸線に対してほぼ平行である。

構築状況を観察すると、最初に周溝を掘り、約30cmの平坦面を作り、そこからⅣ層上面を20cm程度ほぼ平坦に掘下げる。その後、ロームと黒色土、暗褐色土を約10cm程埋める。さらにロームと暗褐色土を混ぜた土で床面を貼っている。ただし、特に硬質な面は住居の中央部からカマドの周辺であることから、人間が特に歩き回った結果でこのような硬質面が形成された可能性も考えられる。

南壁セクションではⅡ層中から掘り込まれていることが観察されるので、壁高は約40cmではほぼ垂直に立上がっている。

周溝は西壁で確認された。幅15cm、深さ約10cmである。なお、北東隅には浅いピットが掘られている。

カマドは北壁に設けられている。西側の袖部は欠損しているが残存状況は比較的良い。

火床面の深さは約40cmを掘り込む。さらにその両側にロームと粘質土によって袖部を作る。補強材として女瓦、鍍瓦を埋め込む。袖の上には凝灰岩製の切り石を渡している。その切り石は本来の位置をずれ東側の袖部の先端にある。特に鍍瓦は西側のものはずれているが、東側では袖部

の火床際に瓦頭面を上にして埋め込まれていることから極めて丈夫に作られていた。

床面では長径約30cm、単径約20cm、深さ約40cmの柱穴が1個検出された。

遺物は総数71点である。この内、床面直上での遺物の出土状態はS I-411との切合い部分に多く、単純に本住居跡に伴う遺物は少ない。

遺物から見た本住居跡の時期は、須恵器の底部が全て回転糸切りによる切りっぱなしであることや、鏡瓦の瓦頭面の形状から9世紀後半代で武蔵国分寺の再建期以降の住居である。なお、S I-411と重複する地点から168点が集中している。

S I-411 (図面4、図版4)

本住居跡は第3トレンチで検出され、S I-410と重複する。

僧寺中軸線の西536～540m、南306～309mに位置する。南側は調査区外にあたり、西側はS I-410を切る。

規模は残存部の東西で約2.3m、南北約2m、確認面からの深さ約0.4mを計る。

構築状況を観察すると、Ⅳ層上面を40cm程度ほぼ平坦に掘下げる。その後床面を構築するための貼り床土はロームと暗褐色土が交互に堆積しているが、S I-410のような特に硬質な面は認められない。

カマドは検出されなかったが、南側セクションには焼土が部分的に混入する層もあるため、東カマドの可能性もある。

周溝は検出されなかった。

遺物は総数36点である。この内、床面直上での遺物の出土状態はS I-410との切合い部分多く、単純に本住居跡に伴う遺物も全面に分布する。

遺物から見た本住居跡の時期は、須恵器の底部が全て回転糸切りによる切りっぱなしであることからS I-410同様に9世紀後半代で武蔵国分寺の再建期以降の住居である。

S I-413 (図面5、図版5.6)

本住居跡は第4トレンチで検出された。

僧寺中軸線の西550～556m、南307～311mに位置する。北側と南側は調査区外にあたる。

残存状況は西壁約2.4mと東壁約2.3mでありその範囲で床面が確認された。カマドは東壁に設けられており、カマドを軸として設定した東西方向は僧寺中軸線に対して約43°である。

構築状況を観察すると、Ⅳ層上面を約40cm程度ほぼ平坦に掘り下げている。その後、ロームと黒色土、暗褐色土を交互に積み重ね約30cm程度埋める。さらにロームと暗褐色土を混ぜた土で床面約10cm程を貼っている。ただし、特に硬質な面は住居の中央部からカマドの周辺であり壁際か

Ⅳ 検出遺構

ら約60cmはそれほど硬質ではない。これは住居の中央部からカマドの周辺が人の動きが活発であった結果でこのような硬質面が形成された可能性も考えられる。

壁高は約50cmで垂直に立上がっている。

周溝は西壁と東壁の一部、カマドの袖部付近まで確認された。幅約15cm、深さ約10cmであり、未確認ではあるが北・南壁際にも巡らされていたと考えてよかろう。

カマドは東壁に設けられている。南側は調査区の外であり東西に半裁された状態である。残存状況は比較的良い。火床面の深さは約45cmを掘り込む。さらにその両側にロームと粘質土によって袖部を作った痕跡が認められる。補強材として女瓦を使用している。凝灰岩製の切り石を据えていた。

床面には7個の小穴が検出されたが柱穴に比定されるものは判然としない。

遺物は総数83点である。この内、床面直上での遺物の出土状態は東部と西部に別れている。ただし、中央部に排水管があるため、これによって攪乱された結果であろう。

遺物から見た本住居跡の時期は、須恵器の底部が回転糸切りによる切り離しのあと、その周辺をヘラ削りによって調整しており、8世紀末から9世紀初頭で武蔵国分寺の創建期から再建期の住居である。

〔第Ⅱ路線〕

S I-412 (図面1)

本住居跡は第1トレンチで検出された。

僧寺中軸線の西550～556m、南306～309mに位置する。

残存状況は南東部隅のみであるため全貌は判然としない。カマドは東壁か北壁に設けられていると思われる。

部分的であるが、構築状況を観察すると、Ⅳ層上面を約40cm程度ほぼ平坦に掘下げる。その後、ロームと黒色土、暗褐色土を交互に積み重ね約30cm程埋める。さらにロームと暗褐色土を混ぜた土で床面約10cm程貼っている。

壁高は約50cmで垂直に立ち上がっており、周溝は幅約15cm、深さ約10cmである。調査区域外に大部分が存在するが、S I-410と411に近接しており、これらの住居との新旧関は不明である。

遺物は総数5点検出された。遺物から見た本住居跡の時期は、須恵器の底部が回転糸切りによる切り離しのあと、その周辺をヘラ削りによって調整しているものと底部を前面ヘラ削りした土師器が検出され、武蔵国分寺の創建期の住居である。

S I-414 (図面 1、図版 7)

本住居跡は第 2 トレンチで検出された。

僧寺中軸線の西609～110m、南269～272mに位置するが、残存状況は南東部隅のみであるため全貌は判然としない。カマドは東壁か北壁に設けられていると思われる。

部分的であるが、構築状況を観察すると、Ⅳ層上面を約40cm程度ほぼ平坦に掘下げる。その後、ロームと黒色土、暗褐色土を交互に積み重ね約30cm程埋める。さらにロームと暗褐色土を混ぜた土で床面約10cm程を貼っている。壁高は約50cmで垂直に立ち上がっており、周溝は検出されなかった。

遺物は総数13点検出された。遺物から見た本住居跡の時期は、須恵器の底部が回転糸切りによる切り離しのあと、その周辺をヘラ削りによって調整しているものと底部を全面ヘラ削りした土器が検出され、武蔵国分寺の創建期の住居である。

〔第Ⅳ路線〕

SD-246 (図面 6、図版 9)

本溝跡は第 1 トレンチで検出された。

僧寺中軸線の西694～696m、南295～303mに位置する。

規模は上面幅約1.3m下面幅約0.5mであり断面形は「ろうと」状を呈する。

覆土はロームと黒色土、暗褐色土の混在層であり自然の堆積層とは様相を異なる。また、底面には幅15cm、長さ20cmの工具痕と見られる痕跡が北から南に向かって観察される。

南壁のセクションでは、Ⅲ層上面まで攪乱がおよんでいるため明確な時代は明らかにされていない。遺物は検出されなかった。機能・用途については判然としない。

S I 422 (図面 6、図版 8)

本住居跡は第 2 トレンチで検出された。

僧寺中軸線の西688～692m、南271～275mに位置する。

残存状況は北壁約1.8m、西壁約2.2m南壁約0.8mでありその範囲の床面である。

構築状況を観察すると、Ⅳ層を約60cm程度やや凹凸に掘り込む。その後、周溝部を残してロームと黒色土、暗褐色土の混在層を約10cm程埋めてこれを床面としている。床面の硬質部分は、西・南壁の周溝部際から北壁から内側約70cmの範囲で認められる。警察病院内の住居跡に見られる硬質面が、床面の中央部からカマド周辺部にあることから考えると本住居跡の例はやや様相を異にしている。

壁高は約50cmでほぼ垂直に立ち上がっていることが分る。

周溝は検出された各壁で確認された。西壁では幅約15cm、深さ約10cmであり、北壁では幅約10cm、深さ約10cmである。南西隅には浅いピットが掘られている。

床面では、柱穴と考えられる小穴は検出されなかった。

遺物は総数約14点である。遺物から見た本住居跡の時期は、須恵器の底部が回転糸切りによる切り離しの跡その周辺をヘラ削りされたものと、底部を全面ヘラ削りした土師器があることから武蔵国分寺の創建期の住居である。

〔第Ⅴ路線〕

S I - 404 (図面7、図版10・11)

本住居跡は僧寺中軸線の西672~678m、南291~297mに位置する。西側がやや調査区外にあり中央部に排水管と人孔がある。

規模は南北4.2m、東西約4mを測り、ほぼ正方形を呈する。各隅は鋭角で極めて整然と掘り込まれている。北壁と東壁にカマドを設けており北壁の場合南北方向は僧寺中軸線にたいしてほぼ平行であり、東壁の場合南北方向は僧寺中軸線にたいしてほぼ直交する。

構築状況を観察すると、Ⅳ層を約30cm程掘り込むがその時、とくに四隅を深く掘り、中央部を菱形に浅く掘り残す。さらに中心部から放射状に2個で一組の柱穴を掘る。次に四隅の深い部分に暗褐色土とロームの混在土を埋め、菱形に浅く掘り残した部分には粘質土とロームの混在土を埋めて床面を形成する。硬質面は菱形に浅く掘り残した部分である。

北壁のカマドは、火床面の深さ30cm、幅80cmを測る。構築状況は掘方を深さ約30cm、幅90cm、奥行約60cmに掘り込んだ後、白色粘質土を掘り込みの際に約10cmの厚さで貼る。さらにロームと暗褐色土の混合土によって天井部から袖部を構築している。火床面の掘り込みに堆積した土は天井部からの崩壊土であり、カマドのたきぐち部の全面には天井部の崩壊によって圧壊した土師器の甕が広がっていた。

東壁のカマドは火床面の深さ約50cmを測る。構築状況は、堀方約50cm、幅50cm、奥行き約40cmに掘り込んだ後、ロームと暗褐色土の混合土によって天井部から袖部を構築している。火床面の掘り込みに堆積した土は天井部からの崩壊土である。

二つのカマドを比較すると、北壁のカマドは極めて良好に焼けており、前庭部にも焼土が広がっている。東壁のカマドの焼成はやや弱く、使用の頻度が北壁と東壁で異なっていた。これはカマドの使用が北から東へ移ったためであろう。

周溝は北壁ではカマドの西側部に、南壁から東壁のカマド付近まで掘られている。幅約15cm、深さ約10cm程度である。南東隅に浅い楕円形の小穴が掘られていた。

検出遺物は総数322点である。遺物から見た時代は底部全面ヘラ削りで胴部に稜を持つ土師器

が検出されていることから、武蔵国分寺創建期にあたる。

S I-405 (図面 8、図版10)

本住居跡は僧寺中軸線の西672～678m、南291～295mに位置する。西側がやや調査区外に延びる。

規模は南北3.9m、東西約3.7mを測り、ほぼ正方形を呈する。各隅は鋭角で極めて整然と掘り込まれている。東壁にカマドが設けられていた痕跡があるが、攪乱のために破壊されていた。東壁の場合、住居の東西方向は僧寺中軸線にたいしてほぼ直交する。

構築状況を観察すると、Ⅳ層を約40cm程平坦に掘り込み、暗褐色土とローム混在土を埋めて、床面を形成している。特に硬質面は確認されなかった。

周溝はほぼ全周しており、幅約15cm、深さ約10cm程度である。東壁から内側に約40cmの地点に南北の周溝が走るが、カマドが設けられていたと考えられる攪乱部までであり、さらに南側に延びていなかった。

検出遺物は総数68点である。遺物から見た時代は底部全面へラ削りで胴部に稜を持つ土師器が検出されていることから、S I-404と同様に武蔵国分寺創建期にあたる。

2. 縄文時代

本調査によって検出された遺構は土抗6基、小穴51個である。ただし小穴の内1個は焼土の痕跡が認められたため、炉跡の可能性もある。

調査区の制約上から、完全に調査することができた土抗は第Ⅰ路線のSK-1177と第Ⅱ路線のSK-1184の2基である。また、壁際半分でも状況が比較的判別可能な第Ⅰ路線のSK-1176がある。また、第Ⅱ路線において小穴が半円を描いて検出され(図面2)住居跡の可能性も考えられたが、縄文時代の遺物が全調査区域から、一点も検出されていないことから、これを住居と判断するにいたらなかった。

なお、遺構が検出された層位はⅢ層下面から、Ⅳ層上面である。

〔第Ⅰ路線〕

SK-1177 (図面 3、図版 2)

本土抗は第Ⅰ路線の第2トレンチで検出された。僧寺中軸線の西525～527m、南306～308mに位置する。規模は長軸1.8m、短軸0.85m、中心部が最も深く、0.6mを測る。

確認面での平面形は不正楕円形だが、北西の壁際にやや植物の根による攪乱を受けているものの、南西部は隅丸の方形を呈している。西壁部の中央部にやや突出部があるもののこの南西部が

Ⅳ 検出遺構

本来の形状を残し、隅丸の方形を呈していたものと推定される。断面形は、壁は外反するものの、ほぼ垂直に近い角度で立上がり、底面に向かっては擦り鉢状に傾斜しながら、中心部でピット状に落ち込む。

遺物は検出されず、機能・用途は不明である。

SK-1178 (図面3、図版2)

本土抗は第Ⅰ路線の第2トレンチで検出された。僧寺中軸線の西527～529m、南305～307mに位置する。検出状態は南西側が壁にかかっており、ほぼ北西側から南東側の長軸線で半裁された状態で検出された。確認面での規模は長軸2.2m、短軸0.5m、中心は平坦で、深さ0.45mを計る。

確認面での平面形は両隅部が隅丸の角形を呈しており、SK-1177と同様に北壁部の中央部にやや突出部があるものの、ほぼ隅丸の方形を呈していたものと推定される。

断面形は、壁はゆるやかに立ち上がり、底面の形状は、両側で一旦落ち込みを形成し、ゆるやかに立ち上がった後、約45°の角度に落ち込む。

遺物は検出されず、機能・用途は不明である。

〔第Ⅱ路線〕

SK-1184 (図面3、図版2)

本土抗は第Ⅱ路線の第2トレンチで検出された。確認面での規模は長軸2.6m、短軸1.8m、中心はほぼ平坦で、深さ0.6mを測る。

平面形は西側に小穴が切合っているものの、ほぼ楕円形を呈している。

断面形は、壁はゆるやかに立ち上がり、底面には二ヵ所の浅い落ち込みがあるがほぼ平坦である。

遺物は検出されず、機能・用途は不明である。

〔第Ⅳ路線〕

炉跡 (図面6、図版3)

本炉跡はローム層の上面で確認されたが、部分的な焼土はⅢ層下面でも認められていたものである。確認面での規模は長軸1.2m、短軸0.6m、ほぼ東西方向に平行している。平面形はひょうたん形を呈し、断面は西側から東側にゆるやかに落ち込んだあと底面のほぼ中央部で階段状にさらに落ち込む。焼土はこの東半分の深い所に多く推積しており、炉跡の下面である可能性が強い。

V 出土遺物

本調査は奈良・平安時代、縄文時代の調査を行ったが、出土した遺物はすべて奈良・平安時代の土器と瓦である。個々の遺物の説明は一覧表に示した。

1. 遺物の出土状況

遺物の大半は住居跡内出土か住居にきわめて接近した地点から出土した資料であり、遺物の包含層からの出土は僅かであった。これは調査地域が広い割に面積は、遺構が存在する地点の排水管理設部分幅しか調査できなかったためであり包含層に遺物が特に少ないということではない。一覧表には個々の遺構のあとに遺構外出土遺物の項目を設けた。これはさきに述べたようにその遺構に近接して出土した遺物である。

2. 遺物の時期と組成

時期…住居跡内より比較的、古手の土器が多く出土した。従来、武蔵国分寺の調査ではS D72、S K603、S I24に同様の要素を持った須恵器が出土しており今回の調査で出土した須恵器の資料はそのような資料と比較した。また、最近報告された鳩山窯跡群のなかの小谷B窯跡の資料も参考にした。それにより、おおよそ、8世紀第3四半期代、いわゆる武蔵国分寺創建期に位置付けた。この時期の須恵器を持つ住居跡が6軒であった。さらに創建期以降の鏡瓦をカマドに使用し、G37窯式の須恵器を多量に持つ住居跡が2軒である。

組成…8世紀第3四半期代の遺物は須恵器、土師器の坏、土師器の甕を主体とし、僅かに壺をもつ。再建期以降の遺物は須恵器、土師器の坏、土師器の甕、須恵器、土師器の碗、瓦類を持つ。また創建期の住居跡からは瓦類は僅かしか出土せず、時期の判別困難な破片である。これに対し、再建期以降の住居跡からは多量の瓦が完形に近い形状で出土した。

3. 注意される土器

S I404住居跡からはいわゆる「甲斐型」の坏(図9-9)が出土した。S I422住居跡からは「畿内産土師器」と考えられる坏(図15-66)が出土しているが、これは検討を要するものの、はじめての資料である。また、S I410・413からは「衙」の墨書土器が出土した。

第4表 歴史時代出土遺物一覧表(1)

| S I 404 住居跡 土器 一覧 | | | | | | |
|-------------------|----------|----------|-------------------------------|--|--|--|
| 図面 図版 | 種別 器形 | 出土 位置 | 口径 器高 底径 高台高 | 器形の特 徴 | 成・整形の特 徴 | 備 考 |
| 9-1 図版 12 | 土一坏 | カマド | — (7.8) 4.7 — | 狭い底部から胴部にかけて強く外反する。 | 内・外面、底部前面にヘラ削り。 | 底部から胴部下が残存。暗茶褐色で焼成良好。細砂粒を多く含むが薄く硬質。 |
| 9-2 図版 12 | 土一甕 | カマド | ((18.2)) (9.95) — — | ゆるやかな「く」の字口縁で口径も胴部径はほぼ同じ。 | 外面は口縁部に粗い横ナデ。頸部から胴部に斜位のヘラ削り。内面は横ナデ。 | 口縁から胴部の一部残存。暗黄褐色で焼成やや良好、細砂粒を多く含む、薄くやや硬質。 |
| 9-3 図版 12 | 土一甕 | カマド | ((24.4)) (6.6) — — | 「く」の字形口縁で大きく外反する。 | 外面は口縁部、横ナデ。肩部は交互の斜方位によるヘラ削り。内面は丁寧な横ナデ。 | 口縁から肩部の約1/2残存。褐色で焼成良好。胎土は密で硬質。 |
| 9-4 図版 12 | 土一甕 | フク土 | ((15.4)) (4.8) — — | ゆるやかな「く」の字、口縁。 | 外面は口縁部横ナデ。肩部に横位のヘラ削り。内面は丁寧な横ナデ。 | 口縁部が一部残存。暗茶褐色土で焼成やや良好。胎土は密でやや軟質。 |
| 9-5 図版 12 | 土一甕 | フク土 | ((24.2)) (6.55) — — | 「く」の字形口縁で大きく外反するが、口唇部はやや内彎 | 内外面に粗い横ナデ。 | 口縁部、約1/2残存。黄褐色で焼成はやや不良。砂粒を含む軟質。 |
| 9-6 図版 12 | 土一甕 | フク土 | ((25.8)) (6.8) — — | 「く」の字形口縁だが頸部から口縁にかけてなめらかに外反する。肩部にやや段を持つ。 | 外面は口縁部に粗い横ナデの後、指頭調整、肩部に横位のヘラ削り。内面は粗い横ナデ。 | 口縁部、約1/2残存。赤褐色で焼成不良。細砂粒を多く含む軟質。 |
| 9-7 図版 12 | 須一坏 | フク土 | 1.33 3.7 8.1 — | 底部から口縁部にかけて強く外反する。 | 内・外面ともロクロ整形、底部は回転糸切りによる切り離し。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含む硬質。 |
| 9-8 図版 12 | 須一坏 | フク土 | ((13.5)) 3.8 (8.3) — | 底部から口縁にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面とともにロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成良好。胎土は砂粒を少量含むやや軟質。 |
| 9-9 図版 12 | 土師質一坏 | フク土 | (2.2) 7.0 — — | 底部から胴部にかけてゆるやかに立ち上がる。 | 外面は極めて丁寧な磨き。内面は放射状の暗文。 | 底部のみ残存。赤褐色で焼成極めて良好。胎土は緻密で硬質。いわゆる「甲斐型坏」。 |
| S I 405 住居跡 土器 一覧 | | | | | | |
| 図面 図版 | 種別 器形 | 出土 位置 | 口径 器高 底径 高台高 | 器形の特 徴 | 成・整形の特 徴 | 備 考 |
| 9-10 図版 12 | 土一坏 | 排土 | ((14.0)) 3.7 10.3 — | 底部から胴部にかけて、ゆるやかに立ち上がり、胴部の際を境に口縁部は外反する。 | 外面は口縁部に横ナデ。胴部に横位のヘラ削り。内面は丁寧な横ナデ。底部は全面ヘラ削り。 | 口縁部約1/2欠損。茶褐色で焼成良好。胎土は密で硬質。 |
| 9-11 図版 12 | 土一甕 | フク土 | ((20.4)) (9.95) — — | 「く」の字口縁で胴部から口縁にかけてゆるやかに外反する。胴部上位に最大幅を持つ。 | 外面は粗い横ナデの後、指頭調整。頸部から胴部は横位から斜位のヘラ削り、内面は丁寧な横ナデ。 | 口縁から胴部約1/2残存。暗黄色で焼成は不良。胎土は粗く軟質。 |
| 9-12 図版 12 | 土一甕 | フク土 | ((20.1)) (19.4) — — | 「く」の字形口縁で頸部から口縁にかけてなめらかに開く。胴部上半に最大幅を持つ砲弾形。 | 外面は口縁から頸部にかけて丁寧な横ナデ。胴部上位は横位に、中位は斜位に下部から底部にかけては縦位のヘラ削り。 | 底部から口縁にかけて約1/2欠損。茶褐色で焼成良好。胎土は密で薄く硬質。 |

第5表 歴史時代出土遺物一覧表(2)

| S I 405 住居跡 土器 一覧 | | | | | | | | | |
|-------------------|----------|------------------------------|-----------------------------|---------------------------|--|--------------------------------------|---------------------------------------|-------------------|----|
| 図面 図版 | 種別 器形 | 出土 位置 | 口径 器底 高台高 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | 備考 | | | |
| 9-13 図版12 | 土一甕 | 床直 | ((10.1) (6.0) — — | やや「コ」の字形口縁、口径より胴部径が著しく広い。 | 外面は口縁部に粗い横ナデ。肩部に横位のへら削り。内面は丁寧な横ナデ。輪積痕あり。 | 口縁部から胴部の一部残存。燈色で焼成やや良。細砂粒を多く含み、やや硬質。 | | | |
| 9-14 図版13 | 須一坏 | 床直 | 12.9 3.5 7.7 — | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面、ロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺へら削り。 | ほぼ完形。黄灰色で焼成良好。胎土は密で硬質。 | | | |
| 9-15 図版12 | 須一坏 | 床直 | 12.6 3.9 8.5 — | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 外面は口縁部にかけてロクロ整形、底部は回転糸切り後、全面へら削り。 | 約1/2欠損。暗灰色で焼成良好。胎土は密で硬質。 | | | |
| 9-16 図版12 | 土一甕 | 床直 | — (7.0) ((13.6)) — | 平坦な底部から約80°外反する。 | 自然釉がかかり、内外面はロクロ整形、底部はへら削り。 | 底部から胴部の一部残存。黄灰色で焼成良好。胎土は粗く器厚は厚手で硬質。 | | | |
| 遺構外 土器 一覧 | | | | | | | | | |
| 図面 図版 | 種別 器形 | 出土 位置 | 口径 器底 高台高 | 器形の特徴 | 成・整形の特徴 | 備考 | | | |
| 10-17 図版13 | 土一甕 | 表土 | ((20.8) (5.9) — — | 「く」の字から「コ」の字形への中位にある口縁。 | 外面は口縁部に横ナデ、肩部に横位のへら削り、内面は横ナデ。 | | | | |
| 10-18 図版13 | 土一甕 | 表土 | ((30.2) (5.4) — — | 「朝顔」形に開く口縁。 | 外面は口縁部に横ナデ、肩部には縦位のへら削り。内面は横ナデ。 | 口縁部片、燈色で焼成やや良好。胎土に砂粒を少量含む。 | | | |
| 遺構外 男瓦 一覧 | | | | | | | | | |
| 図面 図版 遺物番号 | 出土 位置 | 狭端 広端 全長 厚さ | 成・整形の特徴 | | | | | 備考 | |
| | | | 凹面 | | | 凸面 | | | 端面 |
| | | | 素材 | 布目 | 特徴 | 叩き | 特徴 | | 特徴 |
| 10-19 図版13 | 排土 | — (14.7) (20.0) 2.0 | 粘土紐 | 23×23 | 広端、右側端縁幅広くへら削り。 | 不明 | 全面横ナデ。 | 広端、右側端面1面へら削り。 | |
| 遺構外 女瓦 一覧 | | | | | | | | | |
| 図面 図版 遺物番号 | 出土 位置 | 狭端 広端 全長 厚さ | 成・整形の特徴 | | | | | 備考 | |
| | | | 凹面 | | | 凸面 | | | 端面 |
| | | | 素材 | 布目 | 特徴 | 叩き | 特徴 | | 特徴 |
| 10-20 図版13 | 排土 | 27.9 — (24.8) 2.0 | 粘土板 | 19×15 | 広端(欠失)を除く3端縁幅広くへら削り。 | 縄9L | 縄目叩き下に糸切り痕残存。縄叩き長単位(幅4~5cm)、長さ19cm前後) | 狭端1面、左右側端2面のへら削り。 | |

第6表 歴史時代出土遺物一覧表(3)

| S I 410・411 住居跡 土器 一 覧 | | | | | | |
|------------------------|------------|------------|-----------------------------|---|--|---|
| 図 面 図 版 | 種 別 器 形 | 出 土 位 置 | 口 径 底 高 径 高 台 高 | 器 形 の 特 徴 | 成 ・ 整 形 の 特 徴 | 備 考 |
| 11 - 21 図 版 13 | 土一坏 | フク土 | 11.1 3.25 6.15 | 底部から口縁にかけて強く外反する。 | 内外面とも粗い横ナデ後、指頭痕調整。底部は全面ヘラ削り。全体に雑な整形。 | ほぼ完形。燈色で焼成不良。胎土は比較的密であるが軟質。「衛」の墨書。 |
| 11 - 22 図 版 13 | 土一坏 | フク土 | 10.6 3.5 5.4 | 底部から胴部にかけてやや外反し、胴部から底部にかけて強く外反する。 | 内・外面とも粗い横ナデ後、指頭痕調整。底部は全面ヘラ削り。全体に雑な整形。 | ほぼ完形。明燈色で焼成不良。胎土は粗く軟質。墨書の痕跡あり。 |
| 11 - 23 — | 土一甕 | フク土 | ((15.7)) (4.6) | 「コ」の字形口縁を持つ。 | 外面は口縁部と横ナデ、肩部に横位のヘラ削り。内面は横ナデ。輪積痕あり。 | 口縁部片。黄茶色で焼成不良。胎土は密で軟質。 |
| 11 - 24 図 版 13 | 土一甕 | フク土 | ((20.6)) 5.5 | 明瞭な「コ」の字形口縁を持ち、やや肩部が張っている。 | 外面は口縁部に横ナデ、頸部は指頭痕調整。肩部に横位のヘラ削り内面は丁寧な横ナデ。 | 口縁部片。茶褐色で、焼成やや不良。砂粒を少量含みやや軟質。 |
| 11 - 25 図 版 13 | 土一甕 | フク土 | (19.7) (5.7) | 肩部がややはっきり、「コ」の字形口縁。 | 外面は口縁部に横ナデと指頭痕調整。内面は横ナデ。 | 口縁部片。黄茶褐色土で焼成やや不良。胎土は砂粒を少量含み軟質。 |
| 11 - 26 — | 土一甕 | フク土 | ((22.1)) (8.55) | 垂直でややふくらみを持つ頸部で開いた「コ」の字形口縁。 | 外側は口唇部から頸部にかけて横ナデ、内面は丁寧な横ナデ。 | 口縁部の約1/2残存。暗黄褐色で、焼成は良好。微砂粒を多く含む。 |
| 11 - 27 図 版 13 | 土一甕 | フク土 | ((19.8)) ((15.5)) | 垂直でややふくらみを持つ頸部で開いた「コ」の字状口縁。肩部に最大幅を持つ。 | 外面は口唇部に横ナデ。頸部は横ナデ後、指頭痕調整、肩部は横位のヘラ削り。胴部は斜方位のヘラ削り。内面は丁寧な横ナデ。 | 口縁から胴部にかけて1/2残存。暗褐色で焼成良好。胎土は密で硬質。胴部に黒斑あり。 |
| 11 - 28 図 版 14 | 須一坏 | 床直 | ((11.2)) 3.8 ((6.0)) | 底部から口縁部にかけてやや強く外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 約1/2残存。薄暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含む硬質。 |
| 11 - 29 図 版 14 | 須A一坏 | 床下 | 12.4 3.8 6.9 | 底部から口縁部にかけてやや強く外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成良好。微砂粒を少量含み硬質。 |
| 11 - 30 図 版 14 | 須A一坏 | フク土 | 11.9 3.8 5.4 | 底部から胴部にかけてやや丸味を持って外反し、胴部から口縁にかけて強く外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 口縁部を一部欠損。部分的に褐色で焼成不良。2mm大の砂粒を多く含みやや軟質。 |
| 11 - 31 図 版 14 | 須A一坏 | フク土 | 12.2 3.0 6.2 | 底部から口縁部にかけて強く外反する。 | 内・外面ともにロクロ調整。底部は回転糸切りによる切り離し。 | ほぼ完形。暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含む硬質。 |
| 11 - 32 図 版 14 | 須A一坏 | フク土 | ((12.2)) 3.3 ((5.8)) | 底部から口縁部にかけて胴部にやや丸味をもちながら外反する。 | 内・外面ともにやや粗いロクロ調整。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 1/2残存。暗灰色で焼成やや不良。砂粒を多く含む軟質。 |
| 11 - 33 図 版 14 | 須一坏 | フク土 | ((11.8)) 3.3 ((6.0)) | 底部から胴部にかけてやや丸味を持って外反し、胴部から口縁にかけて強く外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 1/2残存。暗茶灰色で焼成やや不良。火ダスキが全体にかかる。胎土はやや密で軟質。 |
| 11 - 34 図 版 14 | 須A一坏 | フク土 | ((12.0)) 3.5 ((7.1)) | 底部から口縁部にかけて強く外反する。 | 内・外面ともにロクロ調整。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 約1/2残存。薄暗灰色で焼成良好。胎土は緻密で硬質。 |

第7表 歴史時代出土遺物一覧表(4)

| S I 410・411 住居跡 土 器 一 覧 | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------|------------------|------------------|------------------------------|------------------------------------|--|--|----------------------------|--------------|-----|--------|--------|--|
| 図 面 図 版 | 種 別 器 形 | 出 土 位 置 | 口 径 底 高 台 高 | 器 形 の 特 徴 | 成 ・ 整 形 の 特 徴 | 備 考 | | | | | | |
| 11-35 図版15 | 須一坑 | フク土 | (13.4) — — | 底部から口縁にかけて胴部にやや丸味を持って立ち上がる。 | 内・外面ともにロクロ整形で特に外面は顕著。底部は回転糸切りによる切り離し。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成良好。胎土は密で硬質。 | | | | | | |
| 11-36 図版14 | 須A一坑 | フク土 | 14.5 6.05 6.8 — | 底部から口縁にかけて胴部にやや丸味を持たせながらゆるやかに外反する。 | 内・外面、特に外面にロクロ整形が顕著。 | 口縁部を一部欠損。暗灰色で焼成良好。砂粒を少量含む硬質。 | | | | | | |
| 11-37 — | 須A一坑 | フク土 | ((13.8) 5.7 (7.4) — | 底部から口縁部にかけて胴部にやや丸味を持って立ち上がる。 | 内・外面、特に外面にロクロ整形痕が著るしい。 | 約1/2弱残存。赤褐色で焼成良好。胎土は緻密で硬質。 | | | | | | |
| 11-38 図版14 | 須B一坑 | フク土 | ((18.1) (7.6) — — | 胴部はゆるやかに外彎し、口縁はほぼ垂直。 | 内・外面ともにロクロ整形。特に外面は顕著。 | 全体の約1/2弱残存。赤褐色で焼成良好。胎土は砂粒を多く含む、薄手で硬質。 | | | | | | |
| 11-39 図版14 | 須A一坑 | フク土 | ((18.6) (5.15) — — | 胴部から口縁にかけてやや垂直に近く立ち上がる。 | 内・外面ともにロクロ整形。特に外面は顕著。 | 口縁部片。赤褐色で焼成良好。3~4mm大の砂粒を含む。 | | | | | | |
| 11-40 図版14 | 須一壺 | フク土 | — (10.5) — — | 半球状の胴部。 | 内・外面ともにロクロ整形。 | 胴部約1/2残存。外面は灰白色。内面は黄茶色で焼成は良好。胎土は緻密で硬質。 | | | | | | |
| S I 410・411 住居跡 土 製 品 一 覧 | | | | | | | | | | | | |
| 図 面 図 版 | 種 別 | 出 土 位 置 | 寸 法 | | 備 考 | | | | | | | |
| — 図版18 | 支脚 | カマド | 全長 底幅 | (14.0) 10.0 | 暗灰色で、5面を平坦に面取りしている。地上に出る部分は、尖っており、支えにしている。凝灰岩。カマドの支脚。 | | | | | | | |
| — 図版18 | 支脚 | カマド | 全長 底幅 | (13.1) 10.5 | 暗灰色で、4面を平坦に面取りしている。地上に出る部分はやや尖っており、支えにしている。凝灰岩。カマドの支脚。 | | | | | | | |
| S I 410 住居跡 燈 一 覧 | | | | | | | | | | | | |
| 図 面 図 版 | 出 土 位 置 | 直 径 | 内 区 | | 内 区 | | 外 区 | | | 全 長 | 備 考 | |
| | | | 中 房 径 蓮 子 数 | 弁 区 径 弁 幅 数 | 幅 | 内 縁 幅 文 様 | 外 縁 幅 高 文 様 | | | | | |
| 12-41 図版15 | フク土 | 18.3 | 4.8 1+4 | 14.0 2.7 SA 6 | 2.4 2.0 | 1.0 0.9 | A a | 1.4上 1.1下 | 0.5 | A a | (31.3) | 接合方法はB I技法、瓦当裏面に縄叩き(L)、男瓦部縄叩き後回転ナデ。中房の形状B I。 |
| 12-42 図版16 | フク土 | 15.0 | (1.2) 菱形 (1) | (14.4) 3.5 SC(6) | 2.8 | 0.7 | A a | 1.9 | 1.1 | A a | 40.3 | 接合方法はB I技法、男瓦部縄叩き後回転ナデ。 |

第 8 表 歴史時代出土遺物一覧表(5)

| S I 410 住居跡 男 瓦 一 覧 | | | | | | | | | |
|-----------------------|------------|-------------------------------|----------------|------------------------|--|-------|--------------------------------|---------------------|-----|
| 図 面 図 版 | 出 土 位 置 | 狭端 広端 全長 厚さ | 成 形 の 特 徴 | | | | | 備 考 | |
| | | | 凹 面 | | | 凸 面 | | | 端 面 |
| | | | 素 材 | 布 目 | 特 徴 | 叩 き | 特 徴 | | 特 徴 |
| 12 - 43 図 版 17 | カマド 14 | 9.2 — (33.3) 1.1 | 粘土紐 | 20×17 | 広端(欠失)を除く3端縁へら削り。 | 縄 | 縄叩き後全面縦ナデ、3端縁幅狭くへら削り。 | 狭端、左側端1面、右側端2面へら削り。 | |
| 13 - 44 図 版 16 | カマド | 10.7 (18.0) 39.5 1.6 | 粘土紐 | 34×30 | 粘土紐接合指ナデ。広端を除く3端縁幅狭くへら削り。布合せ目sb。 | 縄L | 縄叩き後横ナデ広端寄り縦へら削り。左右両側端縁へら削り。 | 広端を除く3端縁1~2面へら削り。 | |
| S I 410 住居跡 女 瓦 一 覧 | | | | | | | | | |
| 図 面 図 版 | 出 土 位 置 | 狭端 広端 全長 厚さ | 成 形 の 特 徴 | | | | | 備 考 | |
| | | | 凹 面 | | | 凸 面 | | | 端 面 |
| | | | 素 材 | 布 目 | 特 徴 | 叩 き | 特 徴 | | 特 徴 |
| 13 - 45 図 版 17 | カマド 6 | (8.9) — (27.1) 2.0 | 粘土紐 ? | 39×42 | 狭端縁不調性、右側端縁やや幅広くへら削り。不明朱墨書あり。 | 斜格子 | | 狭端、右側端1面へら削り。 | |
| 14 - 46 図 版 17 | フク土 | — (14.2) (22.4) 2.3 | 粘土紐 | 35×31 | 広端、左側端縁幅狭くへら削り。 | 縄目10L | 縄目上に棒状圧痕1条あり。 | 広端面2面へら削り、右側端面ナデ。 | |
| 14 - 47 図 版 17 | フク土 | — (17.5) (27.1) 2.1 | 粘土板 | 27×23 | 広端、左側端縁幅狭くへら削り。広端側限落し。 | 平行 | 叩き密。 | 広端、左側端面とも2面へら削り。 | |
| 14 - 48 図 版 18 | — | (13.7) — (26.3) 2.0 | — | 23×22 | 狭端幅狭く、左側端幅広くへら削り。粘土紐接合痕、布継ぎ目痕あり。 | 9L | 縄叩き上に棒状圧痕1条あり。狭端、左側端やや幅広くへら削り。 | 狭端、左側端1面へら削り。 | |
| 14 - 49 図 版 19 | — | (16.2) — (23.4) 2.6 | 粘土板 | 16×20 | 狭端、右側端縁幅広くへら削り。 | 縄8L | 縄叩き密(叩き板幅4~5cm、長さ8cm位) | 狭端ワラ状圧痕多し、右側面1面削り。 | |
| S I 410 住居跡 土 製 品 一 覧 | | | | | | | | | |
| 図 面 図 版 | 種 別 | 出 土 位 置 | 寸 法 | | 備 考 | | | | |
| — 図 版 19 | 支脚 | カマド | 全長 底幅 厚さ | (67.8) 16.5 18.4 | カマドの天井部に置かれていたために、赤褐色化しており崩れ易い。4面を面取りしてある。 | | | | |

第9表 歴史時代出土遺物一覧表(6)

| S I 413・421 住居跡・遺構外 土器 一 覧 | | | | | | |
|-------------------------------|------------------|------------------|--------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------------|--|
| 図 版 | 種 別 器 形 | 出 土 位 置 | 口 径 高 底 径 高 台 高 | 器 形 の 特 徴 | 成 ・ 整 形 の 特 徴 | 備 考 |
| 15 — 50 図 版 20 | 須A一坏 | 床直 | 12.3 3.9 6.95 | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。 | 口縁一部欠損。暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含む。 |
| 15 — 51 図 版 20 | 須A一坏 | フク土 | ((12.6) 3.6 6.7 | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。 | 底部と胴部から口縁の一部を残存。薄灰色で焼成良好。砂粒を多く含むがやや硬質。 |
| 15 — 52 図 版 20 | 須A一坏 | カマド | ((11.8) 2.6 ((8.0)) | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。 | 全体の約1/4残存。暗灰色で焼成良好。砂粒を少量含む。やや硬質。 |
| 15 — 53 図 版 20 | 須A一坏 | フク土 | ((11.0) 3.3 ((7.1)) | 底部から口縁部にかけてやや強く外反。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。やや小ぶり。 | 底部から口縁の一部残存。薄暗灰色で焼成良好。細砂粒を少量含む硬質。 |
| 15 — 54 図 版 20 | 須A一坏 | フク土 | ((12.0) 3.45 ((7.8)) | 底部から口縁部にかけてやや外反。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は周辺ヘラ削り。 | 全体の約1/4残存。薄暗灰色で焼成良好。胎土は密で硬質。 |
| 15 — 55 図 版 20 | 須A一坏 | カマド 内 | ((12.8) 4.1 ((8.2)) | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面ともにロクロ整形。底部は周辺ヘラ削り。 | 全体の約1/4残存。暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含むやや軟質。 |
| 15 — 56 図 版 20 | 須A一坏 | フク土 | — (1.8) 8.8 | 広い底部で皿の可能性あり。 | 内・外面とも粗いロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。 | 底部のみ残存。暗灰色で焼成やや良好。細砂粒を多く含む。やや軟質。 |
| 15 — 57 図 版 20 | 須A一蓋 | フク土 | ((18.4) 4.6 | やや雑な宝珠形つまみで、かえしを有する。 | 内・外面ともにロクロ整形。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成良好。砂粒を少量含むが硬質。 |
| 15 — 58 図 版 20 | 須A一埴 | フク土 | ((17.0) 5.0 ((8.8)) | 胴部から口縁部にかけて丸味を持って立ち上がる。 | 内・外面ともにロクロ整形。 | 口縁部から胴部片。暗灰色で焼成良好。胎土は緻密で硬質。 |
| 15 — 59 図 版 20 | 須A一蓋 | フク土 | — 1.8 | 宝珠状つまみを持つ。 | 内・外面ともにロクロ整形。 | 全体の1/4弱残存。薄暗灰色で焼成不良。微粒子を多く含む軟質。「豊」の墨書。 |
| 15 — 60 図 版 20 | 須A一甕 | フク土 | — (10.3) ((12.0)) | 平坦な底部からゆるやかに外反する胴部。 | 外面は、ロクロ整形の後、格子目状の叩き整形の内面と底部に自然釉。 | 底部から胴部の一部残存。 |
| 15 — 61 図 版 20 | 須A一甕 | カマド | — (4.05) | 「T」字形の口唇部。頸部と胴部を区画する、貼り付け隆帯を有する。 | 内・外面ともに丁寧なロクロ整形。内面に自然釉。 | 口縁部片である。灰白色で焼成良好。胎土は緻密硬質。 |
| 15 — 62 図 版 20 | 須A一甕 | フク土 | — (10.5) 8.4 | 低い付け高台と胴部に丸味を持つ。 | 全面をロクロ整形の後、漬けガケによる施釉。 | 底部から胴部の一部を残存。縁釉。 |
| 15 — 63 図 版 20 | 土師質一坏 | カマド | — 3.7 6.6 | 底部から口縁部にかけてやや強く外反する。 | 外面の口縁から内面にかけて横ナデ。胴部は指頭調整。底部は全面ヘラ削り。 | 口縁部を一部欠。橙色で焼成はやや不良。胎土は比較的密でやや硬質。 |
| 15 — 65 図 版 21 | 須A一坏 | フク土 | ((12.8) 3.4 ((7.9)) | 底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。 | 内・外面とも丁寧なロクロ整形。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ削り。 | 約1/4欠損。暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含むが硬質。 |

第10表 歴史時代出土遺物一覧表(7)

| S I 413・421 住居跡・遺構外 土器 一 覧 | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|------------------|------------------|-----------------------------|-----------------------|---|------------------------------------|---------------|-----|-----|------------|-----------------------------|
| 図 面 版 | 種 別 器 形 | 出 土 位 置 | 口 径 器 底 高 台高 | 器 形 の 特 徴 | 成 ・ 整 形 の 特 徴 | 備 考 | | | | | |
| 15 - 67 | 須A一坏 | 表土 | ((11.8)) 3.5 5.9 | 底部から口縁にかけてやや外反する。 | 内・外面ともロクロ整形。口縁部に自然釉。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成やや良。胎土は砂粒を多く含み、やや軟質。 | | | | | |
| 15 - 68 | 須A一坏 | 表土 | ((10.7)) 3.0 ((5.8)) | 底部から口縁にかけてやや強く外反する。 | 内・外面とも丁寧なロクロ整形。底部は回転糸切り。 | 約1/2残存。暗灰色で焼成良好。砂粒を多く含む。 | | | | | |
| 15 - 69 | 須B一坏 | 表土 | — (2.2) 5.3 | 底部から胴部にかけて強く外反する。 | 内・外面ともにやや雑なロクロ整形。底部は回転糸切りによる切離し。 | 約1/2残存。暗茶褐色で焼成やや不良。胎土は密でやや硬質。 | | | | | |
| 15 - 70 | 土一坏 | 表土 | ((11.1)) 3.6 ((5.8)) | 底部から口縁部にかけて強く外反する。 | 外面は口縁部に横ナデ。胴部は指頭調整。内面は横ナデ。底部は全面ヘラ削り。 | 全体の約1/2残存。薄黄灰色で焼成不良。胎土は粗く軟質「衛」の墨書。 | | | | | |
| 遺構外 鏡 一 覧 | | | | | | | | | | | |
| 図 面 版 | 出 土 位 置 | 直 径 | 内 区 | | 内 区 | | 外 区 | | | 全 長 | 備 考 |
| | | | 中房径 蓮子数 | 弁区径 弁弁数 | 幅 | 内 縁 幅 文様 | 外 縁 幅 高 文様 | | | | |
| 15 - 71 | 表土 | 18.6 | 1.0 | 13.2 3.0 SC 6 | 2.6 | 0.9 | A a | 1.7 | 0.3 | A a (6.1) | 中房の形状 B1 接合方法 B1 形状B1 |
| S I 413 住居跡 土製品 一 覧 | | | | | | | | | | | |
| 図 面 版 | 種 別 | 出 土 位 置 | 寸 法 | | 備 考 | | | | | | |
| — 図版 21 | 支脚 | フク土 | 全長 底幅 | 17.4 7.3 | カマドの支脚である。5面を面取りした先尖りの四角柱である。カマドに置かれていたため、赤褐色化している。 | | | | | | |
| S I 420 住居跡 土器 一 覧 | | | | | | | | | | | |
| 図 面 版 | 種 別 器 形 | 出 土 位 置 | 口 径 器 底 高 台高 | 器 形 の 特 徴 | 成 ・ 整 形 の 特 徴 | 備 考 | | | | | |
| 15 - 64 図版 21 | 土師質一坏 | フク土 | ((12.8)) 3.6 ((8.6)) | 胴部に強く稜を持ちやや強く外反する。 | 内面と外面口縁は横ナデ。胴部から底部は全面ヘラ削り。 | 約1/2残存。薄橙色で焼成。胎土は比較的密で、軟質。 | | | | | |

第11表 歴史時代出土遺物一覧表(8)

| S I 422 住居跡 土器 一 覧 | | | | | | |
|--------------------|------------|------------|---------------------------------|--------------------|---------------------------------------|------------------------------------|
| 図 面 図 版 | 種 別 器 形 | 出 土 位 置 | 口 径 器 高 底 径 高 台 高 | 器 形 の 特 徴 | 成 ・ 整 形 の 特 徴 | 備 考 |
| 15 - 66 図 版 21 | 土師質一 環 | フク土 | ((11.4) 3.3 ((4.6)) — | 底部から口縁にかけてゆるやかに外反。 | 外面はヘラ削り。 内面は回転する暗文と、放射状の暗文。底部ヘラ削り。 | 口縁部から底部にかけて一部残存。赤褐色で焼成良好。胎土は緻密で硬質。 |

VI 小 結

本調査で検出された住居跡からは、その時期を判別するのに良好な資料を多く出土した。ここでは、遺物の観察から住居の時期と先後関係を明らかにし、本調査区と、その周辺における集落構成のありかたについて予察したい。

1. 住居跡の年代

S I 404

本住居跡で出土した土器の主体は甕と坏である（図面9-2~6・図版12）。この一群の甕の口縁部は「く」の字形を呈している。2、3、4は、口径が胴部径とほぼ同じか、やや広い。坏7は口径13.3cm、底径8.1cm。底部は回転糸きり無調整である。8は口径13.5cm、底径8.3cm。底径は切離しの後、周辺ヘラケズリによる調整を行っている。坏の法量は平均口径13.4cm、底部8.2cmである。形態は比較的厚手の底部を持ち丸みをもって内湾気味に立上がる。色調は淡灰色。焼成は良好、胎土は緻密である。こうした特徴は武蔵国分寺創建期（I期）須恵器坏に比定される。周辺の遺跡では鳩山窯跡群における^(註1)、小谷窯跡群第III期の第6号窯跡（以下KB6と称する）出土の須恵器坏の諸要素と一致する^(註2)。

9はいわゆる「甲斐型坏」である。赤褐色で極めて硬質。器体部外面は丁寧な横ヘラミガキで内面は放射状の暗文が施されている。この特徴は坂本美夫氏等による甲斐型坏I期に相当する^(註3)。

瓦は小片で時期を判別される資料はなかった。

よって、本住居跡の時期は、8世紀第3四半期代に位置付けられよう。

S I 404

本住居跡で出土した土器の主体は甕と坏である。（図面9-10~16・図版10~16）。甕11、12の口縁部は「く」の字形を呈している。口径と胴部径はほぼ同じ。甕13は胴部径がやや広い。土師器坏10は体部に稜を持ち体部外面の横位のヘラケズリと底部全面ヘラケズリといった特徴から8世紀後半代考えられる。

須恵器坏14は口径約13cm、底径約8cm。底部は回転糸きり切離しの後、周辺ヘラケズリによる調整を行っている。15は口径12.6cm、底径8.5cm。底部は全面ヘラケズリである。形態は15の口縁がゆるやかに外反し、口径がやや小さくなるものの、ほぼS I 404の須恵器坏と同じである。

瓦は小片で時期を判別される資料はなかった。

よって本住居跡の時期は、S I 404と同じ8世紀第3四半期代に位置付けられる。

S I 410・411

本住居跡で出土した土器は、土師器坏（図面11-28~34・図版13）、土師器甕（図面11-28~34・図版13）、須恵器坏（図面11-28~34・図版13）、須恵器碗（図面11-35~39・図版14）を図示した。土師器坏は12、13ともに指頭による体部調整が行われており、いわゆる南武蔵型坏である。須恵器坏の平均法量は口径11.9cm、底径6.2cmではほぼ2：1の比を示している^(註4)。これはにG59窯式の口径・底径比に一致する。土師器甕23・24は「く」の字形、25~27は「コ」の字形を呈する。須恵器碗はゆるやかに丸みを持った体部と、口縁はやや外反する。

瓦は特にカマドの袖部に使われていた鏡瓦（図面12-41・42）が再建期（I期）の典型である。よって本住居跡の時期は、9世紀後半代に位置付けられる。

S I 413

本住居跡で出土した土器の主体は坏である。（図面15-50~56・図版20）。須恵器坏の法量は口径12cmから12.6cm、底径はほぼ7.5cmである。器形は比較的厚手の底部を持ち丸みをもって内湾気味に立上がる。I期の須恵器に比較すると口径がかなり小さくなり、平均で12cm程度であり、法量的には、やや新しい傾向である。ただし、底径が比較的広いという傾向はあり創建期の須恵器的な要素も認められ、第I期から第II期への移行期の資料といえよう。

瓦は小片で時期を判別される資料はなかった。

よって本住居跡の時期は、8世紀末から9世紀初頭であろう。

S I 420・421・422

どの住居跡も極めて部分的な調査しか行えなかったため出土遺物も少量である。時期が判別される土器はS I 420で体部に稜を持つ8世紀後半代の土師器坏（図面15-64・図版21）が1点。S I 421は底部が回転糸きり切離しの後、周辺ヘラケズリによる調整を行っている持つ8世紀末の須恵器坏（図面15-65・図版21）が1点である。

S I 422では畿内産と考えられる土師器坏片が1点出土した。畿内産の土師器は、林部均氏の^(註5)論考と府中市域の成果を^(註6)参考にすると南武蔵に搬入される時期は8世紀中頃に考えられているが、S I 422が8世紀中頃まで遡る可能性は土師器坏片1点では不明である。

これらの住居跡からの出土遺物が少量であるため、時期の判別は曖昧であるが、おおよそ8世紀後半代に位置付けられよう。

2. 西方地域集落の様相

各住居の位置付け

以上の観察より本調査区における住居の年代は、資料が少ないS I 420・421・422がやや曖昧ではあるものの、S I 410・411が9世紀代。S I 404,405,413,420・421・422がおおよそ8世紀第3四半期から9世紀初頭に位置付けられる。これらの年代観を武蔵国分寺の変遷の中に見

^(註7)ると、S I 410・411は再建期（第Ⅱ期）にあたる。S I 404,405,413,420・421・422は創建期（Ⅰ期）に位置付けることができよう。もちろん、S I 404,405,413,420・421・422のなかでも先後関係は存在するがⅠ期の住居が6軒存在しているということは、本調査区をしてⅠ期の集落の一部を構成していると考えられるのである。

また、この6軒の住居跡はS I 413を東端としS I 420,421,404,405,の順に西方向に広がる傾向にある。

それでは、武蔵国分寺周辺の集落構成のなかで本調査区はどのような場所に位置付けられるのであろうか。

周辺遺跡との関係

既往の調査地域である僧寺周辺では、Ⅰ期の集落というよりも当該期の住居跡そのものの検出が少なく、尼寺の北部S I 24と尼寺の西方地区のS I 200がⅠ期の住居跡として調査されていた。これに対し、尼寺の西側で本調査区のほぼ真北の崖線上にある武蔵台遺跡^(註8)では、前内出二号窯あるいはKB 6号窯などに近い土器群を出土する住居群が検出されている。特に23号住居跡からは、「具注曆」^(註9)が記された漆紙文書が出土しており、武蔵国分寺創建段階（Ⅰ期）の住居跡としてとらえられる。武蔵台遺跡ではこの時期の住居跡が多く検出されており、武蔵国分寺創建段階の集落は尼寺の北西地区の崖線上に広がっていることが推測されている。

さらに本調査区の南側では、「武蔵国分寺関連遺跡の調査」—南方地区・府中都市計画道路3・2・2の2号線建設に伴う調査が継続して行われている（以下関連遺跡の調査と仮称）。この調査によって、武蔵国分寺遺跡の南限が明らかにされ、ここから南には武蔵国府域にいたるまで無居住地区であることが明らかにされている。さらに西側に調査区を広げた結果、国分住居跡が濃密な状態で検出され始めていると報告されている。

以上のように本調査区の南と北でほぼ同時期の遺跡が調査された。また、現在も調査中である。両方の遺跡の調査を担当されている早川泉氏は、尼寺西方に広がる住居群を武蔵国分寺造営に関係した人々が居住した地域であると考えられている。

3. まとめ

最後に、本調査区と周辺遺跡の状況から、創建期の集落の広がりについてまとめる。

集落の範囲は大きく捉えると、尼寺の西方地域で寺地の西側一帯と考えられよう。さらに南限は崖線の南方に約300m程度、西限は調査報告が少ないため限定はできないが崖線に沿って西側に広がる地域。北限は崖線上周辺地域であり、尼寺寺域と集落の境界（東限）も本調査区と関連遺跡、武蔵台遺跡の住居の東端を結ぶ周辺にあると推測した。

この推測は今後の調査とその成果によって修正されるべきものであるが、何故に、こうした地

域に創建期の集落が集中したのであろうか。さらに、この地域の集落には以下の特徴がある。集落は創建期に形成されるものの後代に続く形跡が認められない。古代東山道という交通路に近い。崖線に近くその西方域に沿ってひろがる。以上の特徴から推測されることは、この集落が極めて限定されたエリアの中で形成されているということである。それは、国分寺の造営に支障が無く、物資の集積に利便な古代東山道に近く、集落を営むのに必要な水は崖線下の湧水によって容易に得られる地域である。よって東京警察病院内とその周辺の集落は武蔵国分寺造営に関連した人々の居住地区だったことが推測されるのである。

＊

今回の調査は、これまで創建期の集落については、尼寺西方地域にひろがると漠然と考えられていて地域に、ある程度の範囲を与える資料が得られたと考える。とはいうものの今回の調査で完全な住居跡を調査した例は僅かに2軒であり、集落の一部を確認したにすぎない。警察病院内にはさらに多くの住居跡だけではなく、武蔵国分寺創建にかかわる重要な遺構が存在する可能性が指摘されるのである。東京警察病院多摩分院内とその周辺は今後最も注目される地域なのである。

註

1. 「鳩山窯跡群Ⅰ」1988 pp80～101
2. 同上 1988 pp346～352
3. シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—
坂本美夫 末木健 堀内真 1988 pp38～44
4. 同上 福田健司 pp 1～6
5. 林部均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」考古学雑誌第72巻第1号
昭和61年9月 pp31～71 本調査出土した資料は1点でしかも破片であることからこの資料が明らかに畿内産土師器かどうかはさらに検討されなければならない。しかしながら、この資料を畿内産土師器と仮定し、「東日本で出土する畿内産土師器は、飛鳥Ⅲ・平城Ⅰ・平城Ⅲの3時期に集中している。これは、この3時期にとくに東日本と畿内との交流が活発となったことを示し、古代律令国家の地域支配が、7世紀後半、8世紀初頭、8世紀中ごろと段階を踏んで進められたことを示している。」(P63)。という林部氏の論文を引用させてもらえば、今後も武蔵国分寺創建期段階で畿内産土師器が出土し、それに伴う遺構が検出される可能性が高いと考えられる。
6. 武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ1984.3.30 ここではN2期の土師器にともなって畿内産土師器の出土が報告されている。この時期の年代観については以下の年代があたえられてい

る (P134)。

7世紀末～8世紀末 ; N1～N4期

8世紀末～9世紀初頭; H1～H4期

9世紀末～10世紀末 ; H5～H6期

10世紀末～11世紀末; H7～H9期

7. 武蔵国分寺は大略以下の三期に区分して、その変遷をとらえている。

I期 創建期 (8世紀から9世紀前半代)

I a期 国分寺創建期直前 (いわゆる草創期)

I b期 国分寺創建期

I c期 国分寺創建期～再建期

II期 再建期 (9世紀代)

III期 衰退期 (10、11世紀以降)

III a期 区画溝の一部が埋まり住居が増加する

III b期 寺域区画溝の意義が失われ、終末期

8. 都立府中病院の病棟増地区工事に伴う調査で遺跡名は武蔵台遺跡である。武蔵台遺跡は武蔵国分尼寺の北西台地上に展開する旧石器時代から奈良・平安時代の集落遺跡である。地理的位置から武蔵国分寺との密接な関係が指摘されている。

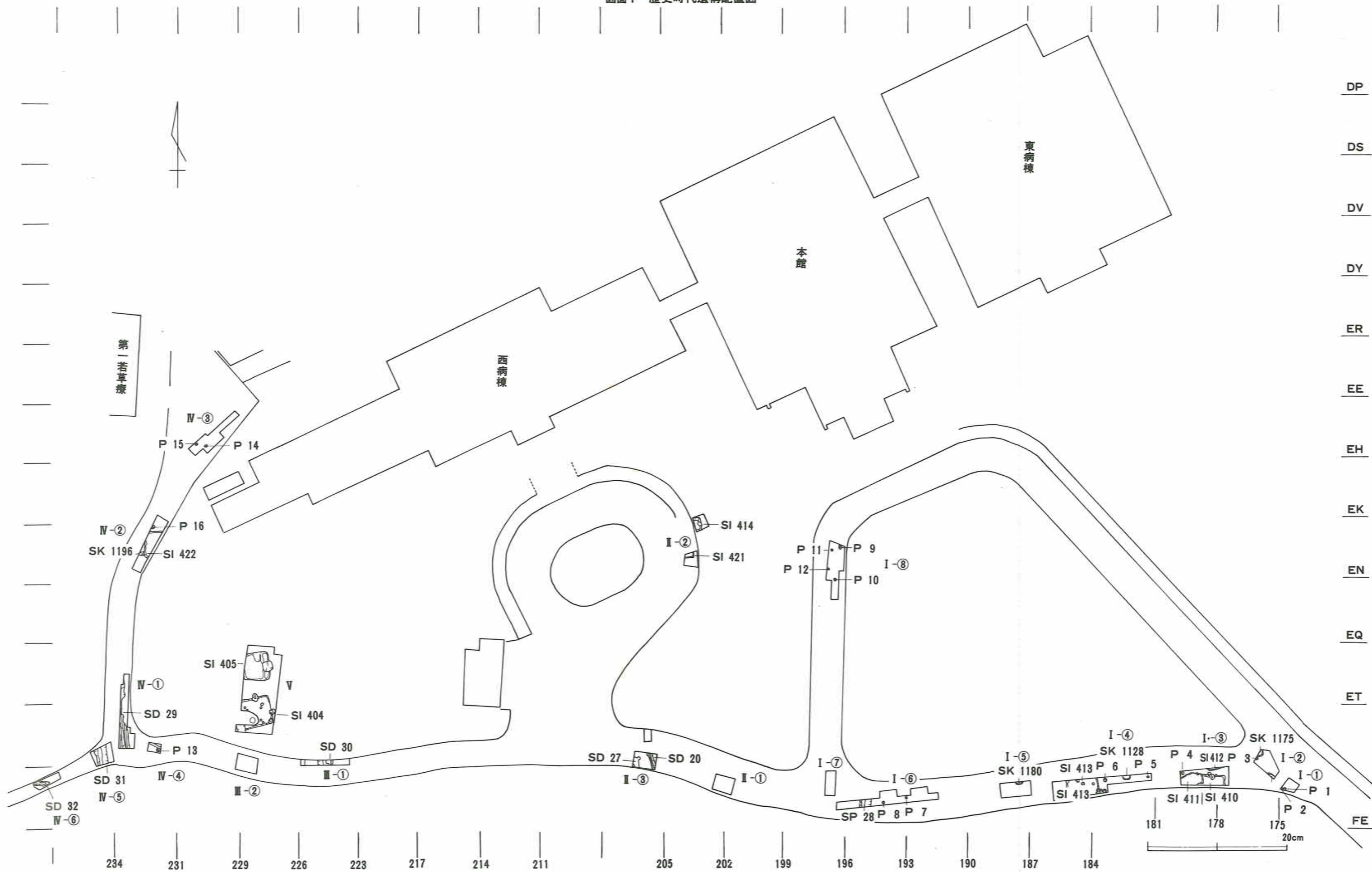
9. 武蔵台遺跡23号住居跡から出土した漆紙に記されていた暦。具注暦とは、暦面を上・中・下の三段に別けて暦日の下に吉凶・禍福などの内容を記した暦である。23号住居跡から出土した具注暦が重要なのは、これが、「天平勝寶九歳暦」の断片であり、天平勝寶九歳は西暦757年と考えられ、これはほぼ武蔵国分寺建立の時期にあるからである。

参考文献

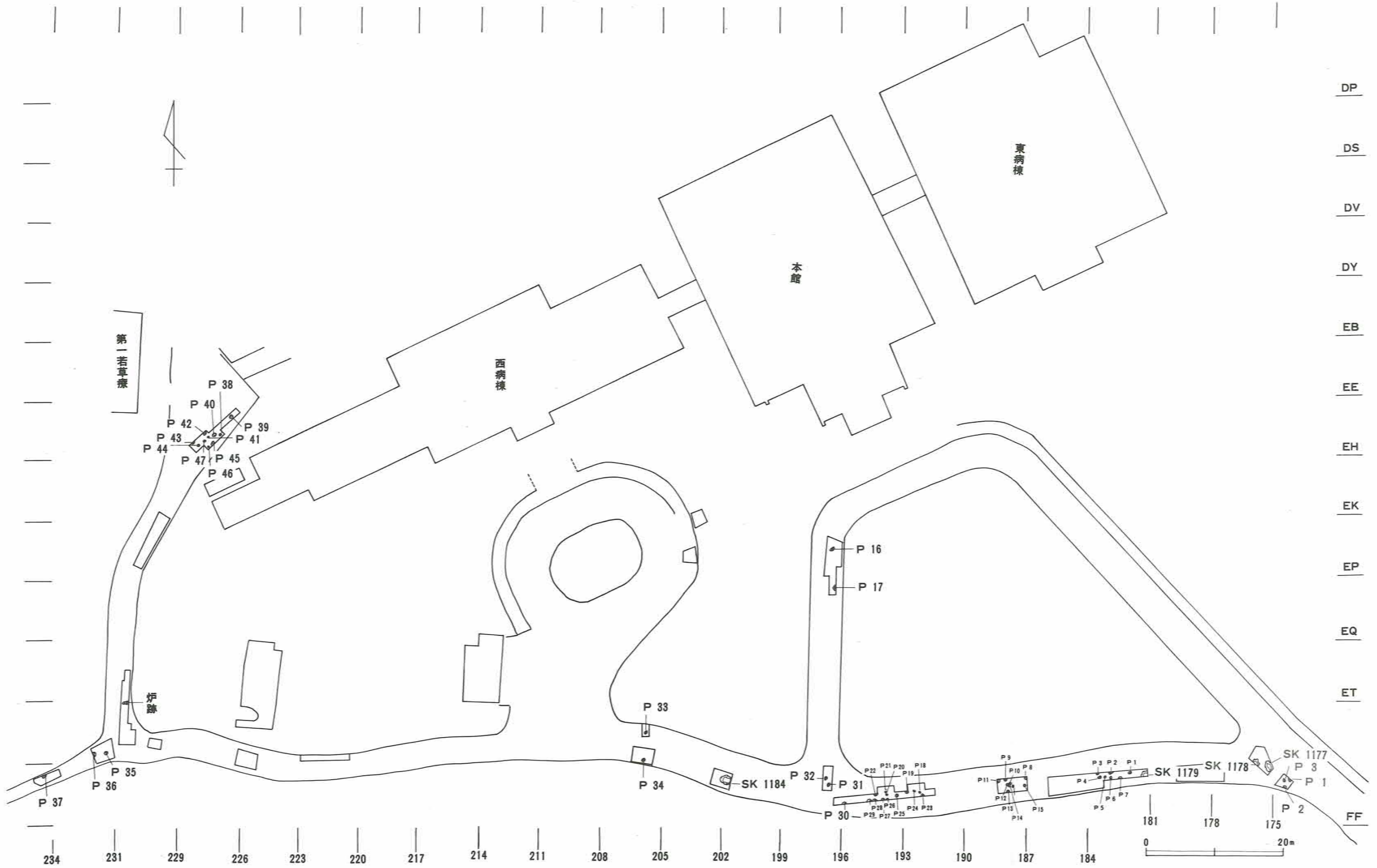
- ア 有吉重蔵，1990，「武蔵国分寺」『考古学ジャーナル』5月号
- コ 国分寺市史編さん委員会，昭和61年3月31日，『国分寺市史』
- サ 坂本美夫・末木 健・堀内 真，1983，「甲斐地域」『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号
- ハ 服部敬史，1983，「南武蔵の窯址」『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号
早川 泉・岡崎完樹・堀苑孝志，1990・1991，『武蔵国分寺関連遺跡の調査Ⅰ・Ⅱ』，武蔵国分寺関連遺跡調査会
林部 均，昭和61年9月，「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号，日本考古学会
- フ 府中病院内遺跡調査団，平成元年5月27日，『武蔵国分寺跡出土の漆紙文書—武蔵台遺跡—』
- ヤ 山口辰一，1984，「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」『武蔵国分関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市教育委員会
- ワ 渡辺一，1987「窯跡からみた須恵器について」『埼玉考古』第26号，埼玉考古学会
渡辺一，1987「小谷B窯跡Ⅱ期と前内出窯跡の年代—天平5年木簡を手掛りに—」『埼玉考古』第26号，埼玉考古学会
渡辺一，1990「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古』第27号，埼玉考古学会
渡辺一ほか，1983，1990，1991，『鳩山窯跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』，鳩山窯跡群遺跡調査会，鳩山町教育委員会

圖 面

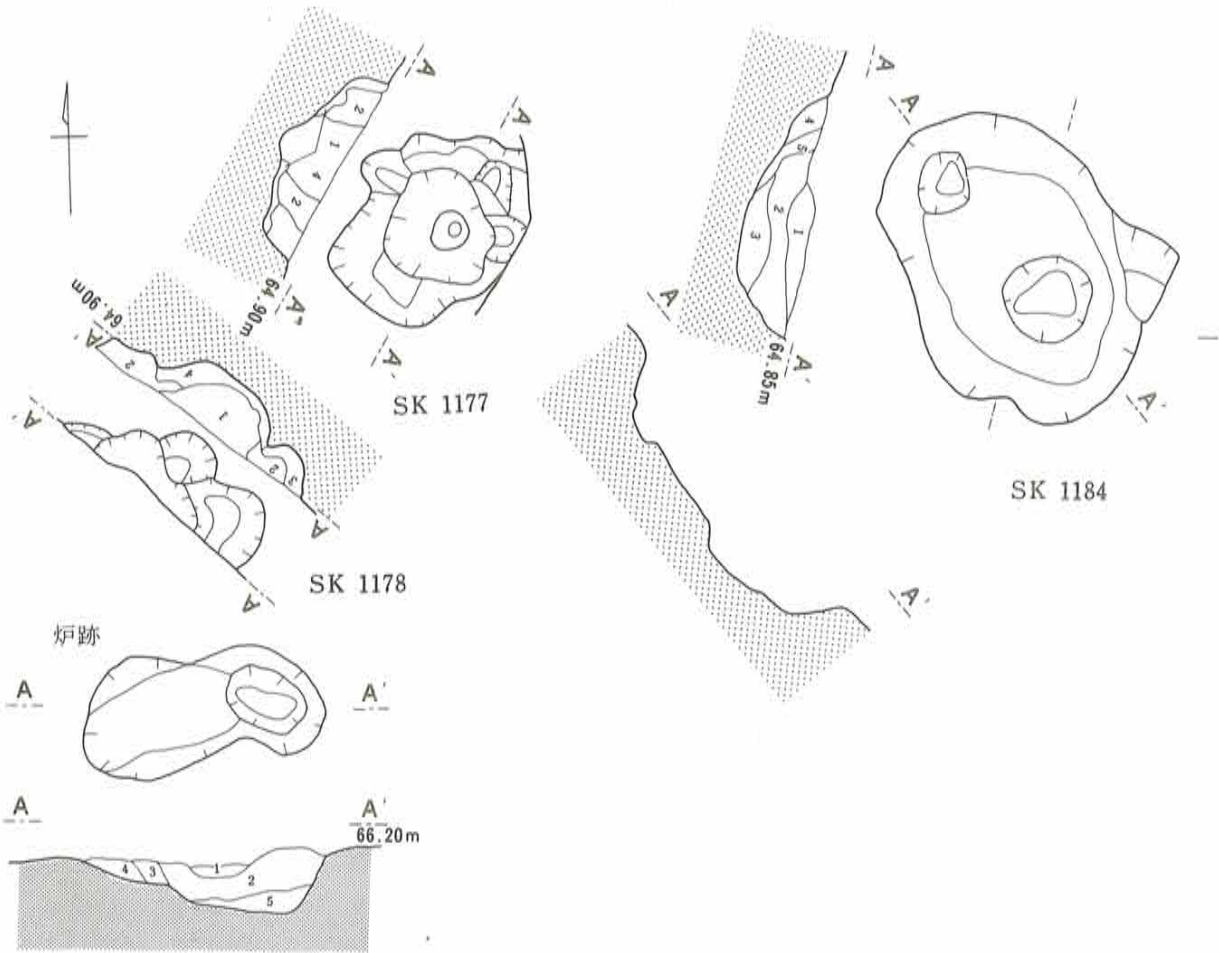
図面1 歴史時代遺構配置図



図面2 縄文時代遺構配置図



図面3 縄文時代遺構(SK 1177・1178・1184・炉跡)実測図



SK 1177J

1. 暗茶褐色土(粘性、しまりややあり。赤色スコリア、ローム粒子を多く含む。)
2. 暗茶褐色土(粘性、ややあり、しまり良好。赤色スコリア、ローム粒子を多く含む。)
3. 暗黄色土(粘性、しまり良好。2層とロームブロックの互層。)
4. 暗黄色土(粘性、しまりややあり。暗褐色土とW層の互層。)

SK 1178J

1. 暗茶褐色土(粘性ややあり、しまり良好。赤色スコリア、ローム粒子を多く含む。)
2. 暗茶褐色土(粘性ややあり、しまり良好。赤色スコリア、ローム粒子を多く含む。)
3. 暗黄色土(粘性、しまり良好。2層と暗褐色土の互層。)
4. 暗黄色土(粘性、しまりややあり。暗褐色土中にIV層のブロックを混入。)

SK 1184J

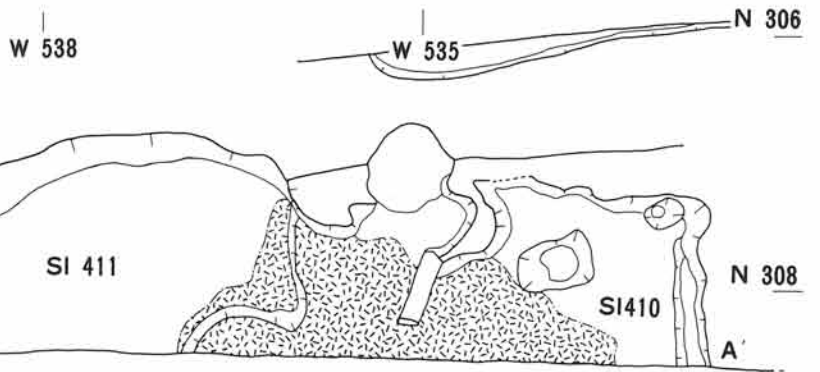
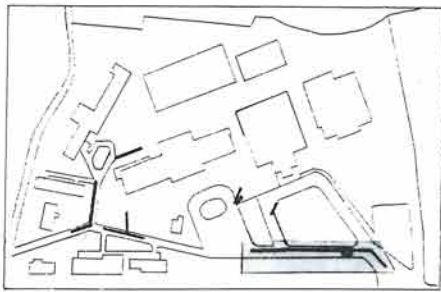
1. 黒色土(粘性なし、しまり良好。赤色スコリア、ローム粒子を多く含む。)
2. 暗茶褐色土(粘性ややあり、しまり良好。赤色スコリアを少量含む。)
3. 暗黄色土(粘性、しまりややあり。ローム粒子をしみ状に含む。)
4. 暗茶褐色土(粘性、しまりややあり。ローム粒子をしみ状に含む。)
5. 暗黄色土(粘性、しまりややあり。ロームブロックとIV層の互層。)

炉跡

1. 赤褐色(焼土堆積層。)
2. 暗茶褐色土(粘性、しまりややあり、焼土と暗褐色土の互層。)
3. 暗黄色土(ロームブロック。)
4. 暗黄色土(粘性、しまり良好。II層と焼土の互層。)
5. 黒色土(粘性、しまり良好。黒色土と焼土の互層。)

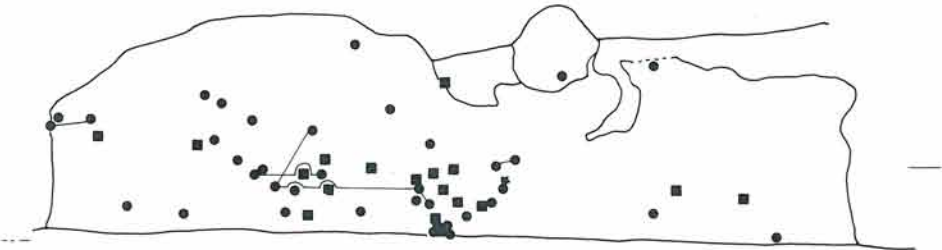
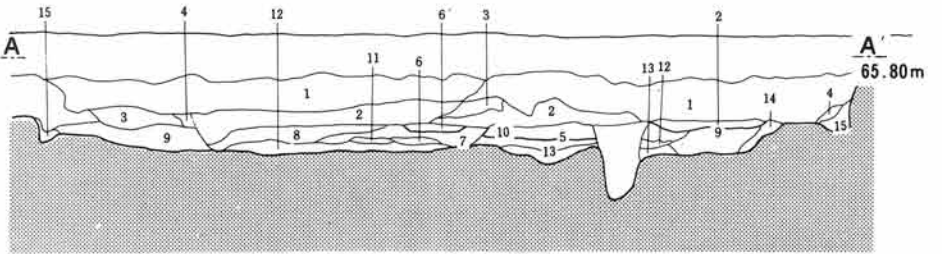


図面4 I区 SI 410・411住居跡実測図



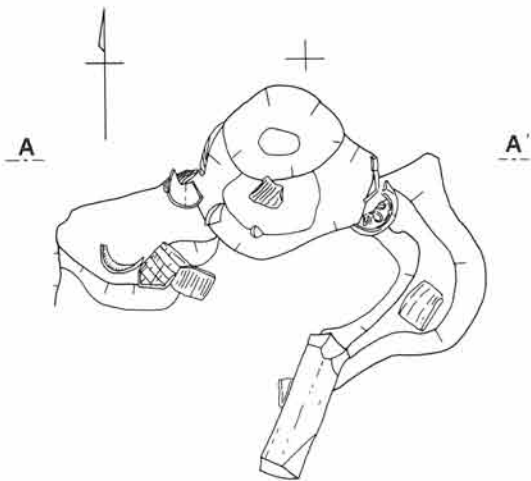
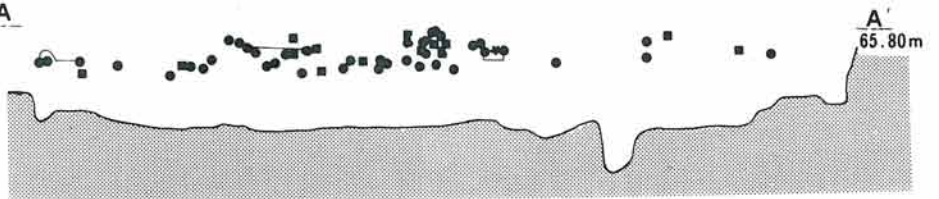
SI 410

1. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。ローム粒子を多く含む。)
2. 暗黄茶褐色土 (粘性、しまり良好。床面)
3. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。粘土をしみ状に含む。)
4. 黒色土 (粘性、しまりなし。)
5. 暗黄灰色土 (粘性なし、しまり良好。焼土ブロックを多く含む。)
6. 黒色土 (粘性、しまりややあり。焼土、ローム粒子を多く含む。)
- 6'. 黒色土 (6層を基層とするが、よりローム粒子を多く含む。)
7. 黒色土 (粘性、しまり良好。焼土を多く含む。)
8. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。焼土を多く含む。)
9. 黒色土 (粘性、しまりややあり。粘土をしみ状に含む。)
10. 暗黄灰色土 (粘性、しまり良好。ロームブロックと粘土の互層)
11. 黄色砂質粘土
12. 暗赤褐色土 (粘性、しまり良好。床面。)
13. 暗灰色土 (粘性、しまりなし。粘土とロームの互層。)
14. 暗黄灰色土 (粘性、しまり良好。焼土と粘土の互層。)
15. 暗茶褐色土 (粘性、しまりなし。ローム粒子を少量含む。)



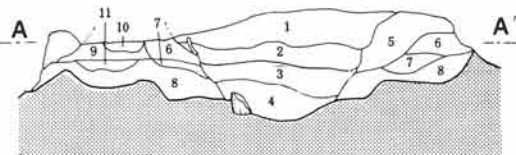
SI 411

1. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。ローム粒子を少量、赤色スコリアを多く含む。)
2. 黒色土 (粘性、しまりなし。焼土粒子、ロームブロックを多く含む。)
3. 暗茶褐色土 (粘性、しまりなし。ローム粒子を多く含む。)
4. ロームブロック



SI 410カマド

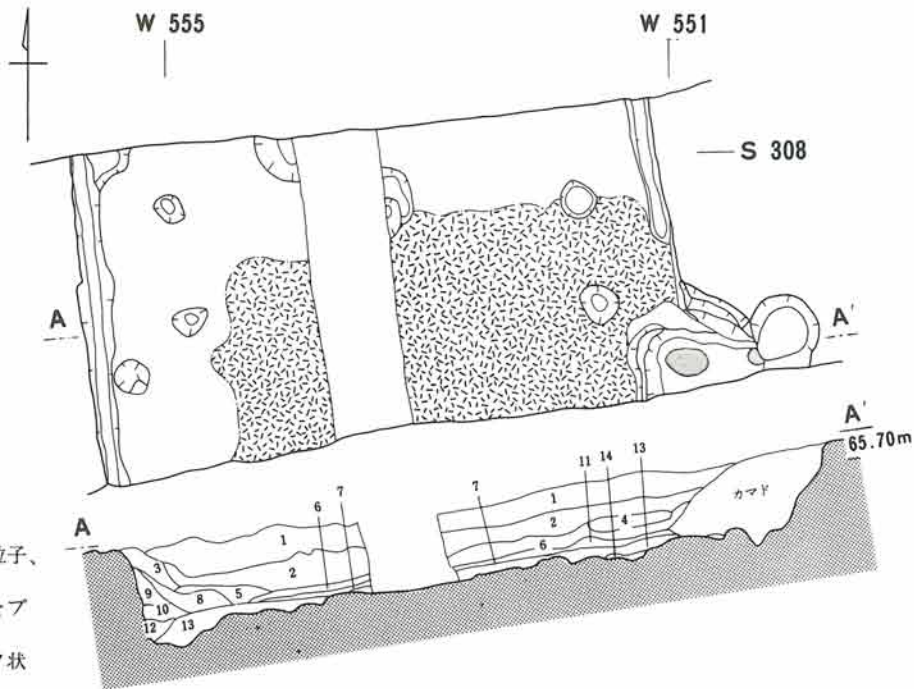
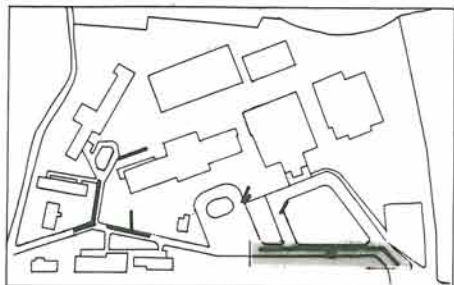
1. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。焼土粒子を多く含む。)
2. 暗赤褐色土 (粘性、しまりややあり。粘土、焼土の互層。)
3. 焼土堆積層
4. 黒色土 (粘性、しまりなし。焼土粒子を多く含む。)
5. 暗褐色土 (粘性、しまり良好。粘質土を多く含む。)
6. 暗灰色土 (粘性、しまり良好。灰色粘土を多く含む。)
7. 黒色土 (粘性、しまりなし。含有物は微量。)
8. 黒色土 (粘性、しまりややあり。ロームブロックを多く含む。)
9. 暗茶褐色土 (粘性、しまり良好。ロームブロックを多く含む。)
10. 灰色粘質土ブロック
11. ロームブロック



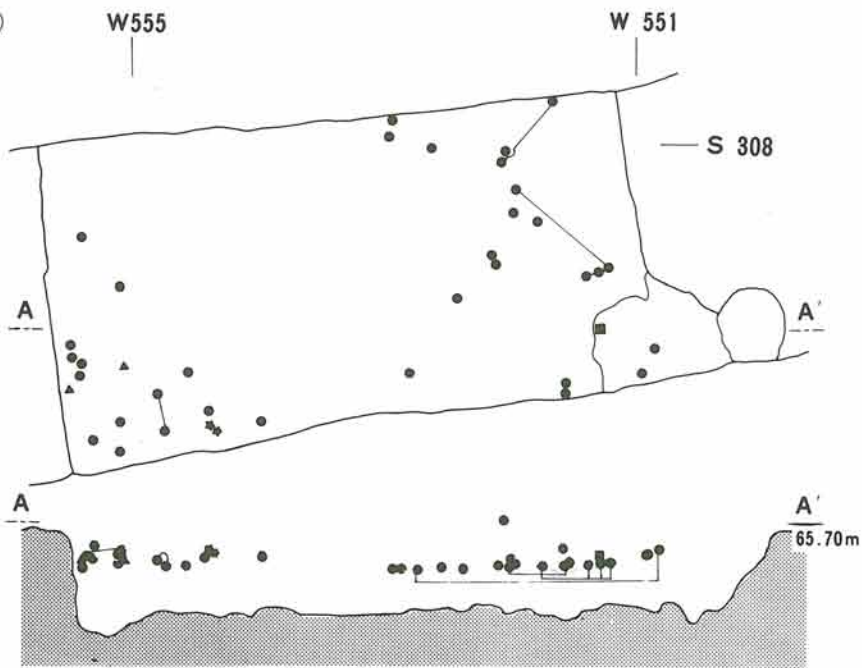
0 50cm

0 1 2m

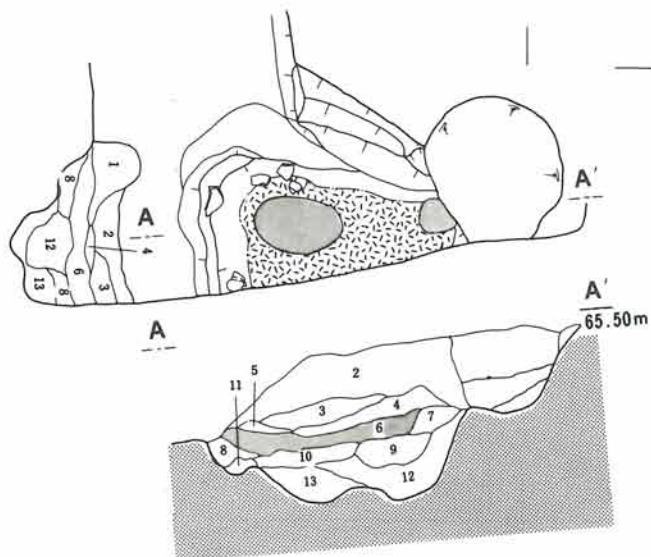
図面5 I区 SI 413住居跡実測図



1. 暗茶褐色土（粘性なし、しまりややあり。焼土粒子、ローム粒子を多く含む。）
2. 黒色土（粘性なし、しまりややあり。焼土粒子をブロック状に含む。）
3. 暗茶色土（粘性、しまりなし。ロームをブロック状に含む。）
4. 焼土堆積層
5. 暗茶褐色土（粘性、しまりややあり。赤色スコリア、ローム粒子を多く含む。）
6. 暗赤褐色土（粘性、しまりなし。焼土黒色土の互層）
7. 暗黄灰色土（粘性、しまりややあり。粘土と黒色土の互層）
8. 黒色土（粘性、しまりなし。ローム粒子を少量含む。）
9. 黒色土（粘性、しまりなし。ロームブロックを多く含む。）
10. 黒色土（粘性、しまりややあり。ロームブロックを少量含む。）
11. 黒色土（粘性、しまりややあり。ロームブロック。焼土粒子を多く含む。）
12. 黒色土（粘性、しまりなし。ローム粒子、赤色スコリアも多く含む。周溝覆土。）
13. 暗黄色土（粘性、しまり良好。粘土とロームブロックの互層。床面）
14. 暗黄灰色土（粘性、しまりややあり。ロームブロック、粘土、黒色土の互層。）

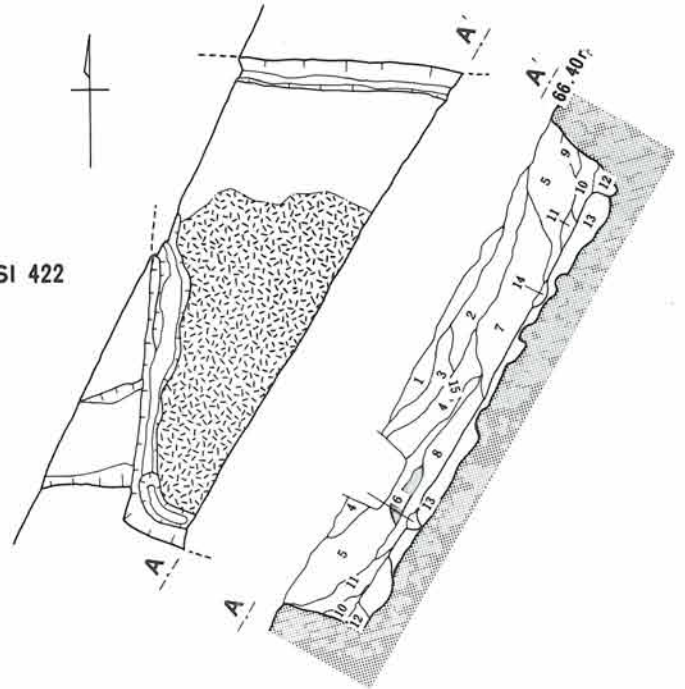
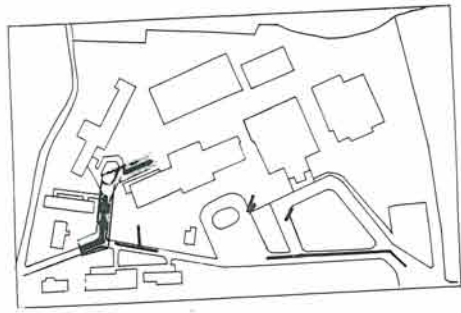


1. 暗茶色土（粘性、しまりややあり。ロームブロックを含む。）
2. 暗茶褐色土（粘性、しまりややあり。焼土、ローム粒子を多く含む。）
3. 暗黄灰色土（粘性ややあり、しまりなし。粘土質シルト。）
4. 暗赤褐色土（焼土と3層の互層。）
5. 黒色土（粘性ややあり、しまりなし。含有物は微量。）
6. 焼土堆積層
7. 暗黄灰色土（粘性、しまり良好。焼土粒子を多く含む。）
8. 黒色土（粘性、しまりなし。焼土粒子を多く含む。）
9. 暗赤褐色土（粘性、しまりややあり。ローム粒子、焼土粒子を多く含む。）
10. 暗黄灰色土（粘性、しまりややあり。ローム粒子を多く含む。）
11. 焼土堆積層
12. 黒色土（粘性、しまりややあり。焼土粒子、粘質土を多く含む。）
13. 黒色土（粘性、しまりややあり。焼土粒子、ローム粒子を少量含む。）

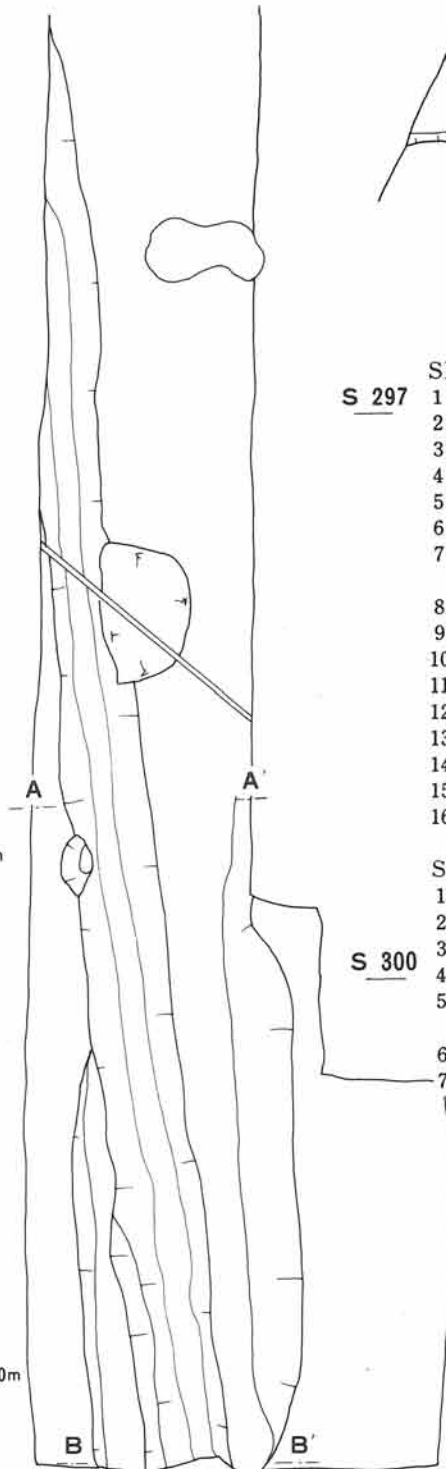


0 1 2 m

図面6 IV区 SI 422住居跡・SD 246溝跡実測図



SD 246

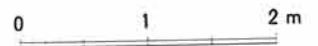
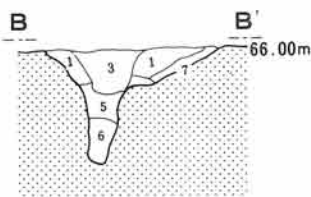
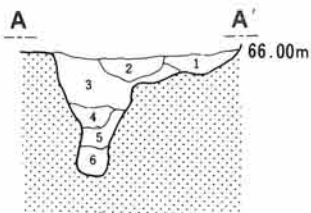


- SI 422
- S 297
1. 暗褐色土 (粘性、しまりややあり。赤色スコリアを多く含む。)
 2. 暗黄色土 (粘性、しまりややあり。黒色土・ロームの互層。)
 3. 暗黄色土 (粘性、しまりなし。ロームブロックを多く含む。)
 4. 暗褐色土 (粘性、しまりややあり。ロームブロックを多く含む。)
 5. 暗黄色土 (粘性、しまりややあり。ローム粒子をしみ状に含む。)
 6. 赤褐色土 (焼土堆積層)
 7. 暗黄色土 (粘性、しまりややあり。黒色土・ロームブロック・暗褐色土の互層。)
 8. 黒褐色土 (粘性、しまりややあり。含有物は微量。)
 9. 黄色土 (粘性、しまりややあり。ローム粒子を少量含む。)
 10. 黒色土 (粘性、しまりなし。ローム粒子を少量含む。)
 11. 暗黄色土 (10層を基層とするが、よりローム粒子が多い。)
 12. 暗黄色土 (粘性、しまりなし。周溝覆土)
 13. 暗黄色土 (粘性なし、しまり良好。貼り床土)
 14. 暗黄色土 (粘性なし、しまり良好。ロームと暗茶褐色土の互層。)
 15. 暗黄色土 (粘性、しまりややあり。ロームブロック。)
 16. 暗褐色土 (粘性、しまりややあり。ローム粒子を多く含む。)

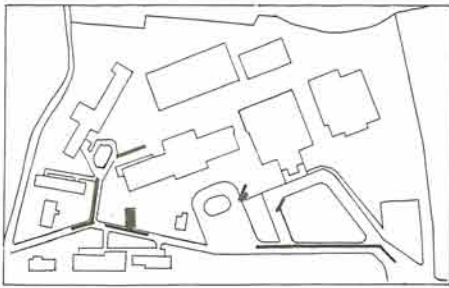
SD 246

S 300

1. 暗黄褐色土 (粘性、しまりややあり。ロームブロックを少量含む。)
2. 黒色土 (粘性、しまりなし。含有物は微量。)
3. 暗黄褐色土 (粘性なし、しまり良好。ロームブロックを多く含む。)
4. ロームブロック
5. 暗茶褐色土 (粘性なし、しまり良好。暗褐色土とロームブロックの互層。)
6. 暗黄褐色土 (粘性、しまりなし。黒色土とローム粒子の互層。)
7. 暗黄色土 (ローム崩壊土)

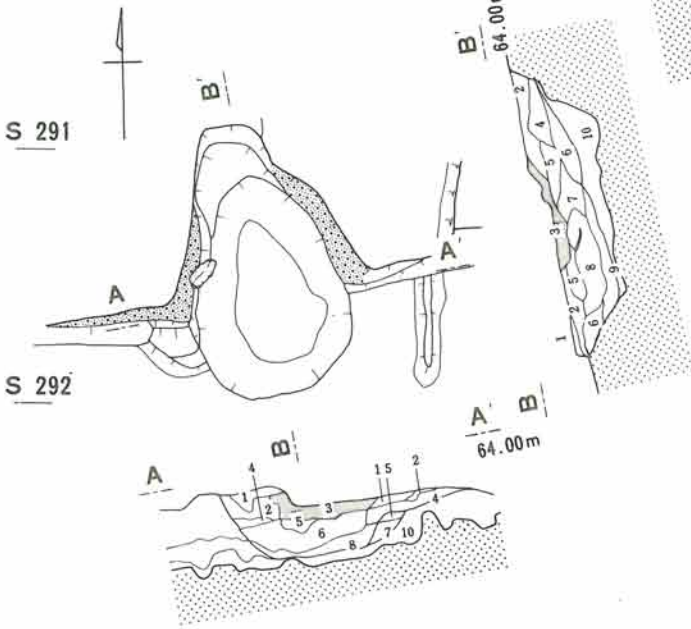
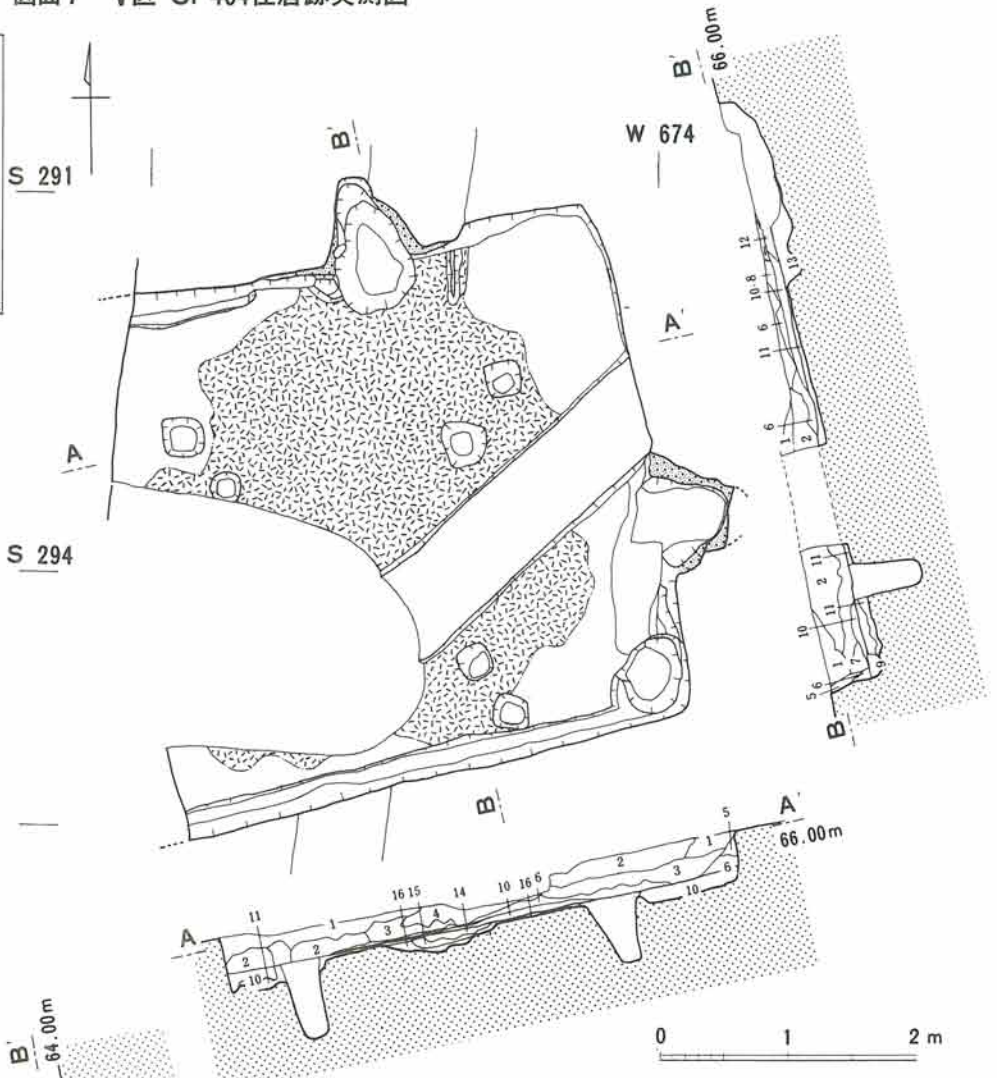


図面7 V区 SI 404住居跡実測図



SI 404

1. 暗褐色土 (粘性、しまりなし。黒色土・焼土・黄白色粘土粒子の互層。)
2. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。黒色土・黄白色粘質土・焼土ブロックの互層。)
3. 黒褐色土 (粘性、しまりややあり。黒色土中に焼土粒子を多く含む。)
4. 暗黄灰色土 (粘性、しまりややあり。焼土ブロック・黄灰色粘質土・黒色土ブロックの互層。)
5. 暗黄褐色土 (粘性、しまりややあり。含有物は少量。)
6. 茶褐色土 (粘性、しまり良好。黄灰色。焼土粒子を多量に含む。)
7. 黄茶褐色土 (粘性、しまり良好。貼り床面)
8. 黄色土 (粘性、しまりややあり。カマド崩壊土)
9. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。固溝覆土)
10. 黒褐色土 (粘性なし、しまり良好。貼り床面)
11. 黄色土 (粘性なし、しまり良好。ロームブロック中に黒色土を含む。)
12. 黒褐色土 (焼土堆積層)
13. 黒色土 (粘性なし、しまりややあり。ロームブロック・焼土・黒色土・ロームブロックの互層。)
14. 灰黒色土 (粘性、しまりややあり。粘土・黒色土・ロームブロックの互層。)
15. 灰黄色土 (粘性良好、しまりややあり。灰黄色粘質土)
16. 灰黄色土 (粘性なし、しまり良好。ロームブロックと15層の互層。)



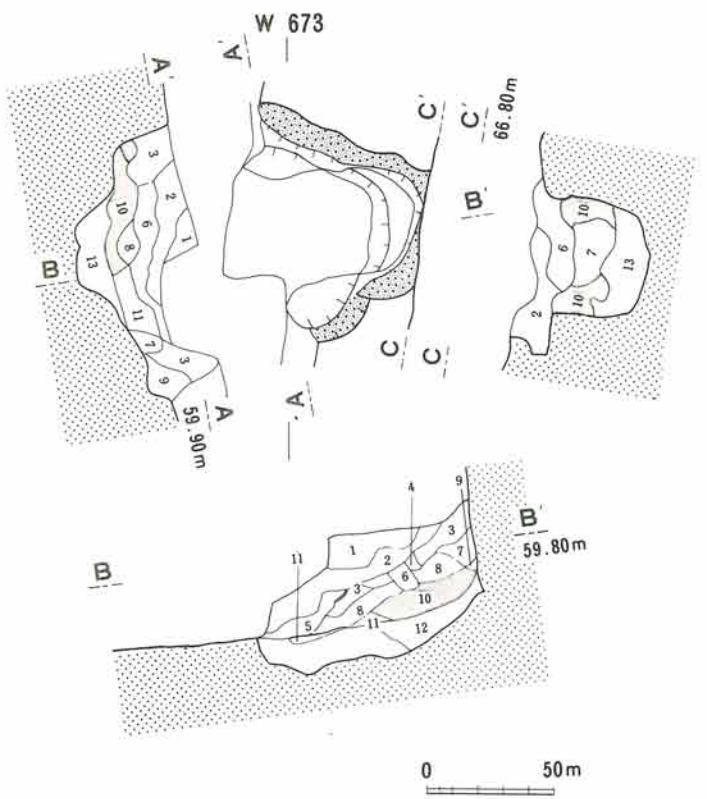
北カマド

1. 黄灰色土 (粘性、しまりややあり。焼土を少量含む。)
2. 黄灰色土 (粘性、しまりややあり。含有物は微量。)
3. 焼土堆積層
4. 黄灰色土 (粘性、しまりややあり。粘土と焼土の互層。)
5. 赤褐色土 (粘性、しまりなし。粘土と焼土の互層。)
6. 黄褐色土 (粘性、しまりややあり。粘土と焼土粒子の互層。)
7. 黄灰色粘土ブロック
8. 黒色土 (粘性、しまりなし。炭化物、焼土粒子を多く含む。)
9. 黄灰色土 (粘性、しまり良好。焼土粒子と粘土の互層。)

東カマド

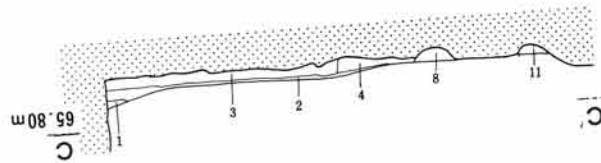
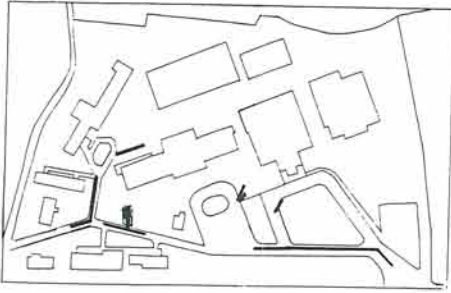
1. 黄灰色土 (粘性、しまりややあり。焼土粒子を多く含む。)
2. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。ローム粒子を多く含む。)
3. (粘性、しまりややあり。焼土粒子を多く含む。)
4. ロームブロック
5. 黒色土 (粘性、しまりなし。ロームブロックと焼土の互層。)
6. 灰色粘土ブロック
7. 茶褐色土 (粘性なし、しまりややあり。焼土と黒色土の互層。)
8. 暗黄茶褐色土 (粘性、しまりなく。焼土と暗褐色土の互層。)

9. 黒色土 (粘性なし、しまりややあり。)
10. 焼土堆積層
11. 暗茶褐色土 (粘性、しまりなし。)
12. 黒色土 (粘性、しまりなし、含有物は少量。)
13. 暗茶褐色土 (粘性、しまりなし。焼土粒子を少量含む。)



0 50m

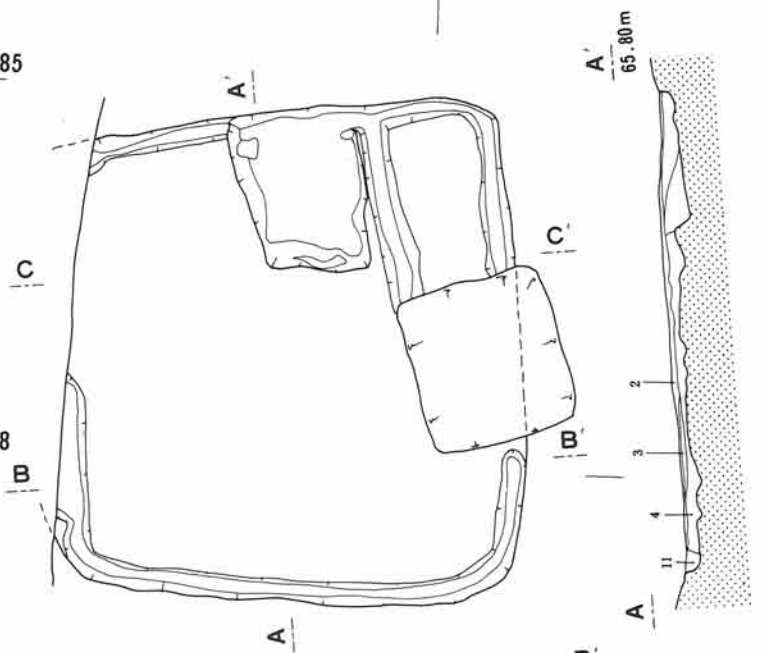
図面8 V区 SI 405住居跡実測図



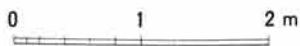
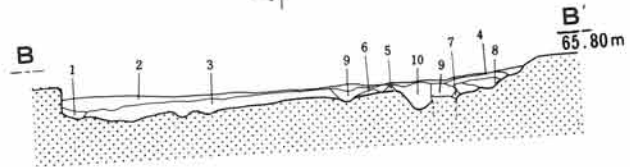
SI 405

1. 暗茶褐色土 (粘性、しまりややあり。暗褐色土とロームの互層。)
2. 暗褐色土 (粘性なし。しまりややあり。ローム粒子を少量含む。)
3. 暗褐色土 (粘性なし、しまりややあり。焼土粒子と暗褐色土の互層。)
4. 赤褐色土 (粘性なし、しまりややあり。焼土ブロック)
5. 赤褐色土 (粘性なし、しまりややあり。焼土と暗褐色土の互層。)
6. 黒色土 (粘性、しまりあり。黒色土と焼土の互層。)
7. ロームブロック
8. 黒色土 (粘性、しまり良好。ローム、灰色粘土ブロックの互層。床面)
9. 灰色土 (粘質土ブロック)
10. 暗茶褐色土 (粘性、しまりなし。ローム粒子を多く含む。)
11. 暗茶褐色土 (粘性、しまりなし。周溝)

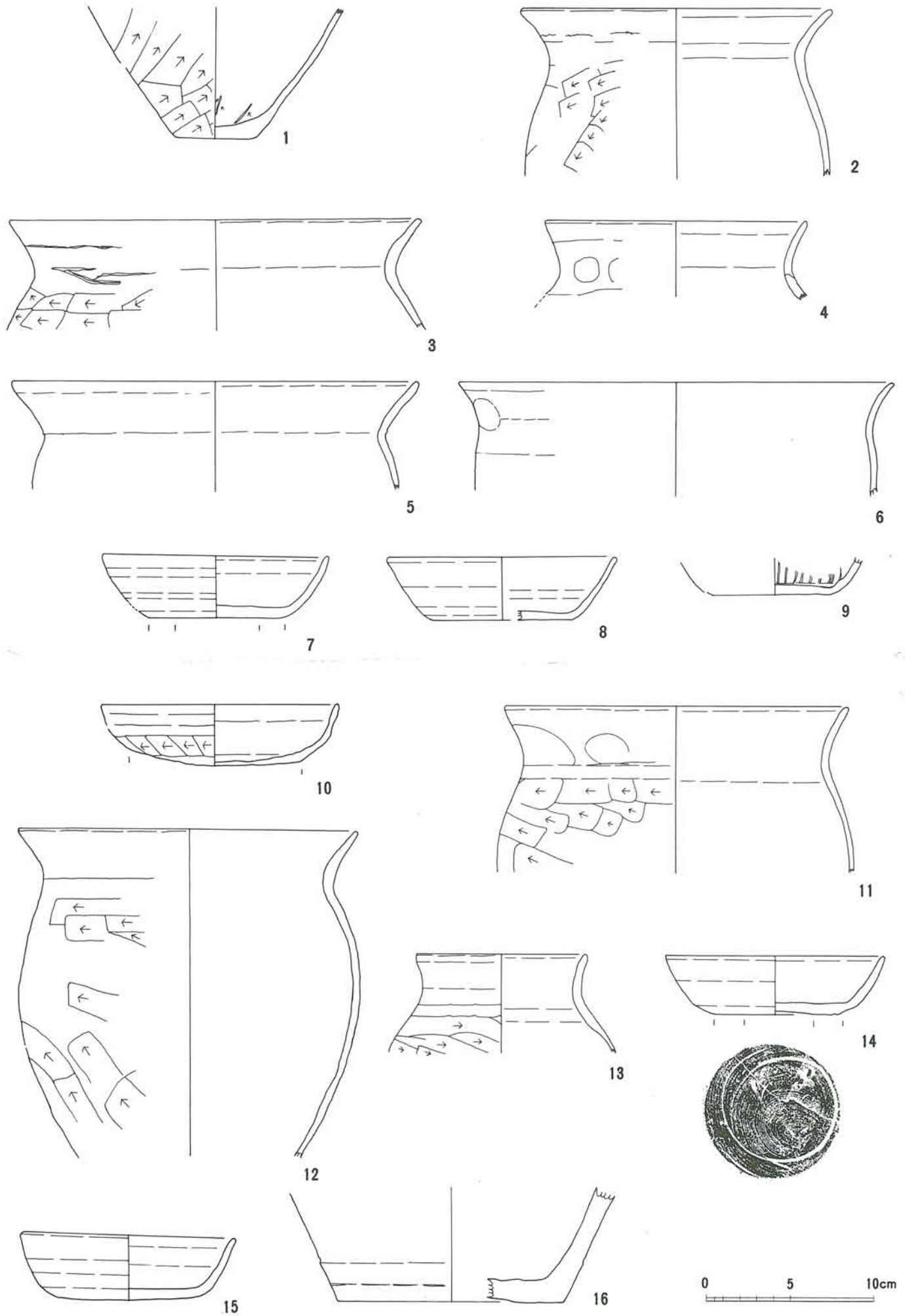
S 285



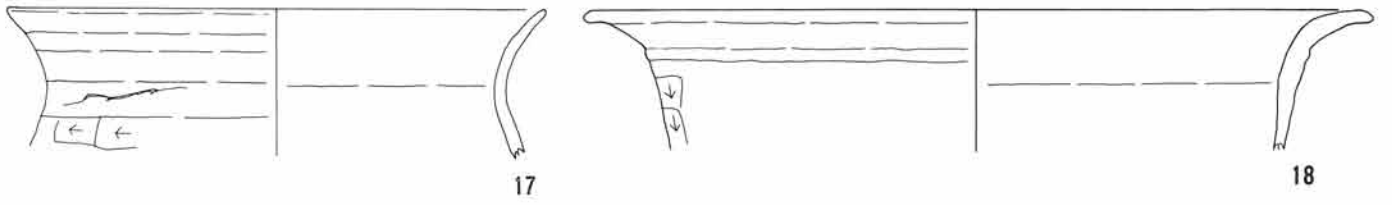
S 288



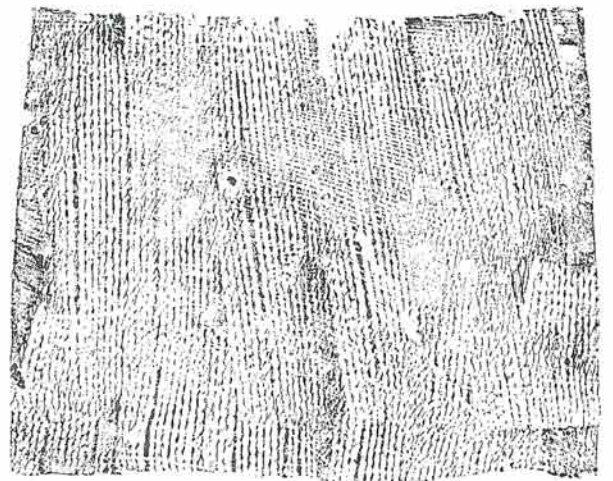
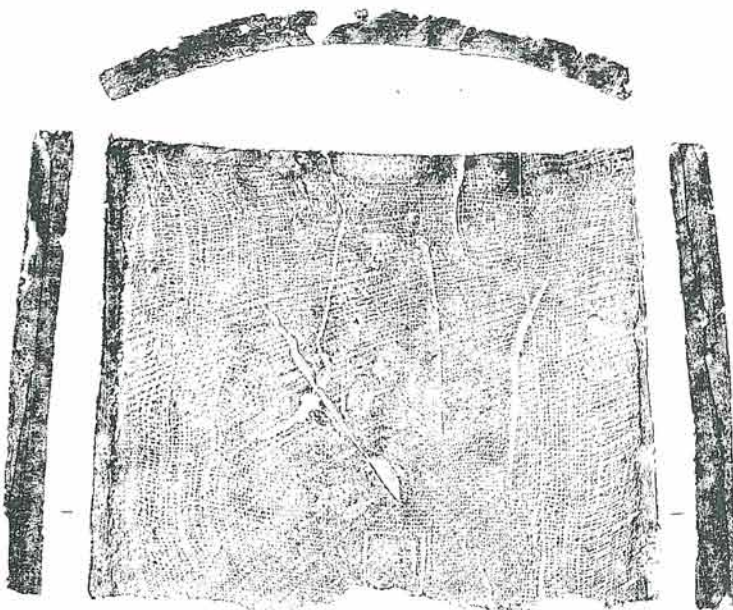
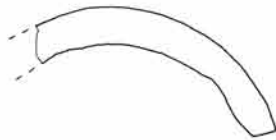
図面9 SI 404・405住居跡出土遺物



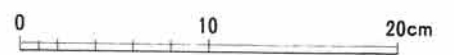
図面10 遺構外出土遺物



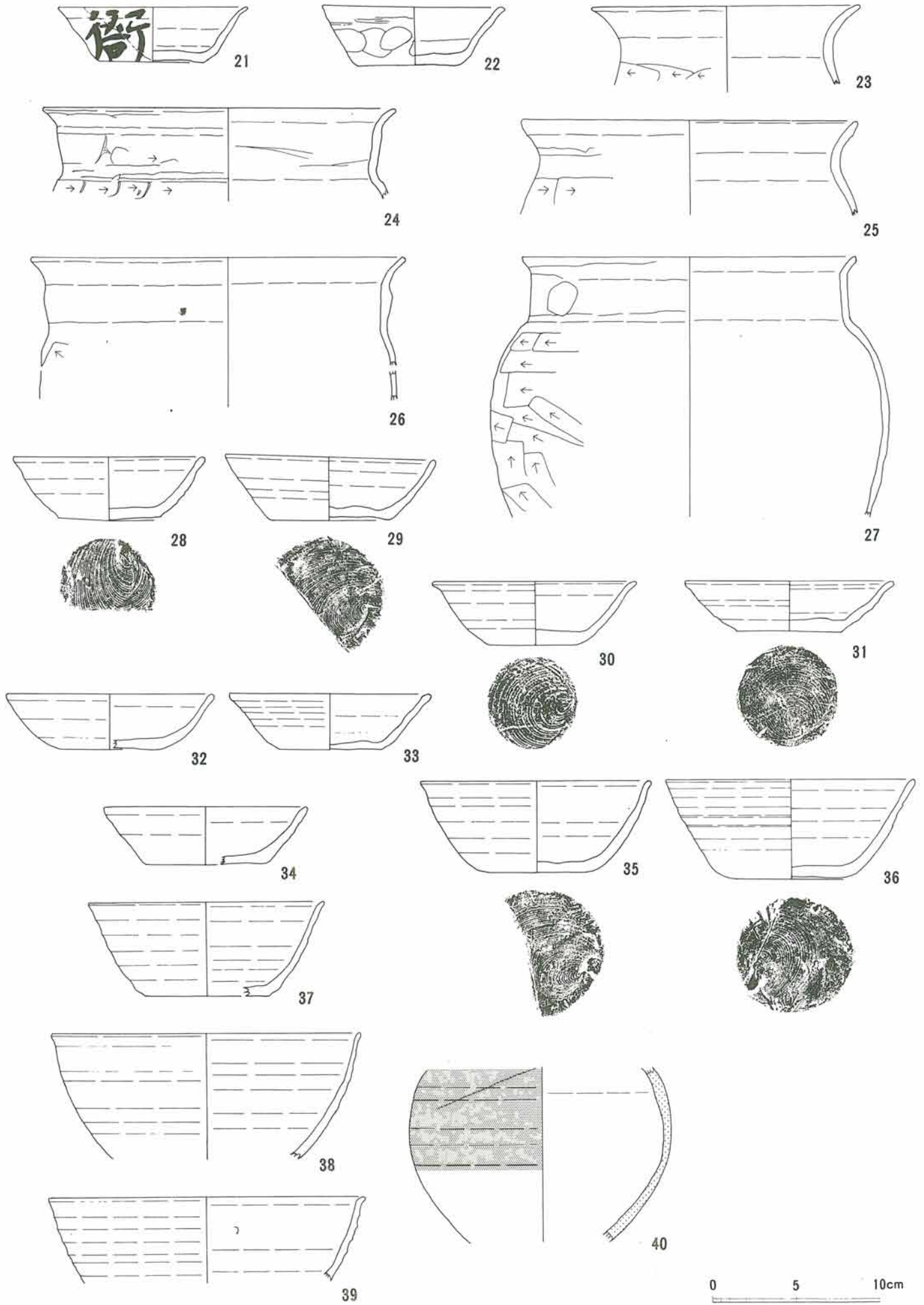
19



20

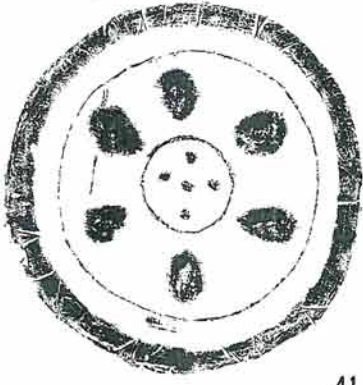


図面11 SI 410・411住居跡出土遺物

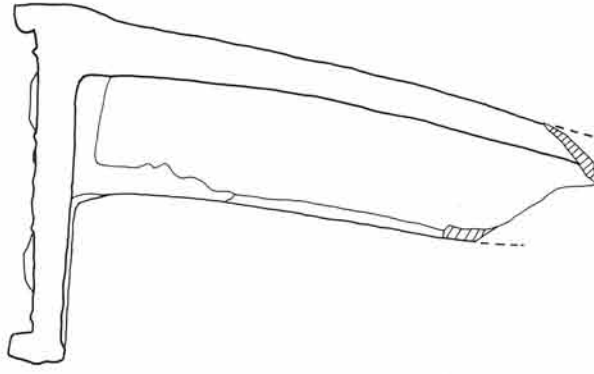


0 5 10cm

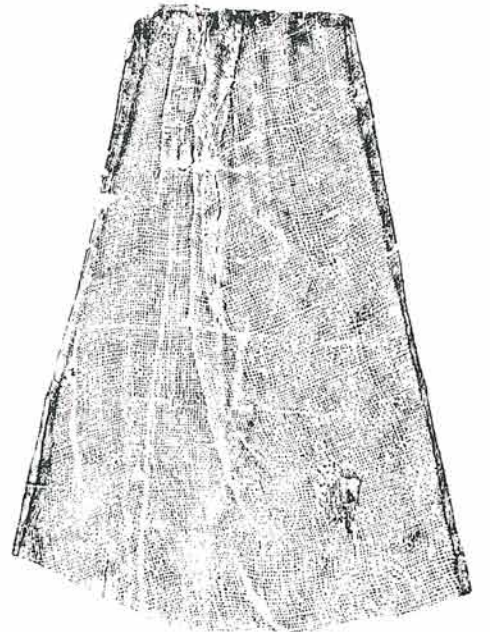
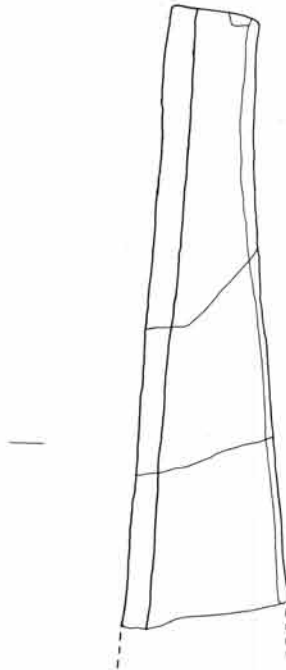
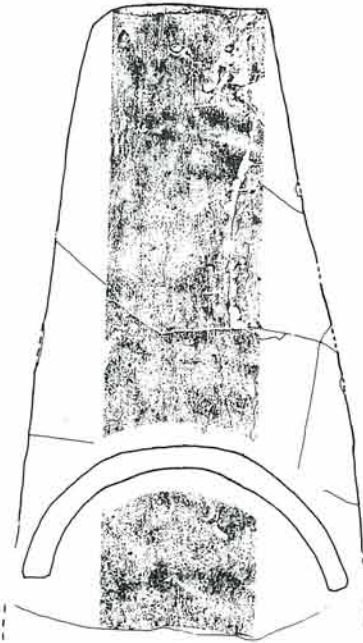
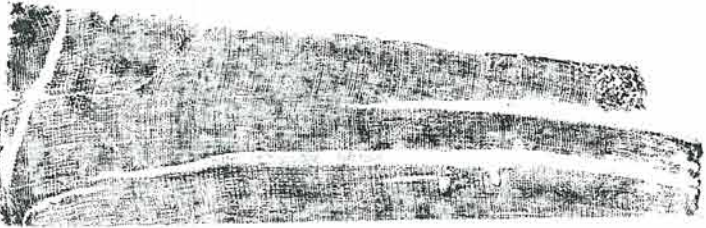
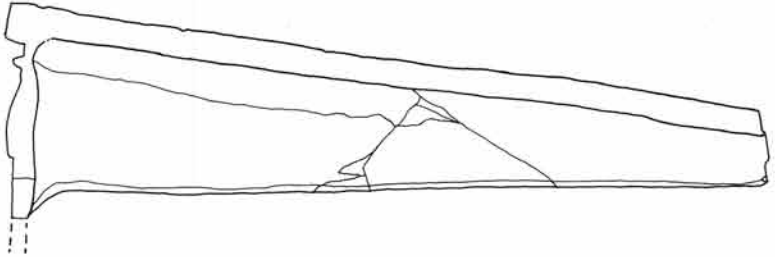
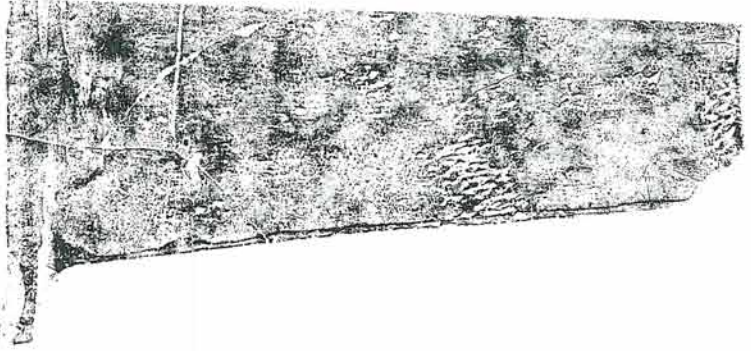
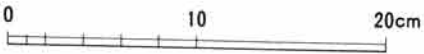
図面12 SI 410住居跡出土遺物



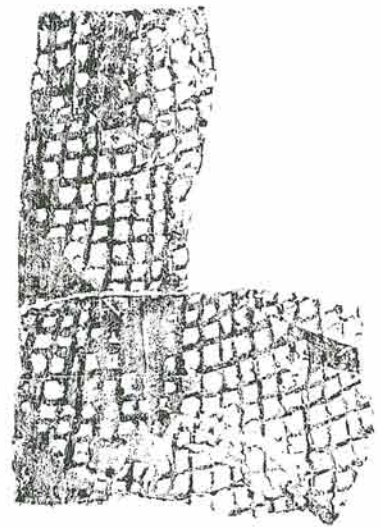
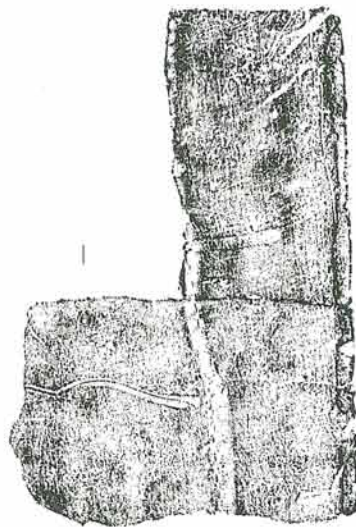
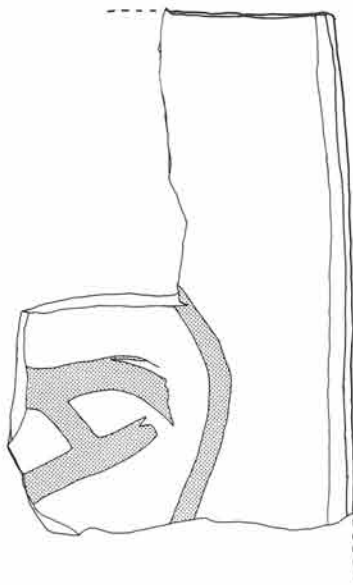
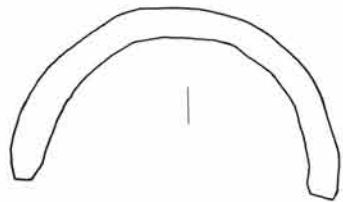
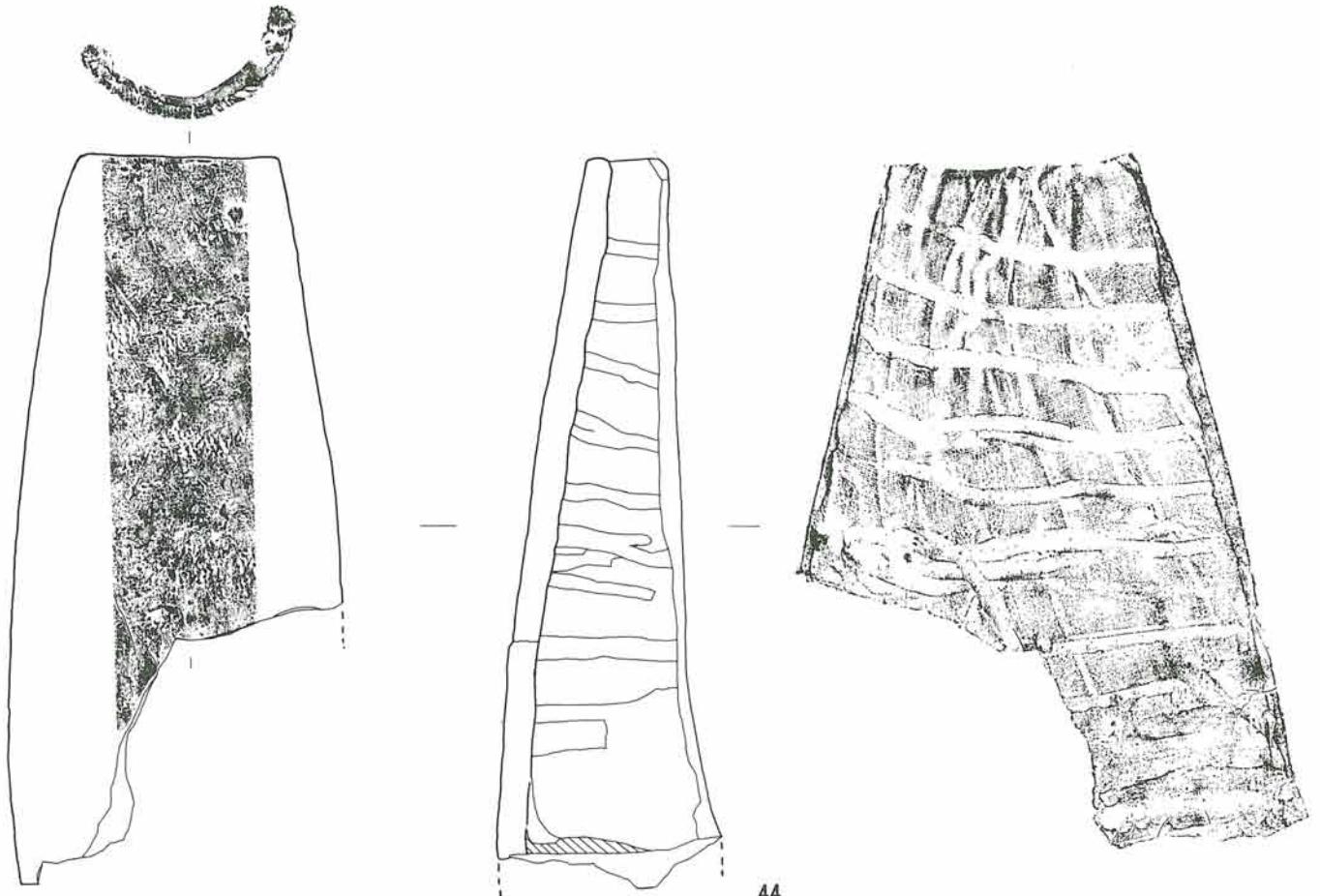
41



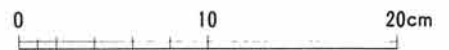
42



43

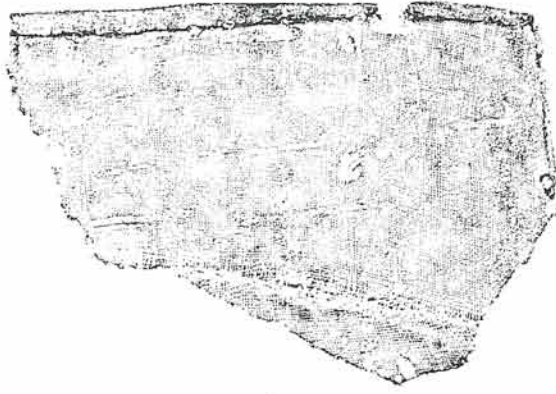


45

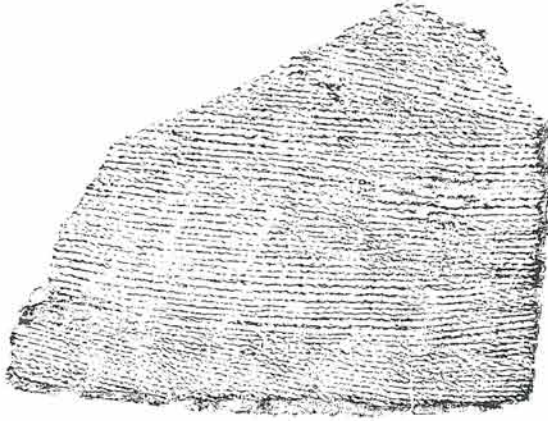
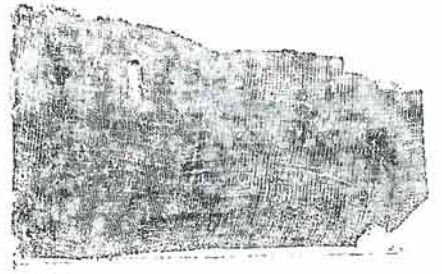




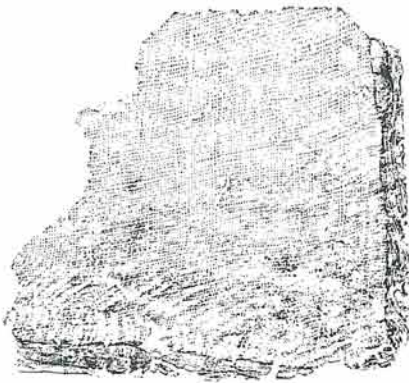
48



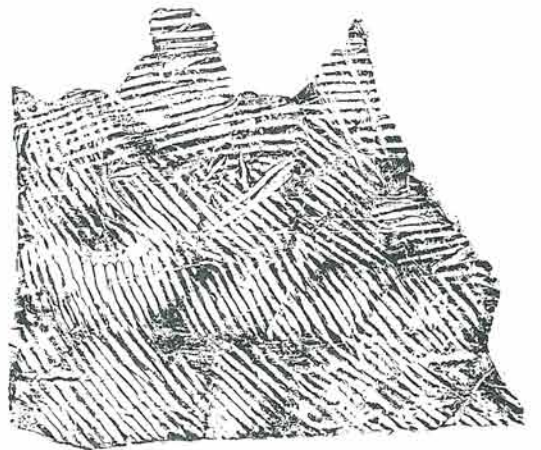
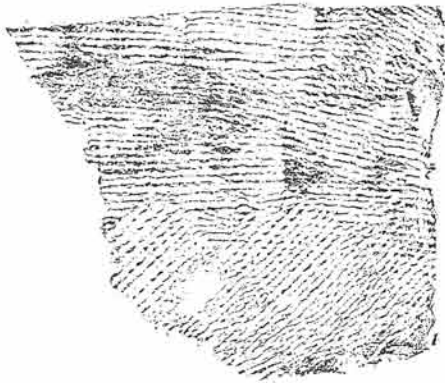
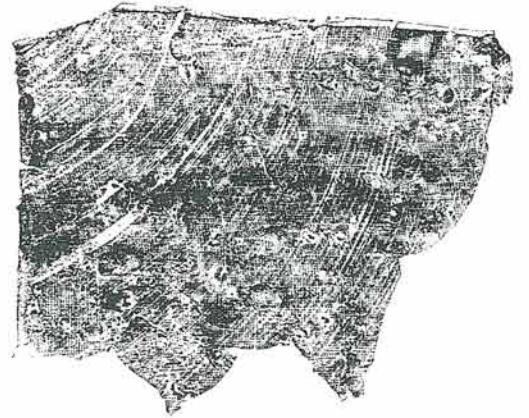
46



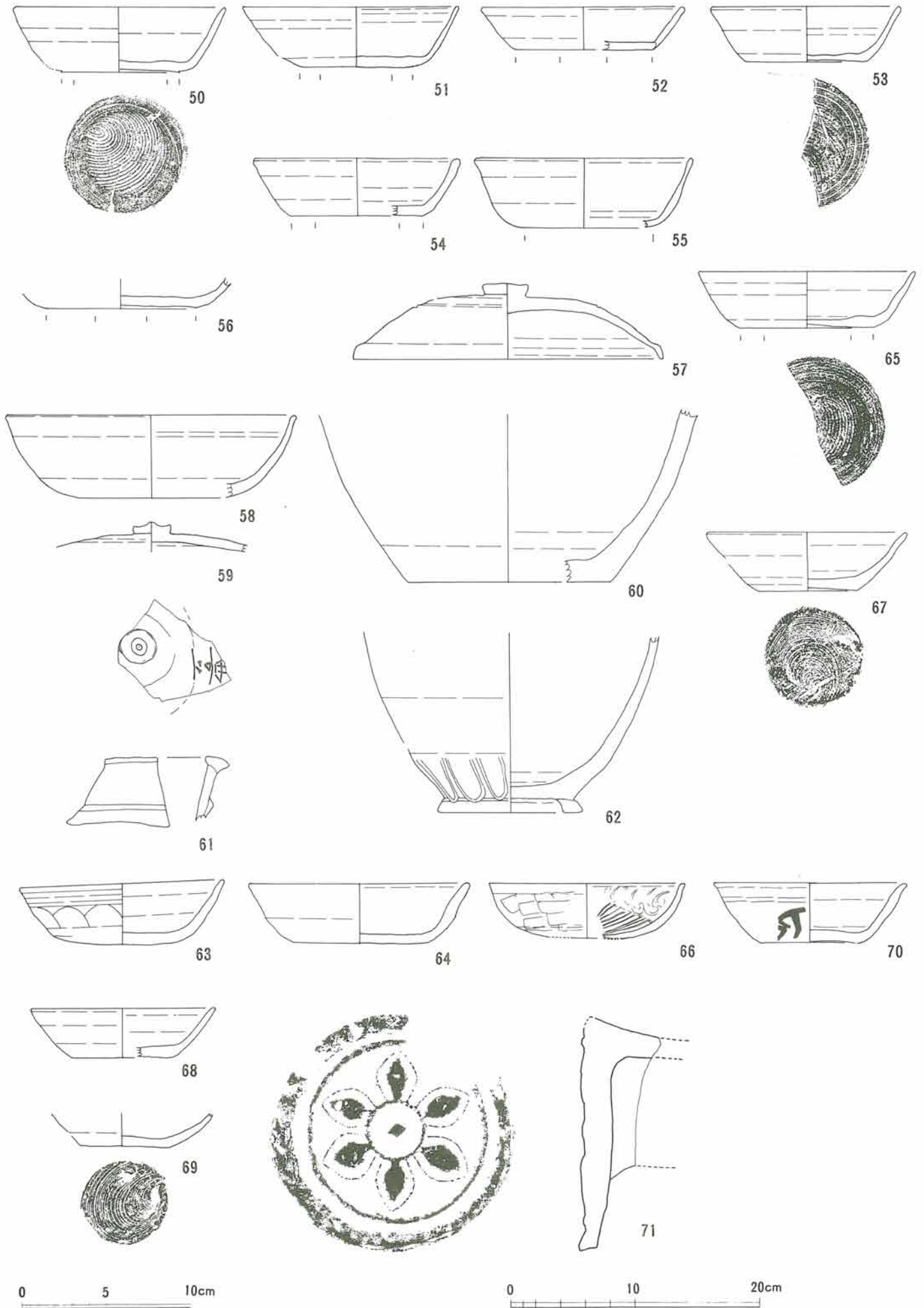
49



47



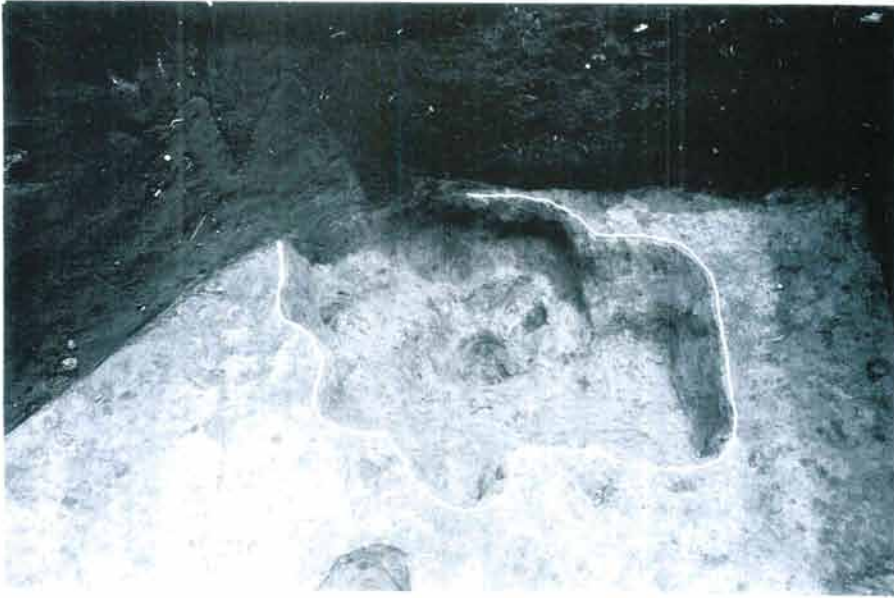
図面15 SI 413・420・421・422住居跡・遺構外出土遺物



版 圖

図版1 調査区遠景

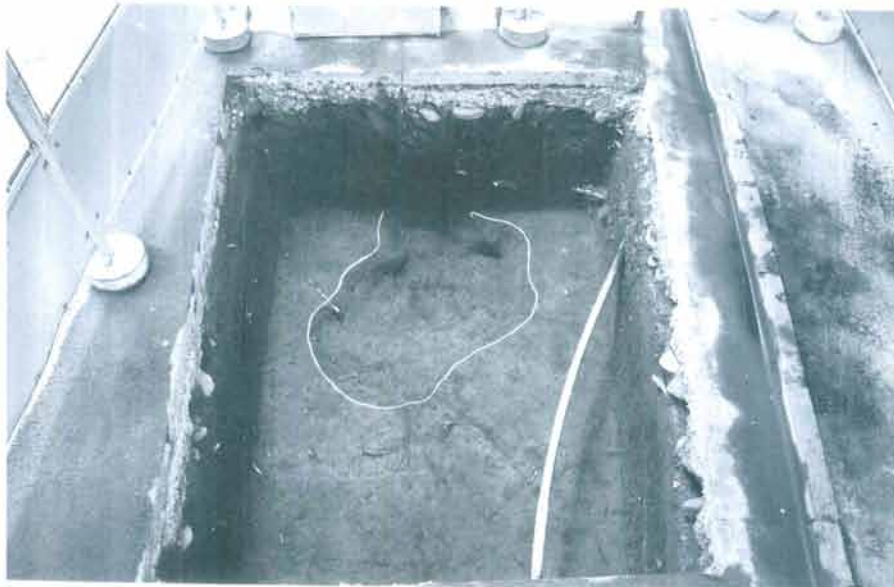




1. I-② SK 1177縄文土坑完掘全景（西から）



2. I-④ SK 1183縄文土坑完全景（西から）



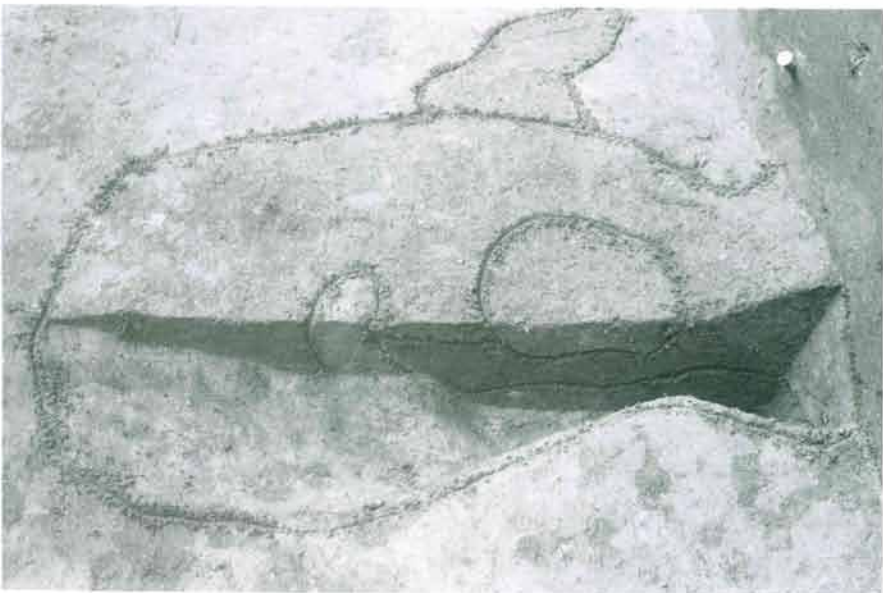
3. III-① SK 1184縄文土坑完全景（西から）



1. I-② SK 1176縄文土坑完掘全景（北から）



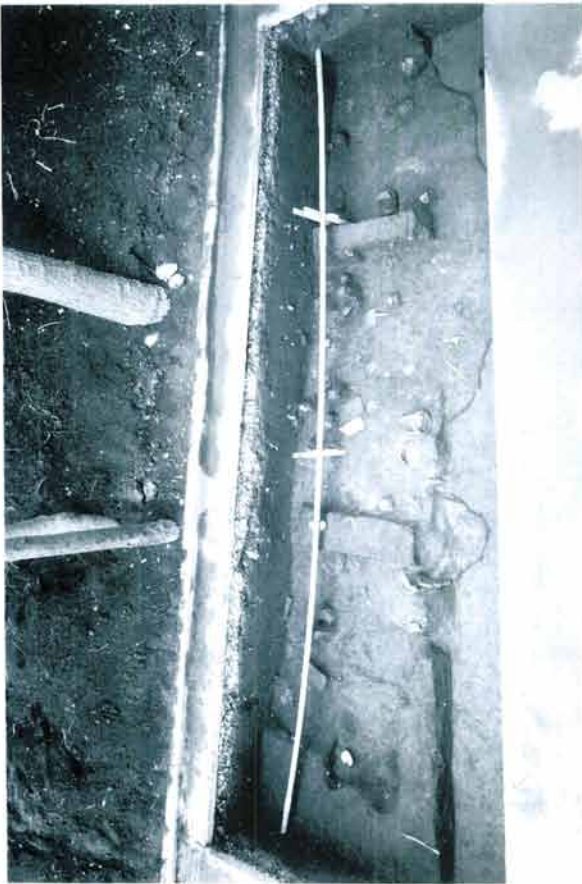
2. IV-① 炉跡完掘全景（西から）



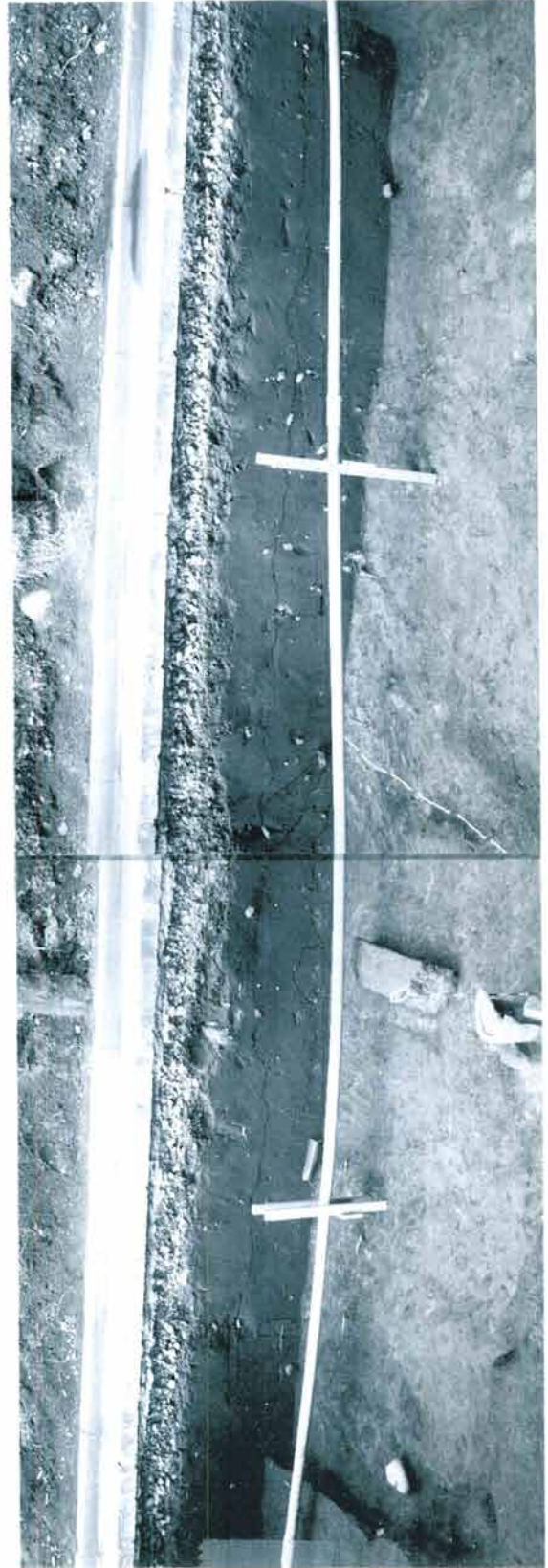
3. IV-① 炉跡東西土層断面（北から）



2. SI 410住居跡遺物出土状況 (北から)



1. SI 410・411住居跡遺物出土状況 (北から)



3. SI 410・411住居跡南壁土層断面 (北から)



1. SI 413住居跡南壁土層断面（北から）



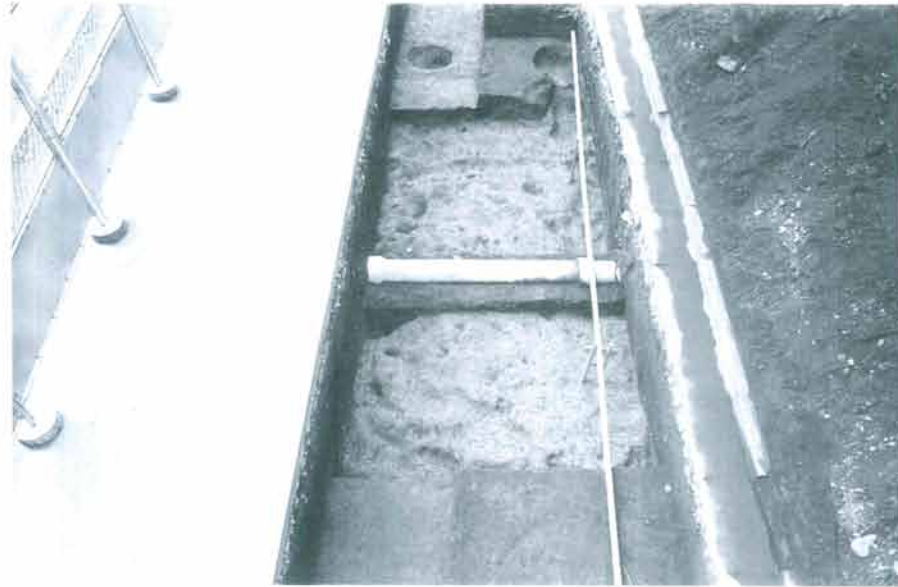
2. SI 413住居跡カマド東西土層断面（北から）



3. SI 413住居跡カマド南北土層断面（西から）



1. SI 413住居跡完掘全景（西から）



2. SI 413住居跡構築時全景（西から）



3. SI 413住居跡構築時全景及び南壁土層断面（北から）



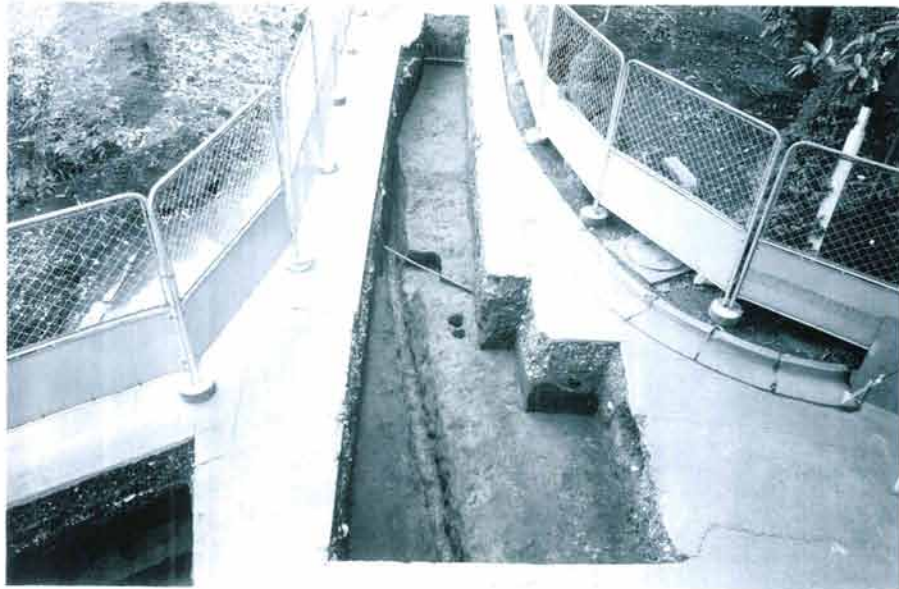
1. SI 414住居跡完掘全景（東から）



2. SI 414住居跡南壁土層断面（北から）



3. SI 421住居跡構築時全景（東から）



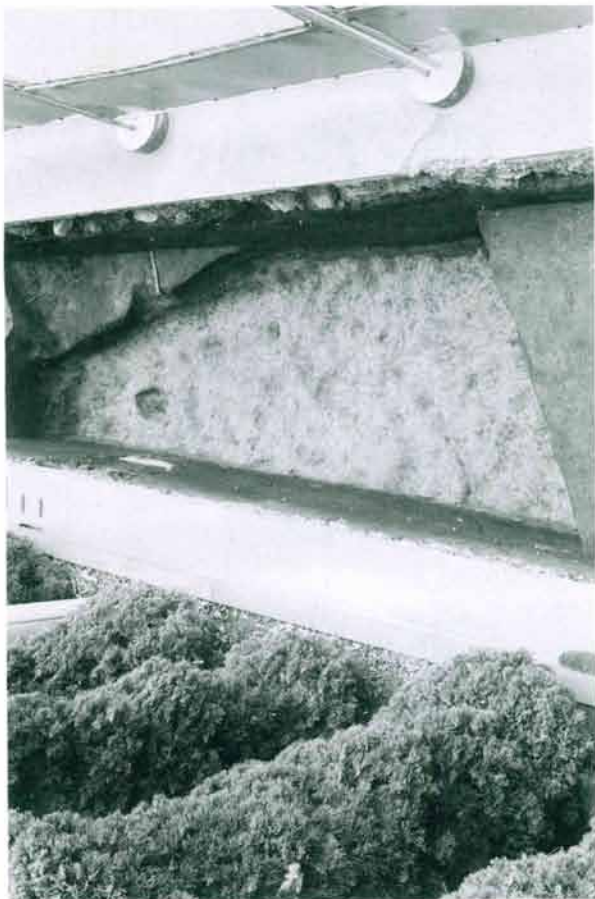
1. SD 246溝跡完掘全景（南から）



2. SD 246溝跡東西土層断面（南から）



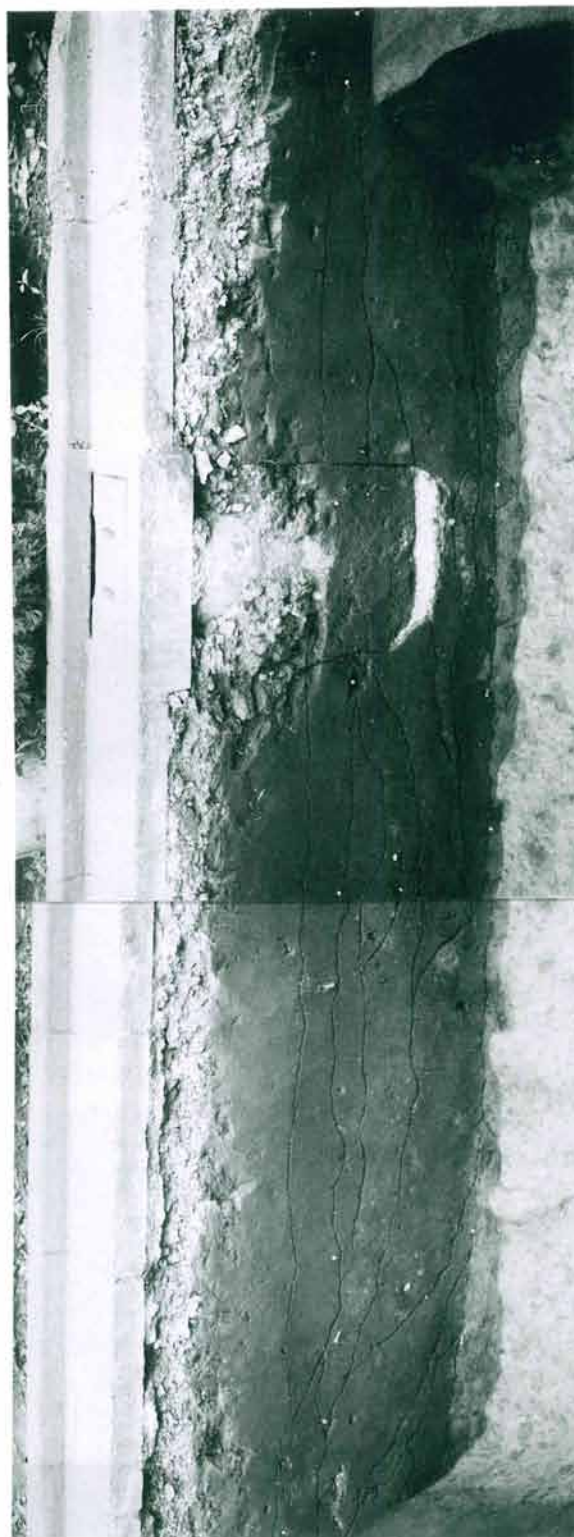
3. SD 246溝跡完掘全景（南側底面状況）（北から）



2. SI 422住居跡構築時全景（北から）



1. SI 422住居跡完掘全景（北から）



3. SI 422住居跡東壁土層断面（西から）



1. SI 404・405住居跡構築時全景（南から）



2. SI 404住居跡構築時全景（東から）



3. SI 405住居跡完掘全景（東から）



1. SI 404住居跡カマド遺物出土状況（南から）



2. SI 404住居跡北カマド完掘全景（南から）



3. SI 404住居跡東カマド構築時全景（西から）



9-1



9-2



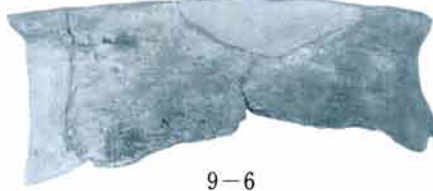
9-3



9-4



9-5



9-6



9-7



9-8



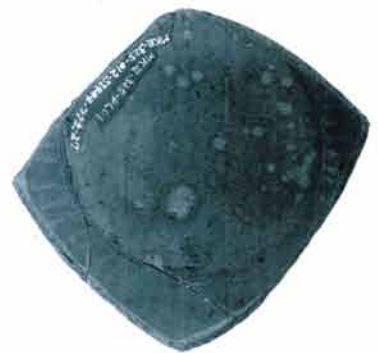
9-9



9-11



9-10



9-13



9-12



9-15



9-16



9-14



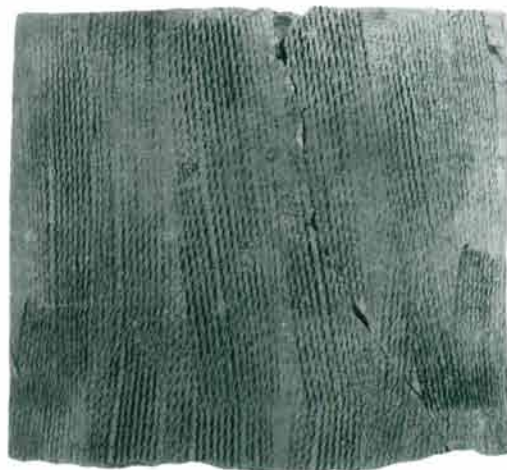
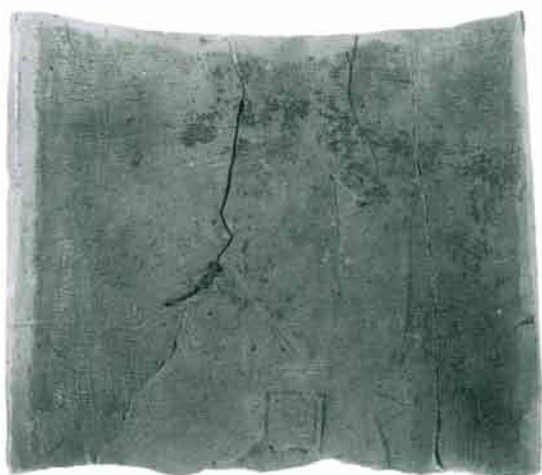
10-17



10-18



10-19



10-20



11-22



11-24



11-21



11-25



11-27



11-28



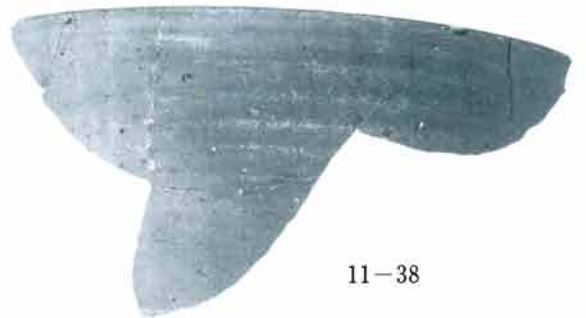
11-29



11-30



11-36



11-38

11-31



11-40



11-39



11-34



11-33



11-32



11-35



11-36

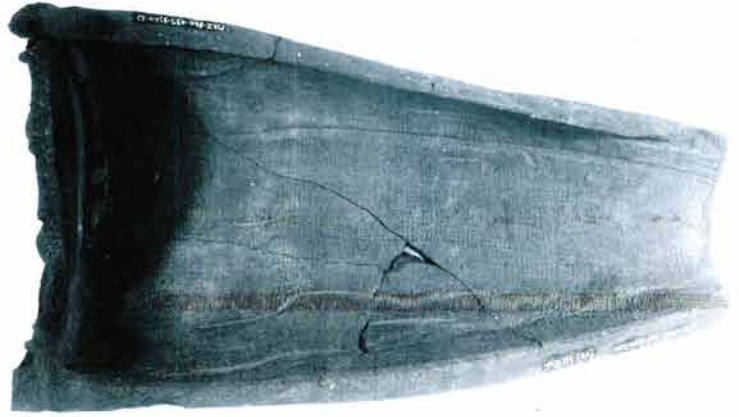


12-41





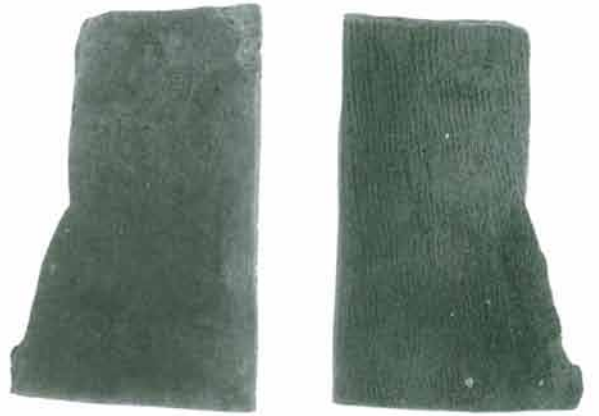
12-42



13-44



12-43



14-46

13-45



14-47



14-48



70



71

欠損部



72





15-51



15-50



15-53



15-52



15-54



15-56



15-55



15-58



15-57



15-59



15-60



15-61



15-62



15-63



73



15-64



15-66



15-65



15-70



15-67



10-20



15-68



15-69



武蔵国分寺跡発掘調査概報 XVII

—東京警察病院多摩分院内下水道管理設に伴う事前調査—

| | |
|-----|---|
| 発行日 | 平成 3 年 3 月 31 日 |
| 編集者 | 国分寺市遺跡調査団 © (団長 滝口 宏) |
| 発行所 | 国分寺市遺跡調査会 〒185 国分寺市戸倉 1-6-1 TEL 0423-25-0111(代表) 東京都国分寺市教育委員会内 |
| 印刷所 | 統計印刷工業株式会社 |

令和 4 年 (2022) 9 月 6 日 デジタル版作成